

和久遺跡

－第10次発掘調査報告書－

ツカザキ病院北館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2020

姫路市教育委員会



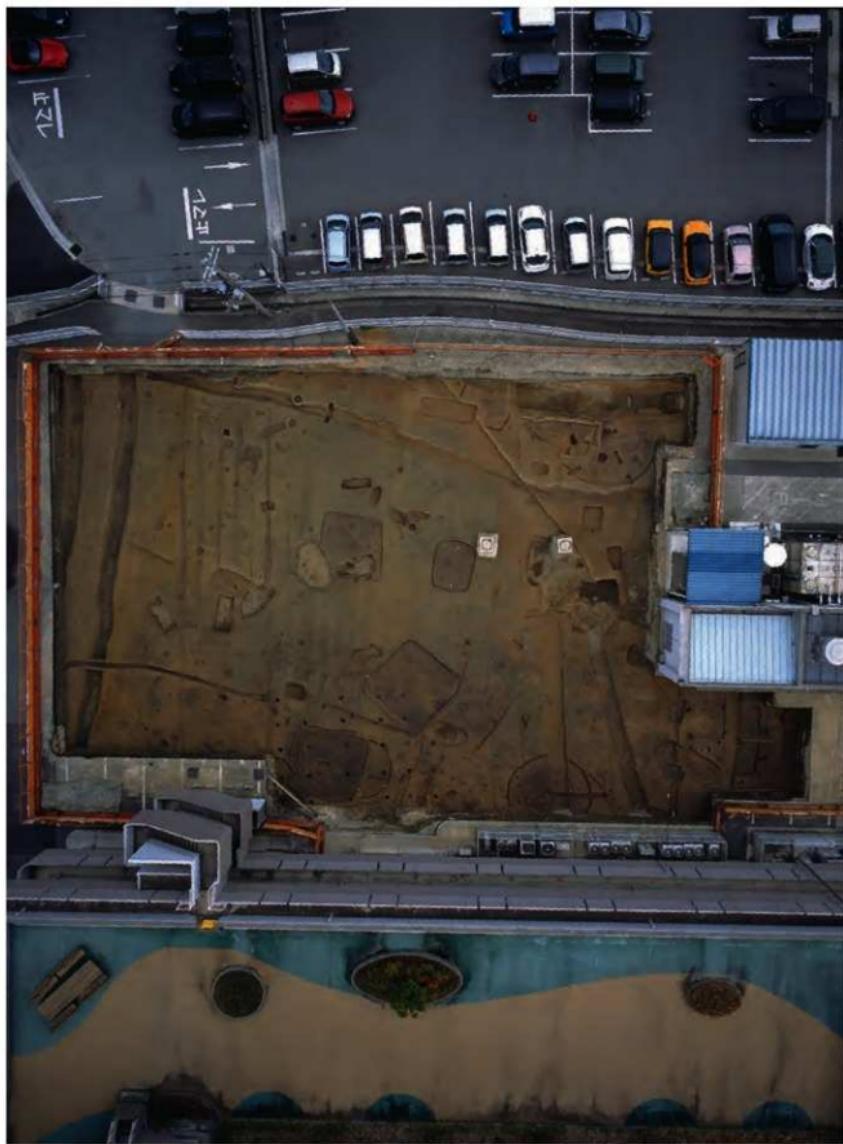
遺跡遠景(南西から)



調査区遠景(北から)



調査区全景(北東から)



調査区空中写真(上が北)



SI2イチマル土坑検出状況(北西から)



SD2土器検出状況(北西から)

序

兵庫県姫路市の南西部に位置する和久遺跡は、平成12年から13年にかけて行った発掘調査（第1次調査）で弥生時代後半から古墳時代初めにかけての100棟あまりの竪穴建物跡が見つかり、同時期の集落遺跡として注目を浴びました。また平成23年に行った発掘調査（第8・9次調査）では20棟ほどの竪穴建物跡をはじめ、ムラの縁辺部を流れていた川跡なども発見され、今では姫路市を代表する遺跡の一つとなっています。

本書は、平成29年9月から平成30年4月にかけて実施した第10次発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、20棟ほどの竪穴建物跡、ムラの縁辺部に掘られた溝跡、古墳時代初めに設置された柵跡などが見つかり、多数の土器も出土しました。これらは、地域の歴史をより豊かなものにするとともに、学問的にも大変意義のあるものであると考えております。

最後に発掘調査の実施及び本書の作成にあたり、多大なご協力を賜りました社会医療法人三栄会ツカザキ病院をはじめ、関係各位に心から御礼申し上げます。

令和2年（2020年）3月31日

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言

- 1 本書は姫路市網干区和久に所在する和久遺跡（県遺跡番号020338）第10次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、社会医療法人三栄会ツカザキ病院北館の建設に先立って実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 発掘調査と報告書作成の費用は、社会医療法人三栄会ツカザキ病院の負担による。
- 4 発掘調査は平成29年9月20日から平成30年4月27日にかけて実施した。調査面積は1270m²である。
- 5 本書の執筆及び編集は姫路市埋蔵文化財センターが行った。
- 6 出土した土器の接合・復元・実測は、株式会社島田組に委託した。図版作成は一部を除いて、国際文化財株式会社に委託した。造構写真図版の作成は、株式会社クレアチオに委託した。
- 7 造構写真及び遺物写真的撮影は、姫路市埋蔵文化財センターが行った。
- 8 本報告にかかる調査の記録、出土遺物などは姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助、ご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。
(敬称略) 社会医療法人三栄会ツカザキ病院 青木哲哉

凡例

- 1 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
- 2 本書で用いる標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
- 3 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の20万分の1地勢図（姫路市）、2万5千分の1地形図（網干）、及び姫路市基本地形図を使用した。
- 4 造構の略称は、以下のように呼称している。
SI：堅穴建物跡、SB：掘立柱建物跡、SA：樋、SK：土坑、SP：柱穴・ピット、SD：溝
※第4章第2節・同第3節中の堅穴建物跡SH14・39については第1次調査の成果による。本書で報告する第10次調査の成果との混同を避けるために、造構名については当時のものを使用している。
- 5 造構・土層等の呼称は、調査時に付したものと基本とするが、整理に際して変更したものもある。
- 6 土色と土器の色調は、「新版標準土色帳」（1999年度版）に準拠した。
- 7 土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載している。その際、文様などについては、残存部位のみの図化にとどめているものもある。また、拓本を用いた破片の実測図は、右から外面の拓本、断面図の順に配列している。
- 8 遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、まとめている。観察表の表記基準は以下のとおりである。
①法量は、残存率が1/4未満の部位に関しては、()を付けて復元した数値を示している。
②色調を併記している場合は、外面、内面の順で表示した。
③SI15出土遺物のうち、138・139・141～151と挿図4～12については第1次調査の整理作業の成果を使用した。図面や観察所見については当時のものを掲載している。
- 9 遺物番号は基本的に通し番号とする。
- 10 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
- 11 第4章の自然科学的分析については、下記のとおり執筆いただき掲載した。
第1節「和久遺跡10次調査区の地形環境」（青木哲哉氏）、第2節-1「和久遺跡出土種実同定」（パリノ・サーヴェイ株式会社）、第3節「和久遺跡出土遺物年代測定および樹種鑑定」（パリノ・サーヴェイ株式会社）

本文目次

序
例言
凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 本発掘調査（第10次調査）	1
第3節 整理作業	1
第2章 遺跡の概要	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 既往の調査	2
第3章 調査の成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	6
第3節 中世の遺構と遺物	16
第4章 自然科学的分析	18
第1節 和久遺跡第10次調査区の地形環境	18
第2節-1 和久遺跡出土種実同定	24
第2節-2 和久遺跡第1次調査SH39-1について	28
第3節 和久遺跡出土遺物年代測定および樹種鑑定	32
第4節 和久遺跡第1次調査SH14-3出土礎板について	39
第5章 まとめ	46
第1節 堅穴建物跡の変遷	46
第2節 SD 2について	46
第3節 中世以降の遺構について	47
第4節 おわりに	47

土器観察表
図版
写真図版

卷頭図版目次

卷頭図版1	遺跡遠景（南西から）
卷頭図版2	調査区遠景（北から）
卷頭図版3	調査区全景（北東から）
卷頭図版4	調査区空中写真（上が北）
卷頭図版5	S12イチマル土坑検出状況（北西から）
SD2	土器検出状況（北西から）

挿図目次

挿図1	調査区周辺の地形分類図 (S=1:35,000) 19
挿図2	調査地付近における微地形の分布 (S=1:3,000) 20
挿図3	遺構検出面からのトレンチ断面図 (S=1:20, S=1:100) 21
挿図4	1次調査 SH39-1 平面図・断面図 (S=1:60) 30
挿図5	1次調査 SH39-2・3 平面図 (S=1:80) 31
挿図6	1次調査 SH39-1 出土遺物 (S=1:4) 31
挿図7	1次調査 SH39-3 出土遺物 (S=1:4) 31
挿図8	暦年較正結果 34
挿図9	1次調査SH14-3出土壁板 (S=1:6) 42
挿図10	1次調査SH14-1・14-3 平面図・断面図 (S=1:80) 44
挿図11	1次調査SH14-3出土土器 (S=1:4) 45
挿図12	1次調査SH14-1出土土器 (S=1:4) 45

表目次

表1	土壤試料洗い出し・炭化種実定結果 25
表2	放射性炭素年代測定及び暦年較正結果 33
表3	炭化米試料の計測値 35

写真目次

写真1	炭化種実 27
写真2	SH39-1 全景（北から） 29
写真3	炭化米出土状況 29
写真4	年代測定試料（1） 36
写真5	年代測定試料（2） 37
写真6	炭化材 38
写真7	1次調査SH14-3出土壁板 43

図版目次

図版1	和久遺跡の位置 (S=1:200,000)
図版2	関連する周辺の遺跡 (S=1:25,000)
図版3	和久遺跡における既往の調査 (S=1:3,000)
図版4	遺構全体図 (S=1:250)
図版5	1次・9次・10次調査平面合成図 (S=1:400)
図版6	調査区西壁土層断面図 (S=1:40)
図版7-1	SK1 平面図・断面図 (S=1:60)
図版7-2	SK2 平面図・断面図 (S=1:30)
図版7-3	SI1 平面図・断面図 (S=1:60)
図版8	SI2 平面図・断面図 (S=1:40)
図版9-1	SI2 炭化材検出状況 平面図 (S=1:50)
図版9-2	SI3 平面図・断面図 (S=1:40)
図版10-1	SK1 平面図・断面図 (S=1:50)
図版10-2	SK4 平面図・断面図 (S=1:60)
図版10-3	SK5 平面図・断面図 (S=1:30)

- 図版10-4 SK6平面図・断面図 (S=1:25)
図版11-1 SI4平面図・断面図 (S=1:50)
図版11-2 SI5平面図・断面図 (S=1:50)
図版12-1 SI5・SI5下部構造平面図・断面図
(S=1:50)
図版12-2 SI6平面図・断面図 (S=1:60)
図版13-1 SI7平面図・断面図 (S=1:60)
図版13-2 SI8床面平面図 (S=1:60)
図版13-3 SI8下層平面図 (S=1:60)
図版14-1 SI9平面図・断面図 (S=1:60)
図版14-2 SK87上層平面図 (S=1:25)
図版14-3 SK87下層平面図 (S=1:25)
図版14-4 SI9下層平面図 (S=1:50)
図版14-5 SD1断面図 (S=1:20)
図版15-1 SI10平面図・断面図 (S=1:50)
図版15-2 SI11平面図・断面図 (S=1:50)
図版16-1 SI12平面図・断面図 (S=1:60)
図版16-2 SI13平面図・断面図 (S=1:60)
図版17-1 SI14平面図・断面図 (S=1:60)
図版17-2 SI15平面図・断面図 (S=1:60)
図版18-1 SI16平面図・断面図 (S=1:50)
図版18-2 SI17平面図・断面図 (S=1:50)
図版18-3 SK7平面図・断面図 (S=1:60)
図版18-4 SP102断面図 (S=1:20)
図版18-5 SK8平面図・断面図 (S=1:25)
図版18-6 SK19平面図・断面図 (S=1:60)
図版18-7 SI18平面図・断面図 (S=1:50)
図版19 SD2・3平面図 (S=1:150)、
断面図 (S=1:50)
図版20 SD4平面図・断面図 (S=1:40)
図版21 中世遺構全体図 (S=1:250)
図版22 SB1・2・SA1平面図・断面図
(S=1:80)
図版23-1 SB3平面図・断面図 (S=1:80)
図版23-2 SB4平面図・断面図 (S=1:80)
図版24-1 SK1出土土器 (S=1:4)
図版24-2 SK2出土土器① (S=1:4)
図版24-3 SK2出土土器② (S=1:4)
図版24-4 SI1出土土器 (S=1:4)
図版25-1 SI1出土石器 (S=1:2)
図版25-2 SI2出土土器 (S=1:4)、
石器 (S=1:2)
図版25-3 SI3出土土器 (S=1:4)
図版25-4 SK3出土土器 (S=1:4)
図版25-5 SK4出土土器① (S=1:4)
図版26-1 SK4出土土器② (S=1:4)、
石器 (S=1:2)
図版26-2 SK5出土土器① (S=1:4)
図版26-3 SK5出土土器② (S=1:4)
図版26-4 SK6出土土器 (S=1:4)
図版27-1 SI4出土土器 (S=1:4)
図版27-2 SI5出土土器 (S=1:4)
図版27-3 SI6出土土器 (S=1:4)
図版28-1 SI7出土土器 (S=1:4)
図版28-2 SI9出土土器 (S=1:4)
図版28-3 SI10出土土器 (S=1:4)
図版29-1 SI11出土土器 (S=1:4)
図版29-2 SI12出土土器 (S=1:4)
図版29-3 SI13出土土器 (S=1:4)
図版29-4 SI15出土土器 (S=1:4)
図版30-1 SI16出土土器 (S=1:4)
図版30-2 SK7出土土器 (S=1:4)
図版30-3 SK8出土土器 (S=1:4)
図版30-4 SD1出土土器 (S=1:4)
図版30-5 SD2上層出土土器① (S=1:4)
図版31-1 SD2上層出土土器② (S=1:4)
図版31-2 SD2中層出土土器① (S=1:4)
図版32 SD2中層出土土器② (S=1:4)
図版33 SD2中層出土土器③
(S=1:4)、石器 (S=1:4)
図版34 SD2下層出土土器①
(S=1:4)、石器 (S=1:4)
図版35-1 SD2下層 出土土器② (S=1:4)
図版35-2 SD4 出土土器 (S=1:4)
図版35-3 その他の遺構 (S=1:4)

写真図版目次

- 写真図版1 調査区南西部全景（北から）
写真図版2 SD 2 土器検出状況（北から）
SD 2 土器検出状況詳細（北西から）
SD 2 手培形土器検出状況（南から）
SD 2 断面状況（北から）
SD 2 土器検出状況（北西から）
調査区南西部東壁断面状況（北西から）
写真図版3 調査区全景（北東から）
写真図版4 SI 1 炭化材検出状況（南西から）
SI 1 全景（北西から）
写真図版5 SI 1 完掘状況（南東から）
SI 1 イチマル土坑検出状況（南東から）
SI 1 炭化材断面状況（南から）
SI 1 炭化材断面状況（南から）
SK93検出状況（東から）
写真図版6 SI 2 炭化材検出状況（北西から）
SI 2 全景（北西から）
写真図版7 SI 2 イチマル土坑検出状況（北から）
SI 2 イチマル土坑検出状況（北東から）
SI 2 イチマル土坑検出状況（北から）
SI 2 イチマル土坑イチ土坑断面状況（西から）
SI 2 イチマル土坑マル土坑断面状況（東から）
SI 3 全景（北東から）
写真図版8 SI 4 全景（北西から）
SI 4 ベッド状遺構断面状況（東から）
SI 4 内SK103検出状況（南東から）
SI 4 土器検出状況（北東から）
SI 4 完掘状況（北から）
写真図版9 SI 5 全景（南から）
SI 5 下部構造全景（北から）
写真図版10 SI 5 石材 1 検出状況（東から）
SI 5 石材 2 検出状況（西から）
SI 5 内SK98検出状況（東から）
SI 5 内SK98断面状況（南東から）
SI 6 全景（東から）
写真図版11 SI 7 全景（北から）
SI 7 イチマル土坑検出状況（北から）
写真図版12 SI 8 全景（北から）
SI 9 全景（北から）
写真図版13 SI 10 全景（北から）
SI 10 内SK62検出状況（北から）
写真図版14 SI 10 内SP109断面状況（北から）
SI 10 内SP109柱痕検出状況（北から）
SI 10 内SP63断面状況（南から）
SI 10 内SK431断面状況（北から）
SI 10 内SK431土器検出状況（北東から）
SI 10 内SK431完掘状況（北から）
写真図版15 SI 11 全景（北西から）
SI 11 全景（南東から）
SI 11 内中央燃焼土坑検出状況（西から）
写真図版16 SI 13 全景（北東から）
SI 14 全景（北東から）
SI 13 内中央燃焼土坑検出状況（北から）
SI 13 内中央燃焼土坑手部断面状況（北から）
SI 13 内中央燃焼土坑土手部断面状況（東から）
写真図版17 SI 15 全景（北から）
SI 16 全景（北西から）
写真図版18 SI 17 全景（南東から）
写真図版19 SI 17 完掘状況（南東から）
写真図版20 SD 2 検出状況（南から）
SD 1・2 切り合い状況（南西から）
SD 2 土器検出状況（北西から）
SD 2 土器検出状況（西から）
SD 2 土器検出状況（北東から）
SD 2 粘土塊検出状況（北東から）
写真図版21 SD 2 土器検出状況（北から）
SD 2 土器検出状況（西から）
SD 2 土器検出状況（北西から）
SD 2 炭集積部検出状況（北から）
SD 2 炭集積部検出状況（北西から）
SD 2 断面状況（北から）
写真図版22 SD 2 完掘状況（南から）
写真図版23 SD 1 断面状況（西から）

SD1断面状況（西から）	写真図版31 SB1・2・SA1検出状況（東から）
SD4全景（東から）	SP137断面状況（西から）
SD4断面状況（西から）	SP139断面状況（西から）
SD4断面状況（西から）	SP144断面状況（西から）
写真図版24 SD4断面状況（北東から）	SP146断面状況（西から）
SD4断面状況（北から）	SP148断面状況（西から）
SD4断面状況（北から）	SP150断面状況（西から）
SD4断面状況（北から）	SP178根石検出状況（西から）
SD4土器検出状況（東から）	写真図版32 SB3検出状況（南から）
写真図版25 SD7検出状況（北から）	SP335断面状況（西から）
写真図版26 SD7断面状況（北西から）	SP336断面状況（西から）
SD7断面状況詳細（北から）	SP337断面状況（西から）
写真図版27 SK19検出状況（北から）	SP342断面状況（西から）
SK19燒土面検出状況（北から）	写真図版33 SD6断面状況（西から）
SK48土器検出状況（東から）	SD6断面状況（西から）
SK54土器検出状況（北西から）	写真図版34 調査区西壁断面（南東から）
SK54土器検出状況詳細（北西から）	調査区西壁断面詳細（東から）
写真図版28 SK2検出状況（南から）	調査区南壁断面（北西から）
SK2土器検出状況（南西から）	調査区南壁断面詳細（北から）
SK2土器検出状況（西から）	現地指導状況（立命館大学 青木哲哉氏）
SK64検出状況（東から）	現地説明会状況
SK64土器検出状況（北東から）	写真図版35 1～3、5、7、10
SK64土器検出状況（南から）	写真図版36 16、18、24、25、38
写真図版29 SP345上層土器検出状況（北西から）	写真図版37 27、28、35、43、44
SP345下層土器検出状況（南東から）	写真図版38 46～49、51、54
SP302断面状況（北から）	写真図版39 55、62、64、65
SP403断面状況（南西から）	写真図版40 66、69、77、79、86、89、92
SP455断面状況（南から）	写真図版41 93、95、98～100
SP462断面状況（南から）	写真図版42 102、105・106、108～111
SP463断面状況（南から）	写真図版43 116、117、119、120、127
SP463石群検出状況（南から）	写真図版44 130、132、133、173、174、177
写真図版30 調査区南東部全景（西から）	写真図版45 176、180、187、189、196、198、206
SK1土器検出状況（南東から）	写真図版46 212、213、217、226、229
SK1土器検出状況（北西から）	写真図版47 230、233、235、238、240、258
SK1土器検出状況（西から）	写真図版48 256、261、267、268、278、282、283
SP480断面状況（北から）	
SP624断面状況（西から）	
SP626断面状況（西から）	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成29年（2017）6月7日に姫路市網干区和久字土井34番4、35番9、36番8、36番9及び字旨戸68番1、71番6において、社会医療法人三栄会ツカザキ病院北館建設工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である和久遺跡（県遺跡番号:020338）に該当する（図版1～3）。社会医療法人三栄会ツカザキ病院より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたため、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。その結果、まずは確認調査によって包蔵地を把握することとなり、同法人から役務提供を受ける形で調査を行った。確認調査成果に基づき、工事により遺構面が影響を受ける1270m²を対象として、記録保存を図るために本発掘調査を実施することとし、平成29年9月1日に姫路市と事業者とで委託契約を締結した。

第2節 本発掘調査（第10次調査）

本発掘調査に際して、姫路市と社会医療法人三栄会ツカザキ病院との間で委託契約を結び、姫路市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査対象は、基礎等の工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲とした。調査面積は1270m²である。また造成土と耕作土・床土、および中世以降の耕作土と考えられる土層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。

調査体制は以下の通りである。

姫路市教育委員会事務局

教育長 中杉隆夫（～平成29年度）

松田克彦（平成30年度～）

教育次長 名村哲哉（～平成30年度）

坂田基秀（平成31年度～）

姫路市埋蔵文化財センター

館長 前田光則

課長補佐 岡崎政俊

係長 森恒裕

庶務 岡本武平（～平成29年度）

竹井宏文（平成30年度～）

生涯学習部

部長 岡田俊勝（～平成30年度）

沖塙宏明（平成31年度～）

技術主任 小柴治子

中川 猛

福井 優

南憲和

関梓（～平成30年度）

文化財課（埋蔵文化財担当）

課長 花輪和宏

技師 黒田祐介（平成31年度～）

課長補佐 大谷輝彦

技師補 山下大輝

技師 黒田祐介（～平成30年度）

技術主任 関梓（平成31年度～）

第3節 整理作業

遺物の整理作業は平成30年度に行った。このうち、接合・復元・実測は株式会社島田組に、図版の一部は国際文化財株式会社に、遺構写真図版作成については株式会社クレアオオにそれぞれ委託した。それらを含めた整理作業全体については、山下と福井が担当した。

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

姫路市 和久遺跡は兵庫県姫路市網干区和久に所在する(図版1)。姫路市は、兵庫県の南西部に位置し、県内第2位の人口を擁する播磨地域の中核となる都市である。市域は播磨平野を中心に、北は中国山地、南は瀬戸内海の島々にかけて広がる。平成18年3月27日に飾磨郡家島町、同夢前町、神崎郡香寺町、宍粟郡安富町と合併し、現在の姿となった。令和元年5月現在、53435km²、人口530,640人である。

姫路は古代以降、山陽道を中心とした陸海交通の要衝にあたり、近世には姫路城の城下町として繁栄してきた。近代以降は軍都に姿を変えたため、第二次世界大戦末期には米軍による空襲を受け、市街地の大半が焼失するという壊滅的な被害を受けた。戦後は、播磨の中核として復興し、平成8年4月全国で初めて中核市に移行し、現在に至っている。

網干区 網干の名称は、養老4年(720)に魚吹八幡神社での祭礼に網を干して放生会とし、それが網干祭と呼ばれるようになったことに由来しているという(橋本1956)。また現在使われている網干区という地名は、東京都の特別区や政令指定都市の区とは異なるものである。これは昭和21年(1946)3月のいわゆるラモート合併によって姫路市と当時の揖保郡網干町が合併した時の地名の名残である。姫路市には網干区以外にも、飾磨区・広畠区・大津区・勝原区・余部区のように「区」のつく地名がある(姫路百年編集委員会1990)。

第2節 歴史的環境(図版2)

弥生時代中期 平野部に所在する遺跡として、川島遺跡、禮特山遺跡、中筋遺跡などが挙げられる。また高地性集落として禮特山山頂遺跡が挙げられる。また近年では、闇ノ口遺跡において中期初めの遺構が検出されているほか、中期後半に位置付けられる堅穴建物跡も検出されていることから今後も周辺において新たな中期の遺跡の検出が予想される。

中期後半から後期にかけては川島遺跡、立岡遺跡が継続するようであるが、いずれの遺跡でも後期初頭の一時期に関しては欠落している。

古墳時代初頭 弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては、川島遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡、鶴遺跡、鶴石田遺跡、上構遺跡、上太田茶屋ノ前遺跡では庄内式の壺が出土している。この点について鶴遺跡ではその保有率が約30%と高く、川島遺跡においては庄内式の壺を保有しない一方で讃岐系の壺を主体とするなどの特徴が指摘される。

第3節 既往の調査

既往の調査 和久遺跡におけるこれまでの発掘調査は本発掘調査が今回を含めて10次、試掘確認調査が4次行われている。以下ではそれらの概要について時系列にてふれておきたい(図版3)。

試掘調査 調査期間 平成12年(2000)10月18日～10月27日

調査面積 64m²

周知の埋蔵文化財包蔵地の近接地であったが、ツカザキ病院本館の建設工事の計画に伴い試掘調査を行った。16箇所設定した調査区のうち15箇所で遺構を確認し、またその半数以上の調査区

で堅穴住居跡を検出した。この結果を受け、当初想定されていたよりも和久遺跡の範囲が広がることが明らかになった（小柴2003）。

第1次調査 調査期間 平成12年（2000）12月12日～平成13年（2001）5月31日

調査面積 2640m²

先の試掘調査の結果を受け、工事の影響を受ける範囲の本発掘調査を行った。検出した遺構は、弥生時代中期後葉の土坑25基、弥生時代後期から古墳時代初頭の堅穴建物跡約100棟、土坑約80基、柱穴約1800基、溝約10条と奈良時代以降の掘立柱建物跡や溝である（小柴2003・2010）。このうち、堅穴建物跡の複雑な重複関係や出土した土器の年代観によってその平面形の変遷や播磨特有の燃焼施設であるイチマル土坑の実態に迫ることができたことは最大の成果といえよう（小柴2003・2010）。また大量に出土した地元産の土器に加えて、讃岐、阿波、山陰、河内といった遠隔地からの搬入土器も少なからずみられた。そして、ガラス製勾玉・小玉・碧玉製管玉といった交易品も出土するなど、他地域との活発な交流をうかがわせる資料が得られた。

本調査により、和久遺跡は播磨を代表する古墳時代初頭の集落遺跡の1つであることが明らかになり、以後注目を集めることになる。

第2次調査 調査期間 平成13年（2001）4月26日～4月27日

調査面積 76m²

第1次調査の調査区から北へ約150mの地点で調査を行った。耕土直下で地山が検出される箇所もあり、土坑やピット、溝などを確認した。このうち、北東・南西方向に延びる溝は幅1.6m、深さ約1mの断面V字形を呈し、上層から弥生時代後期の土器が多数出土した（大谷2003）。

第3次調査 調査期間 平成16年（2004）2月13日～3月26日

調査面積 596m²

1次調査の調査区の北西側で調査を行った。堅穴住居跡4棟、溝15条、土坑15基、ピット123基を検出した。このうち、時期の明らかなものは、弥生時代後期の溝2条と土坑2基、古墳時代初頭の堅穴住居跡1棟である。溝からは讃岐産の甕が出土した。

試掘確認1次 調査期間 平成16年（2004）4月1日～6月15日

調査面積 632m²

和久遺跡の範囲確認のために4ヶ年計画で試掘確認調査を実施することになった。試掘確認第1次調査は45箇所に調査区を設定した。北西端の調査区で検出した古墳時代の土坑からは、土師器とともに滑石製有孔円盤が出土したことから、遺跡の範囲は北西側へ大きく広がることが明らかになった。そして、第1次調査の調査区の東側と南側のトレンチでは、地形の傾斜と低湿地状の堆積がみられ、集落が立地する微高地が、南～南西方向に傾斜していることがわかった。また、その地形の落ちよりもさらに南東側に設定した調査区では、畦畔状の遺構や堅穴住居跡が確認できたことから南東側に別の集落域が存在する可能性が極めて高くなつた。

第4次調査 調査期間 平成16年（2004）12月9日

調査面積 4 m²

第1次調査の調査区の北側に隣接する地点で調査を行った。遺構の密度は低かったものの、試掘確認第1次調査で確認した古墳時代初頭の溝の埋土と類似する土層を確認している。

試掘確認2次 調査期間 平成17年（2005）2月10日～3月25日

第2章 遺跡の概要

調査面積 200m²

試掘確認調査の2年目として、3箇所の調査区を設定した。第1次調査の北西側に設定した調査区では地形が西側へと傾斜しており、第1次調査で検出した微高地の北西側の落ちを確認することができた。また、試掘確認第1次で検出した畦畔状遺構付近に設定したトレンチではその統きを確認するとともに、5棟の住居跡を検出した。いずれも弥生時代後期のものである。

以上より第1次調査で検出したものとは別に南東側にも集落域が存在することが明らかになり、和久遺跡の南東側への広がりは、確実なものとなった。

第5次調査 調査期間 平成17年（2005）9月16日

調査面積 65m²

狹小な調査区であったが、弥生時代前期と思われる土坑を1基確認した。

第6次調査 調査期間 平成17年（2005）10月25日

調査面積 65m²

第3次調査と同じ敷地内で調査を行った。平安時代のピット14基、弥生時代の土坑2基、平安時代と思われる落ち込みを確認した。いずれの遺構からも土器の小片が出土している。

試掘確認3次 調査期間 平成18年（2006）2月9日～3月24日

調査面積 250m²

範囲確認を目的とした試掘確認調査の3年目である。調査対象範囲の北西端に設定した調査区では、南北方向の溝を検出した。土層の堆積状況及び大量に出土した土器の様相から、溝は弥生時代後期半ばに人為的に埋め戻された可能性がある。この溝以西では、地形の傾斜がみられ、微高地の西側縁辺部にあたると考えられる。

以上より、和久遺跡の存在時期が従前考えられていたよりも長期に及ぶことがわかった。また、第1次調査で確認した微高地の西端を検出することができた。

試掘確認4次 調査期間 平成19（2007）2月8日～3月19日

調査面積 150m²

第1次調査の北西側にある地形の高まりの性格を把握するために調査を行った。調査の結果、この高まりは人為的なものであることがわかったものの、その性格を特定するには至らなかつた。

第7次調査 調査期間 平成21（2009）12月7日～12月9日

調査面積 42m²

調査区全体で低湿地状の堆積を確認した。遺物は、弥生土器の細片が出土したにとどまる。旧地形が東から西へ傾斜していることがわかった。

以上の試掘確認調査によって、和久遺跡は、従前考えられていたよりも広範囲に展開することが明らかになった。そのため周知の埋蔵文化財包蔵地の変更の報告を兵庫県教育委員会文化財室（当時）に行った。

第8次調査 調査期間 平成23年（2011）3月15日～3月19日

調査面積 36m²

社会医療法人三栄会ツカザキ病院新館建設計画に伴い、まず確認調査を行うことになった。調査対象地に9箇所の調査区を設定した。そのうち2・3・7区において、竪穴住居跡と考えられ

る遺構を検出した。出土遺物から、古墳時代初頭に比定することができた。また低位部にある7～9区では、水成堆積層と考えられる砂層が検出され、ここでも古墳時代初頭の土器が出土した。この砂層は、集落域縁辺部を流れた旧河道によって構成された可能性が考えられた。これらの成果から遺構密度が調査対象地全域に広がることが明らかとなった。

第9次調査 調査期間 平成23年（2011）7月12日～12月24日

調査面積 1347m²

堅穴住居跡21棟、木棺墓の可能性がある土坑3基、ピット101基、溝1条、旧河道1条を検出した。住居跡は、互いに近接もしくは切りあうものが多く、ほぼ同位置での建て替えが行われていたものもあった。これらの成果から、弥生時代中期後半の住居を確認することができた。この成果から、集落の形成時期がこれまで考えられていたよりも一段階古くなることが確実となつた。

また初めて木棺墓の可能性がある土坑を数基検出したことで、和久遺跡の景観が一層具体的に復元することが可能となつた。

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

調査地の層序は場所によって異なるため、調査区西壁を基準として述べる。図版6によると現地表は標高5.1~5.2mで北から南へとわずかに地表面から傾斜する。現地表面から0.8~1.3mの厚さで現代盛土が堆積し、以下、0.08~0.2mの厚さで灰色細砂・オリーブ褐色細砂からなる耕土を経て、オリーブ褐色粘質土からなる地山に至る。なお調査区西側には耕土と地山の間に傾斜地に堆積した暗灰黄色粘質土及び細砂がみられる。調査は地山面で行った。

第2節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭を検出した。以下では、それについて時期ごとにみていくことにする。

弥生時代中期中葉

SK1（図版7-1、24-1）

検出状況 調査区南東部で検出した。後述するSI15・SK3に切られる。

形状・規模 本遺構の周辺は、SK3や搅乱による削平を受けているため平面形が不明であった。そのため、サブトレンチを設定するなど遺構の規模・性格の把握に努めた。その結果、検出面から約0.1mの厚さで暗オリーブ褐色細砂が堆積し、この下層で地山を確認することができた。したがって暗オリーブ褐色細砂が遺構埋土である可能性が高く、土坑として認識した。

出土遺物 ほぼ完形に復元できる広口壺1が1点出土した。

時期 弥生時代中期中葉と考えられる。

SK2（図版7-2、24-2・3）

検出状況 調査区北部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西0.67m・南北1.3m・深さ0.3mを測る。掘方は梢円形を呈する。

出土遺物 遺物は主に上層から広口壺2~5、壺6~8、瓶9、高杯10・11が出土した。

時期 弥生時代中期中葉と考えられる。

弥生時代中期後葉

SI1（図版7-3、24-4、25-1）

検出状況 調査区北東部で検出した。SI11・SD6に切られる。

形状・規模 周壁溝の形状から平面形は円形を呈すると考えられる。SI11・SD6によって建物の半分以上が失われている。検出した周壁溝からの復元径は約6.0mである。検出面からの深さは0.08mで、床面の標高は4.12mである。

屋内施設 周壁溝・SP420・422~424・SK95・イチマル土坑（SK96）を検出した。柱穴は、位置や構造から主柱穴を構成するものと考えられる。柱穴の平面規模は、径0.15~0.44m・深さ0.55~0.63mを測る。掘方はいずれも円形を呈する。柱痕は確認できなかった。イチマル土坑（SK96）の平面規模は、東西1.6m・南北1.6mを測る。イチ土坑を南側に配し、マル土坑が北側に位置する。イチ土坑は長軸0.84m・短軸0.2m・深さ0.4mであり、マル土坑は長軸0.6m・短軸0.38m

である。

またマル土坑の東西隣では径約0.3mのピットを検出した。

出土遺物 埋土からは広口壺12、壺13、高杯14・15、環状石斧の未製品と思われる石製品18が出土した。また、SK95からは大型の鉢16と小型器台17が出土した。出土遺物の年代観から、SK95は古墳時代初頭に本造構を掘り込んだ別の造構である思われる。

時期 弥生時代中期後葉に位置づけられる。

SI2（図版8、9-1、25-2）

検出状況 調査区南部で検出した。SI3・7・8に切り込まれる。

形状・規模 直径4.1mの円形を呈する。検出面からの深さは0.12mで、床面の標高は約3.9mである。周壁溝内の面積は、12.43m²である。

屋内施設 周壁溝とイチマル土坑を検出した。周壁溝は、幅0.11mを測る。イチマル土坑は、SI2中央部で検出した。平面規模はやや楕円形を呈し、東西約1.42m・南北1.49mを測る。イチ土坑を南側に、マル土坑を北側に配置する。また周間に盛土による土手を巡らしていることから小柴分類のB4にあたる（小柴2004）。イチ土坑は、長軸約1.0m・短軸0.3m・深さ約0.1mであり、マル土坑は、長軸0.9m・短軸0.5m・深さ約0.3mである。イチ土坑・マル土坑ともに、埋土には炭が多く含まれ、特に下層は炭の單層に近い状況であった。またイチ土坑とマル土坑の間には、0.08mほどの土手状造構を確認した。この土手状造構の上面には炭が堆積し、イチ土坑からマル土坑へと、炭が流れ込むような状態を確認できた。土手状造構が盛土によるものか地山削り出しによるものを確認するため断面調査を行った。その結果、SI2の床面を構築する際に地山を掘り込み、イチマル土坑の土手を造成するために盛土を行ってから床面を構築していることを確認した。

出土遺物 広口壺19、直口壺20、壺21、楕形高杯22・23、石鍤24、サスカイト製剤器25が出土した。

時期 弥生時代中期後半に位置づけられる。

SI3（図版9-2、25-3）

検出状況 調査区南部で検出した。後述するSI7・8・16に切りこまれ、造構の約半分は搅乱されている。

形状・規模 平面規模は、直径約4.0mを測る円形を呈する。検出面からの深さは、約0.1mで床面の標高は、約3.9mである。

屋内施設 周壁溝・SP536を検出した。周壁溝の規模は、幅約0.1m・深さ約0.1mを測る。SP536の平面規模は、径0.18m・深さ0.24mを測る。

出土遺物 楕形高杯26の小片が出土した。

時期 弥生時代中期後葉に位置づけられよう。

SK3（図版10-1、25-4）

検出状況 調査区東部で検出した。

形状・規模 平面規模は、東西4.3m・南北2.2m・深さ0.3mを測る。掘方は隅丸長方形を呈する。土坑西部の底面では焼土面を検出した。

出土遺物 図化できたのは、壺27と無頸壺の把手28のみであった。

時期 弥生時代中期後葉と考えられる。

第3章 調査の成果

SK 4 (図版10-2、25-5、26-1)

検出状況 調査区南部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西4.1m・南北約2.0m・深さ0.8mを測る。掘方は梢円形を呈する。

出土遺物 3層から4層にかけて土器が多量に出土した。5層で炭層を確認した。広口壺29~32、壺33、無頸壺34、壺35~40、高杯41~43、瓶44、サヌカイト製打製石器46・47が出土した。

時期 弘生時代中期後葉に位置づけられる。

SK 5 (図版10-3、26-2・3)

検出状況 調査区中央部で検出した。SI13に切られる。

形状・規模 平面規模は東西3.0m・南北3.5mを測り、掘方は梢円形を呈する。

出土遺物 広口壺48、壺49が出土した。

時期 弘生時代中期後葉に位置づけられる。

SK 6 (図版10-4、26-4)

検出状況 調査区北西部で検出した。遺構の中央部が後世の掘削により搅乱されている。

形状・規模 平面規模は東西1.3m・南北5.9m・深さ0.07mを測る。

出土遺物 無頸壺50、壺51、高杯52・53、蓋54が出土した。

時期 弘生時代中期後葉に位置づけられる。

弥生時代後期後葉

SI 4 (図版11-1、27-1)

検出状況 調査区南部で検出した。遺構の中央部は後世に削平を受けている。

形状・規模 平面規模は直径5.51mを測り、円形を呈する。検出面からの深さは0.18mで床面の標高は約3.9mである。

屋内施設 周壁溝・SP404・525・527・SK103・106・ベッド状遺構を検出した。周壁溝は、幅0.08~0.16m・深さ約0.1mを測る。柱穴は、その位置から主柱穴を構成するものと考えられる。規模は、径0.22~0.26mで、深さは0.14~0.3mであった。SK103は建物内中央部に位置する。平面規模は、長軸0.88m・短軸0.6m・深さ約0.3mを測る。掘方は不定形を呈する。ベッド状遺構は盛土により、周壁溝に沿って巡る。幅約0.7~1.0m・高さ0.12mを測る。なお、本遺構の検出時に長頸壺55が横転した状態で出土し、その下半分が盛土内に埋没していた状況を確認した。精査の結果、周間に掘方は認められなかったため、本遺構築時に埋められたと考えられる。

出土遺物 長頸壺55・56、広口壺57、壺58・59、壺60~62、有稜高杯63、高杯64~67、鉢68、器台69が出土した。

時期 弘生時代後期後葉に位置づけられる。

SI 5 (図版11-2、12-1、27-2)

検出状況 調査区中央部で検出した。遺構間での切り合いはなく、独立した建物である。

形状・規模 平面規模は、長軸3.4m・短軸2.78mを測り、平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは、約0.1mであり、床面の標高は4.0mである。地山を約0.2m掘り込み、炭混じりの細砂土を入れた後、貼床で床を構築する構造である。

屋内施設 周壁溝・SK102・南北中軸上に並ぶ石材1・2を検出した。周壁溝の規模は、幅0.14m・深さ約0.1

mであり、周壁溝内の面積は8m²である。

石材1・2はともに長軸0.2m・短軸0.14mほどである。これらの周囲には掘方は確認できなかつたため、床面の構築時に据え付けられたと考えられる。また、これらの石はどちらも平坦面が上向きであり、柱を支えるための礎石であった可能性が高い。

貼床下層では、SK102を検出した。平面規模は、東西1.6m・南北0.3mを測る。この土坑最下層には、0.02~0.03mほどの厚さで炭が堆積していた。SK102については、本建物跡とは別の遺構である可能性も考えられるが、既述した貼床とその下部構造であるシルト混じりの細砂土との間層に形成されていることから、SI5床面の構築と関連する遺構として評価しておきたい。

下部構造 床面を掘り下げるとSK104を検出した。SK104は、長軸0.65m・短軸約0.2mを測る溝状の遺構である。遺物は出土しなかった。

出土遺物 壺70と器台71の極小片が出土した。

時期 概ね弥生時代後期後葉に位置づけられよう。

庄内期以降

SI6 (国版12-2、27-3)

検出状況 調査区南東部で検出した。SK3・SD8に切られる。

形状・規模 平面規模は東西約4.3m・南北約5.0mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは約0.1mで、床面の標高は3.97mである。

屋内施設 周壁溝・SP345・349・350・359・362・369・467・468を検出した。周壁溝は東半分が残存していた。柱穴の平面規模は、径0.12~0.2m・深さ0.12~0.3mを測る。SP349・350は、その位置から主柱穴の可能性が考えられるが、断定することはできない。

出土遺物 床面に接した状態で壺72が出土し、SP349からは壺73が、SP345からは広口壺74・有棱高杯75・高杯76、器台77が、SP468からは鉢78が、SP362からは庄内形壺79がそれぞれ出土している。

時期 庄内式併用型のなかでも前半に位置づけられよう。

SI7 (国版13-1、28-1)

検出状況 調査区南部で検出した。後述するSI16に切られ、SI2・3・8を切り込んで構築される。

形状・規模 南北4.69m、東西5.04mの平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.24mで床面の標高は3.92mである。

屋内施設 SP320・321・470・473・512・513・イチマル土坑(SK68・SK69)を検出した。イチマル土坑のうち、イチ土坑(SK69)は南北0.7m・東西1.14mを測り、不定梢円形を呈する。またマル土坑(SK68)は、南北0.5m・東西0.65mを測り、掘方上部は大きく、下部は小さい2段構造である。土坑底部には、炭が集積する状況であった。さらに土坑上部の北東・北西・南西角ならびに土坑の西側においてピット状の窪みを検出した。

柱穴の平面規模は、径0.27~0.31m・深さ0.12~0.4mである

出土遺物 出土遺物のうち壺80~84、瓶もしくは有孔鉢85、鉢86・87は床面に接した状態で、脚台部88は床面から離れた状態で出土した。鉢89はSP473から、高杯90はSP470から、壺91は周壁溝から、壺92・93は貼床からそれぞれ出土した。

第3章 調査の成果

時 期 庄内式併行期の中でも後半に位置づけられよう。

SI8 (図版13-2・3)

検出状況 調査区南部で検出した。SI7・16に切られ、SI2・3・19を切り込んで構築されており、一部は搅乱されていると考えられる。

形状・規模 平面規模は南北4.0m・東西3.9mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは約0.1mで床面の標高は3.92mである。

屋内施設 中央部からわずかに東の位置において、SK75を検出した。土坑の平面規模は、南北0.39m・東西0.6m・深さ約0.1mである。その他の遺構は、確認できなかった。

下部構造 貼床部を掘り下げると、南北方向から東方向に直角に折れ曲がる溝状の遺構を地山面において検出した。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時 期 遺構の切り合いから庄内式併行期に推定できる。

SI9 (図版14-1～4、28-2)

検出状況 調査区中央部で検出した。搅乱により建物の西半部が判然としない。

形状・規模 平面形は、残存状況から隅丸方形であったと考えられる。平面規模は南北4.8m・東西3.3m以上で、検出面からの深さは0.15m、床面の標高は3.98mである。

屋内施設 周壁溝の一部・SP402・SP406・SK72・87を検出した。周壁溝は、幅0.12～0.2m・深さ0.08mを測る。SP402・406の平面規模は、径0.2m・深さ0.1～0.36mを測る。検出位置から、主柱穴である可能性がある。またSK72は、屋内中央部で検出した。埋土からは炭集積部を検出したため、燃焼施設であると考えられる。東中央部では、SK87を検出した。平面規模は、最大径0.7m・深さ0.2mを測る。埋土上層と下層からそれぞれ鉢と壺が出土した。

下部構造 床面においてサブトレニチを設定したところ、地山の堆積土とは異なる土層を確認したため、調査を進めた結果、中央部に径約3.0mの窪みを検出した。SI9構築時に、整地した痕跡である可能性も考えられる。

出土遺物 床面に接した状態で、壺94・96、高杯97が、SK87からは、複合口縁壺95、小型丸底土器98、壺99、大型の鉢100が出土した。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SI10 (図版15-1、28-3)

検出状況 調査区中央部で検出した。建物跡南半の一部は後世の搅乱を受ける。

形状・規模 平面規模は長軸4.2m・短軸4.1mを測り、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは、0.05mで床面の標高は3.95mである。

屋内施設 SP63・109、SK62・431を検出した。SP63は、径0.45m以上・深さ0.5m、SP109は、径0.42m・深さ0.45mを測る。掘方最下部では、柱痕を検出した。SP63・109は、その位置と規模から主柱穴と考えられる。SK62は、径0.5m・深さ0.1mを測り、掘方は円形を呈する。土坑内中央部以外は炭で覆われており、燃焼施設である可能性がある。SK431は、0.5m四方のおよそ隅丸方形を呈する。深さは0.23mを測る。

出土遺物 床面に接した状態で壺101が、床面から離れた状態で台付鉢102が、SK62からは壺103・104が、SK431からは壺105～109が出土した。なお、壺105・106は同一個体であることが実測

- 後に判明した（写真図版43）。
- 時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。
- SI11 (図版15-2、29-1)
- 検出状況 調査区北東部で検出した。SD 6に切られる。
- 形状・規模 SD 6によって遺構の半分以上が搅乱を受けるため、全容は判然としない。検出面での規模は、東西4.85m・南北2.0m以上である。検出面からの深さは0.22m、床面標高は3.90mである。
- 屋内施設 周壁溝の一部とSK110を検出した。周壁溝の平面規模は、幅0.16m・深さ0.08mである。SK110の平面規模は径約0.7m・深さ0.2mである。土坑上層には炭が集積していたため、燃焼施設である可能性も考えられる。
- 出土遺物 床面から遊離した状態で鉢110、壺116～119が出土し、SK110から壺111、壺112・113、鉢114が出土した。
- 時 期 庄内式併行期の中でも後半に位置づけられよう。
- SI12 (図版16-1、29-2)
- 検出状況 調査区北東部で検出した。SD 6に切られる。
- 形状・規模 平面規模は東西3.54m・南北3.1m以上である。建物跡の北側は、調査区外へと延びる。床面標高は4.1mを測る。
- 屋内施設 周壁溝とSK98を検出した。周壁溝の平面規模は、幅0.08m・深さ0.08mである。SK98の平面規模は、径0.62m・深さ0.23mを測る。掘方は円形を呈する。検出面から0.08m下には、炭が集積していた。また周壁溝に沿うように、幅0.9～1.0mの僅かな段状の高まりを確認した。この高まりは、断面観察においては不明瞭であるが、ベッド状遺構の可能性も否定できない。
- 出土遺物 床面の炭層検出時に壺120、有稜高杯121、丸底土器122が出土した。
- 時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられよう。
- SI13 (図版16-2、29-3)
- 検出状況 調査区中央部で検出した。周壁溝北東部の一部がSI18に切られる。
- 形状・規模 平面規模は南北5.05m・東西5.0mを測り、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.2mである。床面標高は、約3.7mである。
- 屋内施設 SP538・540・545・667・668・SK83・84を検出した。柱穴は、検出位置からいずれも主柱穴を構成するものとみられる。平面規模は、径0.3～0.35m・深さ0.3～0.5mを測り、掘形は円形を呈する。また屋内中央部では、SK83を検出した。平面規模は、東西0.7m・南北0.5m・深さ0.05mを測る。掘方は梢円形を呈し、土手状の高まりが一部残存していた。燃焼施設である可能性が高い。なお、SK83の南側約1.5～2.0mの範囲で、炭の集積が確認できた。また建物跡内南東部では、SK84を検出した。平面規模は、南北1.48m・東西1.3m・深さ0.2mを測り、掘方は半円形を呈する。
- 出土遺物 床面に接した状態で、壺123、鉢124、有稜高杯125、有段高杯126が、床面から遊離した状態で鉢の脚台部127が、SK83から壺128が、周壁溝から壺129、SP538からは壺130が、SK84からは有稜高杯131・132、楕円高杯133、貼床からは壺134～136、高杯137がそれぞれ出土した。
- 時 期 庄内式併行期のなかでも後半の古相に位置づけられよう。

第3章 調査の成果

SI14 (図版17-1)

検出状況	調査区中央部で検出した。SI13に切り込まれており、貼床部を掘り下げたところ、周壁溝・ピットなどを検出した。
形状・規模	平面規模は南北4.6m・東西4.82mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは約0.2mで、床面の標高は4.1mである。周壁溝は幅0.18m・深さ0.05~0.15mを測る。
屋内施設	周壁溝の一部とピットを検出した。周壁溝の規模については上述したとおりである。ピットは、建物跡内中央部から東半部にかけて17基検出した。径はいずれも0.08mほどである。深さは0.14~0.15mを測る。ピット以外の遺構は確認できなかった。
下部構造	地山面ではSP558・560~569・592~597を検出した。その性格は判然としない。
出土遺物	土器の極小片が出土した。
時期	出土土器からの時期の比定は困難であるが、遺構の切合関係から庄内式併行期の後半に収まると考えられる。

SI15 (図版17-2、29-4)

検出状況	調査区南東部で検出した。遺構の大部分は調査区南側に位置し、今回検出したのは北西部の一部のみであるが、第1次調査SH01としてすでに調査されていることから、以下SH01の調査成果を中心に概要を述べる。
形状・規模	平面規模は長軸4.96m・短軸4.56mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは0.08mである。
屋内施設	第1次調査SH01では、柱穴・土坑・周壁溝・ベッド状遺構を検出した。柱穴は、検出位置からいすれも主柱穴を構成する。さらに建物内南辺中央部に土坑を検出した。掘方は最大径0.56mの楕円形を呈し、深さは0.28mを測る。周壁溝は幅0.16m・深さ0.12mを測る。またベッド状遺構は、盛土によって造成されており周壁溝に沿って巡る。平面規模は、幅0.96m・高さ0.08mを測る。今回の調査区内では、周壁溝の北西部を検出した。
出土遺物	床面から遊離した状態で、広口壺138・無頸壺139・壺140、甕141・142・144、庄内型甕143・145、高杯146・147・148が、SK01から小型器台149が、SP06から高杯150、小型器台151、周壁溝からは甕152がそれぞれ出土した。
時期	庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SI16 (図版18-1、30-1)

検出状況	調査区南部で検出した。SI7を切り込んで形成される。
形状・規模	平面規模は長軸約3.8m・短軸1.6m以上である。本遺構の大部分は調査区外へと延びると考えられる。後世の搅乱などにより残存状態が悪く、周壁溝を断続的に検出したにとどまった。
屋内施設	周壁溝・SP468を検出した。周壁溝は、幅0.1~0.12m・深さ約0.1mを測る。SP468は、径0.3m・深さ0.51mを測る。主柱穴である可能性が考えられる。
出土遺物	周壁溝から甕153が、床面では甕154がそれぞれ出土した。
時期	出土遺物からの特定は困難であるが、概ね庄内式併行期の範疇に収まると思われる。

SI17 (図版18-2)

検出状況	調査区北東部で検出した。SD 6によって半分以上が搅乱される。
形状・規模	平面規模は東西3.18m・南北0.98m以上である。床面の標高は3.92mを測る。周壁溝の規模は0.1~0.2m・深さ0.08mである。

屋内施設 床面南部においてSK617を検出した。SK617の平面規模は、長軸0.44m・短軸0.4m・深さ約0.1mで、掘方は隅丸方形を呈する。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 切り合いから庄内期と考えられる。

SK 7 (図版18-3、30-2)

検出状況 調査区北部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西3.84m・南北1.42m・深さ0.27mを測る。掘方は隅丸長方形を呈する。土坑西部の底面では焼土面を検出した。

出土遺物 焼土面検出中に長頸壺155、甕156～158、高杯159・166、甕蓋160が、そこから遊離した状態で、甕164・165、高杯167～169、有孔鉢170、小型器台171が出土した。

時期 出土土器の所属時期にややばらつきがみられるが、概ね庄内式併行期の範疇で収まると思われる。

SP102 (図版18-4・35-3)

検出状況 調査区北西部で検出した。

形状・規模 径0.2m・深さ0.32mである。掘方は円形を呈する。

出土遺物 甕281が出土した。

時期 1点のみの出土であるために、時期の比定は難しいが、庄内式併行期の後半からいわゆる布留式に位置づけられよう。

SK 8 (図版18-5、30-3)

検出状況 調査区北部で検出した。

形状・規模 平面規模は長軸1.54m・短軸0.88m・深さ0.35mを測る。掘方は梢円形を呈する。

出土遺物 埋土中層から土器が多量に出土した。ただし土器は溝遍なく全体的に集積するという状況ではなく、土坑長軸方向に平行して列状に出土した。出土した器種は、在地の甕172、庄内形甕173～179、高杯180～182である。

時期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SD 2 (図版19、30-5～35-1)

検出状況 調査区西部で検出した南北方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は幅1.45～1.50m・延長28.5mで、南北ともに調査区外へと延びる。溝の深さは、南北両端において約0.6mを測り、断面形は逆台形である。調査時には遺物の出土状況、埋土の違いから上・中・下層と大別して行った。

遺物の出土状況 溝内出土遺物の大多数は中層上面から出土している。遺物の出土分布は溝全体にわたり、中層のうち溝中央部および東肩にかけて集中するという状況を確認した。こうした状況から遺物は、SD 2 東側に位置する集落側から投棄されたと考えることができる。下層については概ねSD 4 と交差する部分の南北で埋土の状況が異なる。SD 4 以北は、土色が灰オリーブ色を呈しており、水成堆積層と考えられる。対して SD 4 以南は中層と分類した埋土に類似しており、土器の出土量も SD 4 以北に比べ多い印象である。これらの状況から SD 2 は、初期段階では自然に埋まりつつあったものが途中から土器の投棄など人が加わって埋まつたものと捉えることができる。

第3章 調査の成果

出土遺物 上層からは壺187・188、高杯189・190、器台191とともに外來系の広口壺192、壺193、高杯194が出土した。中層出土として図版31-2～図版33に掲載した資料のうち、壺197・198、外來系の広口壺205と壺215、高杯222・228、鉢232・233、砥石241は中層を掘り下げ時に出土したもので、それら以外の大半は、先に述べた中層上面でまとめて出土した一群であることをここで付記しておく。195は長頸壺、196・199～204は広口壺である。206～212は在地の壺、213・216～221は外來系の壺である。在地の壺のうち206～211は外面にタタキを残す一群で、212は最終的にハケメで仕上げている。213は吉備地域、216～221は譜岐地域からの搬入品と思われる。このうち、217・218・219の外面調整において、二次調整である縱方向のミガキの停止位置が胴部最大径付近から胴部下半と差がある点については、何に起因するかは不明であり、今後も注視する必要があろう。223～227・229～231は高杯である。このうち、223～225の有稜高杯と226の楕円高杯は弥生時代後期後半に比定され、土器群のうちでもやや古相を呈する。234は脚台部、235は把手付鉢、236は器台、237は外來系の鉢である。238は大型鉢、239はやや古相を呈する器台、240は手培形土器である。

下層では、広口壺242・244、高杯243、外來系の高杯245、脚台部246といった弥生時代中期後半とともに、敲き石247といった石器もみられる。それとともに長頸壺248・249、外來系の広口壺250、有稜高杯251、大型鉢252・253といった後期後半の遺物が一定割合を占める。そして、254～268にみられる庄内式併行期の土器群が加わる。254～257は広口壺、259～263は壺である。259～261は在地の壺で、外面にタタキを残す。262・263は外來系で、前者は器形が近江地域に、後者は譜岐地域からの搬入品と考えられる。264～267は高杯の脚部、268は有孔鉢である。

時期 上層と中層上面の土器群は弥生時代後期後半から庄内式併行期の範疇に収まり、中層から下層については一部に弥生時代中期後半の遺物を含みながらも大半は同後期後半のものが占めている。漸移的ではあるが、層位毎に時期差が窺える。

SI18（図版18-7）

検出状況 調査区中央部で検出した。SI13を切る。ほぼ全城が残存せず周壁溝の一部を検出したのみである。

形状・規模 堅穴建物の規模や形状は判然としない。

屋内施設 周壁溝の一部を検出した。平面規模は幅約0.2m・深さ約0.1mを測る。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 遺物がないため判然としないが遺構の切り合いから庄内式と考えられる。

SD 4（図版20、35-2）

検出状況 調査区南西部で検出した東西方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は、幅0.3m・延長14.0mで、溝の西延長部は、調査区外へと延びる。溝の深さは、西端0.14m・中央部0.36m・東端0.2mである。断面形状は、掘方が底に対して垂直方向となる。

先述したSD 2が埋没した後に形成されている。断面形状等から布掘りの構である可能性を念頭に置き、調査を進め、横断面と縦断面を観察するためのセクションを設けた。その過程でSD 4中に径0.1～0.2mのピット状の輪郭を検出した。断面を確認しながら慎重に調査を進めたが、残念ながら最終的に明確な構と断定することはできなかった。

出土遺物 直口壺269、複合口縁壺270、壺273、在地の壺271・272、外來系の壺274、高杯275・276、小

型器台277、小型丸底土器278、鉢279が出土した。

時 期 布留式に位置づけられる。

その他の遺構

SK19 (図版18-6)

検出状況 調査区中央部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西1.7m・南北2.15m・深さ0.05mを測る。掘方は方形を呈する。土坑中央部や東よりの地点では、被熱面を検出した。被熱面は中心部から最大2.0mほどの範囲で広がっていた。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時 期 時期は判然としない。

SD 1 (図版14-5、30-4)

検出状況 調査区北部で検出した東西方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は、幅1.1m・延長約34.0m以上で、溝の東西両側とともに調査区外へと延長する。断面形状は、緩やかなU字状を呈し、深さは0.5mである。SD 2に切り込まれる。

出土遺物 壺183・184・185、高杯186が出土した。

時 期 上述のとおり、遺物から時期の比定は困難である。

SD 3 (図版19)

検出状況 調査区西部で検出した南北方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は幅1.3m・延長14.0m以上で、溝は南北ともに調査区外へと延びる。溝の深さは、北側で約0.5m、南端で約0.6mと若干ながら南側に傾斜することがわかり、北から南への水流方向が考えられる。

出土遺物 出土した土器はいずれも極小片であった。

時 期 上述のとおり、遺物から時期の比定はできない。

SD 5 (図版4)

検出状況 調査区南部で検出した東西方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は、幅約4.0m・長さ7.4m・深さ0.2~0.24mである。断面観察から上下2層に埋土が堆積する。SD 5の検出位置は、先述したSD 4のおよそ東延長部に位置することから両遺構の関連が想定されたが判然としない。

出土遺物 出土した土器はいずれも小片であった。

時 期 小片であるため時期は判然としない。

SD 7 (写真図版25・26)

検出状況 調査区南東部で検出した南北方向に延びる流路である。

形状・規模 平面規模は、幅2.0m以上・長さ6.0m・深さ0.22mを測る。埋土は上下2層に分かれ、いずれも縞まりがない細砂礫が堆積する。

出土遺物 出土した土器はいずれも小片であった。

時 期 時期は判然としない。

第3章 調査の成果

SD 8

- 検出状況 調査区南東部で検出した南北方向に延びる流路である。
- 形状・規模 平面規模は幅1.0m・長さ9.0m・深さ0.27mである。SI 6を切り込む。埋土は灰・灰オリーブ色細砂が堆積する。
- 出土遺物 遺物は出土しなかった。
- 時期 遺構の切り合いから庄内期以降と考えられる。

第3節 中世の遺構と遺物

今回の調査では、中世の遺構も複数検出した。中世の遺構は、灰黄色を呈する埋土を有し、古代以前の遺構の土色とは一線を画している。今回は掘立柱建物跡3棟、柵1条、歓溝を検出した。以下に概要をまとめる。

歓溝群（図版21）

- 検出状況 調査区全域で南北方向の歓溝を21条検出した。
- 形状・規模 平面規模は、南北長5.7~23m・幅約0.3~0.4m・深さ約0.1mを測る。歓溝群は後述するSB 1・2に切り込まれる。なお溝の方は概ね座標北と合致しており、SB 1~3と異なる。
- 出土遺物 土器の小片が出土したが器種等は不明である。
- 時期 後述するSB 1・2よりは新しいが詳細な時期は不明である。

SB 1（図版22）

- 検出状況 調査区南部で検出した掘立柱建物跡である。
- 形状・規模 SP135・136・139・140・143・144・147・313・314によって構成される。平面規模は、東西1.8m・南北7.0mを測り、1間×4間の建物跡である。柱間はおよそ1.8mである。いずれの柱穴も掘方は円形を呈する。建物跡は、座標北から西へ約5度振れて立地する。柱穴掘底からは根石を検出したものもあった。
- 出土遺物 遺物は土器の細片が出土したにとどまる。
- 時期 時期は判然としない。

SB 2（図版22）

- 検出状況 調査区南部で検出した掘立柱建物跡である。
- 形状・規模 SP138・142・146・149・151・171~180によって構成される。平面規模は、東西3.3m・南北6.8mを測り、2間×4間の建物である。柱間はおよそ1.8mである。いずれの柱穴も掘方は円形を呈する。建物跡は、座標北から西へ約5度振れており、SB 1と同様である。また柱穴底からは根石を検出したものがあった。
- 出土遺物 遺物は出土していない。

- 時期 判然としないが、SB 1と規模・方位が近似することから同時期と考えられる。

SB 3（図版23-1）

- 検出状況 調査区南東部で検出した掘立柱建物跡である。
- 形状・規模 SP334~344で構成される。平面規模は東西5.0m・南北5.7mの2間×3間の建物跡であり、柱間は東西約2.5m・南北約1.8mである。いずれの柱穴も掘方は、円形を呈する。主軸方位はSB 1・2とおよそ同一である。しかしSB 1・2と比較して、やや東に立地することや柱間の距離が異なることから、同一時期における性格の異なる建物の可能性も考えられる。

出土遺物 土器が少量出土した。

時 期 遺物が少量であることから判然としないが主軸方向等からSB 1・2と同一時期の可能性が高い。

SB 4 (図版23-2)

検出状況 調査区南西部で検出した。

形状・規模 SP11・12・19・20・31・39・46・51・55・68から構成される。平面規模は梁行4.4m×桁行5.0mを測り、2間×3間の建物跡である。方位は、座標北から約15度東へ振る。SB 1～3と比較して、方位や構造が異なる点から時期が異なるものと考えられる。

出土遺物 遺物はない。

時 期 遺物が出土しないため判然としない。

SA 1 (図版22)

検出状況 SB 1から東へ2.5m、SB 2から西へ2.5mの地点で検出した。

形状・規模 SP137・141・145・148・150で構成される。南北7.0mの柱穴列であり、柵と考えられる。柱間は1.5～2.0mとややばらつきがある。いずれの柱穴も掘方は円形を呈する。柵はSB 1～3同様に、座標北から西に約5度振れる。SB 1・2のおよそ中間地点で検出したことから、建物間を仕切る性格を持つものと考えられる。柵を構成する柱穴埋土から遺物は出土しなかったが、根石と考えられる石を検出した。

出土遺物 遺物は出土していない。

時 期 判然としないが、SB 1・2に伴うものであると考えられる。

なおSB 1～3・SA 1については、発掘調査中及び整理作業中において柱間間隔の差異などからそれぞれ異なる遺構として評価した。但しSB 1～3・SA 1それぞれを構成する柱穴群が4間×5間におよぶ掘立柱建物跡を構成する可能性が少なからずあることを付しておく。

SP131

検出状況 調査区南西部で検出した柱穴である。

形状・規模 平面規模は、径0.2m・深さ0.27mである。掘形は円形を呈する。

出土遺物 掘形底部から土師器皿が出土した。

時 期 土師器皿の形状は11～12世紀頃のものと考えられる。

SD 6 (図版35-3・写真図版33)

検出状況 調査区北東部で検出した中世の水路である。

形状・規模 平面規模は、延長11.5m・幅3.0m・深さ0.83mである。溝は東西方向に延び、調査区内で北向きに直角に折れ曲がる。埋土から弥生時代から中世までの遺物が出土したが、層位を問わず中世の遺物が多数みられることから中世段階において機能し、埋没したものと考えられる。なおこのSD 6に関連するものとして、平成17年（2005年）に行われた試掘確認2次調査で南北方向の溝が検出されている。SD 6の北延長部で検出され、さらに断面形状・出土遺物の年代観が類似することからSD 6と一連の溝であると考えられる。

出土遺物 瓦器陶283などが出土した。

時 期 出土遺物から13世紀ごろには廃絶したと考えられる。

第4章 自然科学的分析

第1節 和久遺跡第10次調査区の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1.はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにする必要がある。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。こうした堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通じて明確にすることが可能となる。また調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも分析できるのである。

本稿では、和久遺跡第10次調査区の地形環境について明らかにし、それと人間活動との関係を考察したい。調査では、調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず20,000分の1空中写真的判読から調査区周辺の地形を区分した。ついで、5,000分の1空中写真的判読と現地踏査によって調査区付近の平野における微地形分類を行った。他方、堆積物に関しては調査区での地質断面を詳細に観察した。地質断面の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、遺構検出面から掘削したトレーナーの断面についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近の地形環境ならびにそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査区付近の地形分布

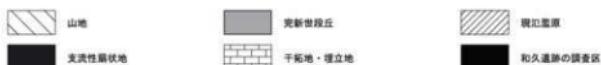
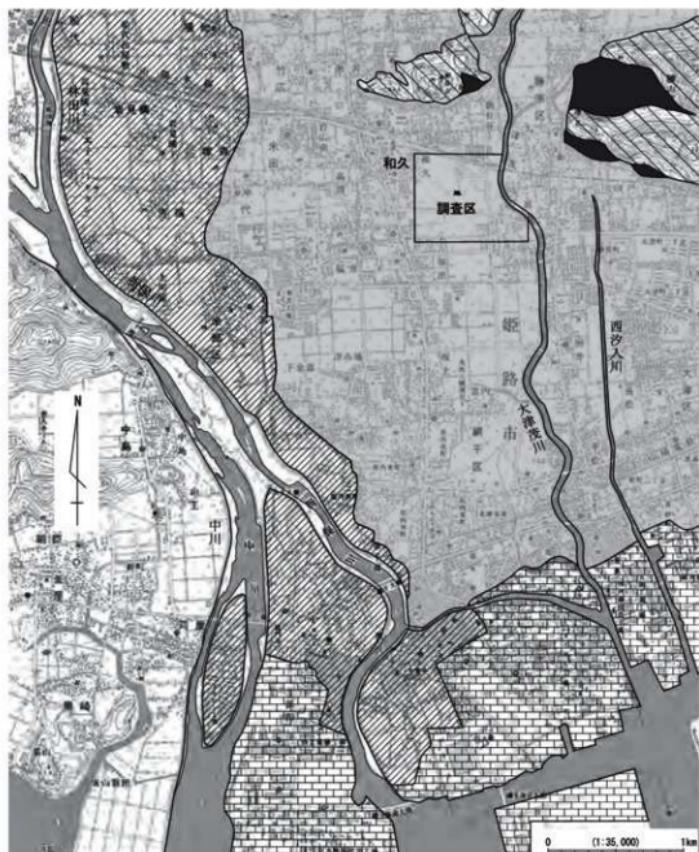
(1) 調査区周辺の地形について

本遺跡の第10次調査区は瀬戸内海に面する播磨平野の西部に位置する。そこには沖積低地が広がり、調査区の約3km西を揖保川が南東へ、またおよそ300m東には小規模な大津茂川が南へ流れる。沖積低地の周辺には丘陵と更新世段丘がみられず、山地が分布する。山地は80~180mの標高を有し、調査区より約750m北方ならびに揖保川の西岸に認められる。調査区の約4.5km南には、瀬戸内海が広がり、海岸付近には江戸時代以降の干拓地や近年の埋立地が存在する。

調査区周辺の沖積低地は完新世段丘、現氾濫原および支流性扇状地に分けられる（挿図1）。これらのうち、調査区は完新世段丘に位置する。各地形の特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕この地形は広範囲に発達し、現氾濫原と比高数十cm~1mの崖で接する。段丘面は比較的平坦で、条里型土地割（条里地割）が認められる。

〔現氾濫原〕これは、洪水時に冠水しやすい最も低い地形面である。この地形面は、揖保川とその支流である林田川に沿って認められ、規模の小さい大津茂川沿いにはみられない。現氾濫原における現地表の起伏は完新世段丘と比べてやや大きい。



挿図1 調査区周辺の地形分類図 (S=1 : 35,000)

〔支流性扇状地〕この扇状地は、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、山麓に点々と分布する。調査区北方の山麓では、面積が小さく急な地表傾斜の支流性扇状地が完新世段丘と傾斜変換線で接している。

(2) 調査区の微地形と遺構について

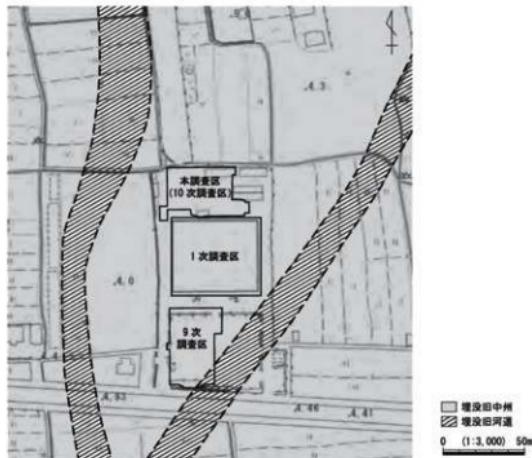
調査区付近の完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。そのため、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で分布する（挿図2）。旧中州は扇状地に分布する微高地に相当し、それが埋没している地点の現地表は旧河道の埋没地点より数十cm高い。調査区はこうした埋没旧中州の頂部付近に位置する。

調査区では、弥生時代中期中ごろの竪穴住居跡1棟、弥生時代中期後半の竪穴住居跡2棟と土坑数基、弥生時代後期の土坑1基と溝1条、弥生時代後期後半の竪穴住居跡4棟、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴住居跡1棟と土壙墓1基、及び古墳時代初頭の竪穴住居跡4棟と土坑2基、溝2条などが検出されている。調査区がみられる埋没旧中州上は、弥生時代後期前半を除く弥生時代中期中ごろから古墳時代初頭にかけて居住域に利用されていたことが知られる。

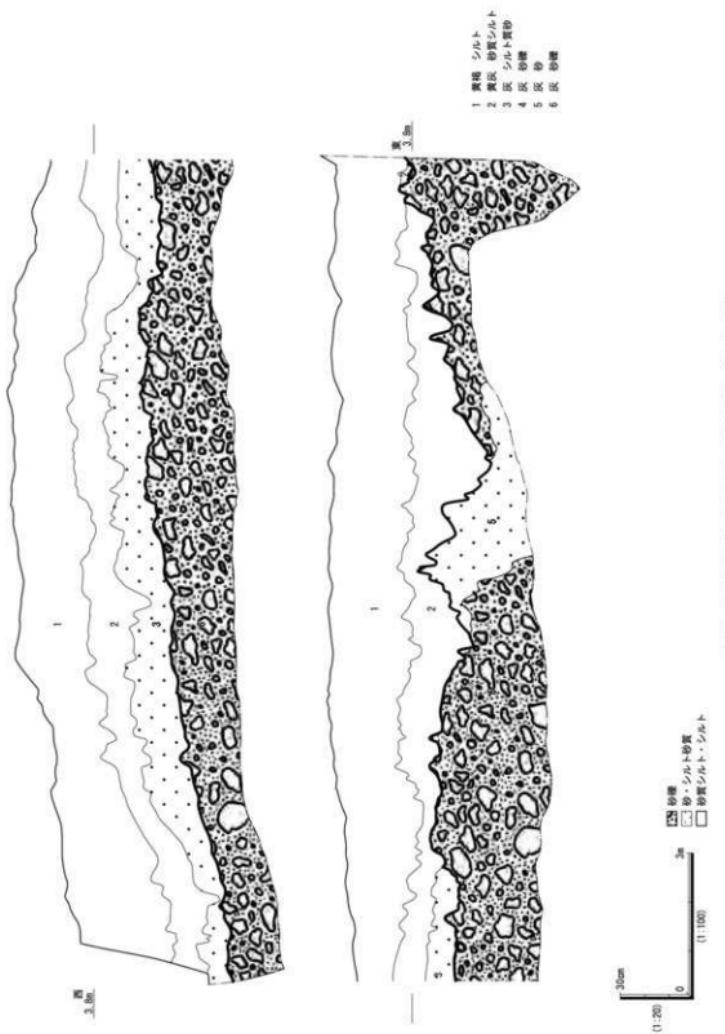
3. 調査区における堆積物の特徴

調査区では、基本的に灰色の砂礫とこれを覆う細粒堆積物が観察される（挿図3）。これらはいずれも洪水堆積物である。灰色の砂礫は扇状地の旧中州堆積物に相当する。上面は、近年の盛土下面から70cm前後の比較的浅所に認められ、西へわずかに高度を下げる。これは、調査区が旧中州の頂部よりやや西側に位置することを示す。調査区付近のボーリング資料によると、この砂礫は5~8mの厚さで認められ、縄文海進頂期以降に堆積したと考えられる。

調査区では、こうした砂礫の上部が観察できる。そこでは砂礫が2層に細分され、間には灰色の砂（挿図3の堆積物5）が30~40cmの厚さで挟まる。下位の砂礫（同図の堆積物6）は、調査区のほぼ全域に分布し、



挿図2 調査地付近における微地形の分布 (1 : 3,000)



上面高度が東部で低くなる。礫は径3~8cmの亜角礫から亜円礫を主体とし、最大で径15cmの礫を含む。上位の砂礫（同図の堆積物4）は調査区東部だけにみられ、80cm以上の厚さで堆積している。これは主に径2~5cmの亜角礫から亜円礫からなり、径10cmの礫を最大とする。このような砂礫は 調査区より約55m南方に位置する和久遺跡第9次調査区¹⁾ やおよそ900m北西方の鍛冶田遺跡調査区²⁾ でも観察され、調査区の周辺一帯に広く認められる。鍛冶田遺跡調査区では、砂礫より上位の堆積物に縄文時代晚期の遺物が混入する³⁾。

砂礫を覆う細粒堆積物は近年の耕土と盛土を除いて5層に分けられる。これらのうち、遺構検出面以深には下位から灰色のシルト質砂（同図の堆積物3）、黄灰色の砂質シルト（同図の堆積物2）、ならびに黄褐色のシルト（同図の堆積物1）が認められる。灰色のシルト質砂は砂礫の上面がやや低くなる調査区西半部に分布する。これは最大で約30cmの厚さをもつ。その上位に位置する黄灰色の砂質シルトと黄褐色のシルトはともに調査区のはば全域に広がる。厚さはそれぞれ40cm以下ならびに15~50cmである。黄褐色のシルト上面は緩やかに西へ傾斜し、その面から弥生時代中期中ごろから古墳時代初頭にかけての遺構が検出されている。

遺構検出面より上位には、下位から暗灰黄色のシルト、オリーブ褐色の砂質シルト、近年の耕土、及び盛土がみられる。中でも暗灰黄色のシルトとオリーブ褐色の砂質シルトは、それぞれ高度がやや低い調査区の西部及び西北部に分布する。これらは、全体で最大約35cmの厚さをもち、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺物を含む。こうした砂礫を覆う細粒堆積物は和久遺跡第9次調査区でも観察され、そこでの厚さは1.3~1.4mである⁴⁾。この堆積物は、旧中州の頂部付近で薄く、南の末端に向かって厚くなる傾向が認められる。

4. 地形環境の変遷

これまで述べた事柄からみて、調査区付近では次のような地形環境の変遷が考察される。

〔ステージ1〕 縄文時代晚期以前、調査区付近には揖保川や大津茂川によって砂礫が堆積し、扇状地が発達した。砂礫は少なくとも2度もたらされ、まず径の大きい礫を含む砂礫の堆積が調査区全域でみられた。これによって中州が形成された。さらに、この砂礫を砂が薄く覆った後、やや小さい礫からなる砂礫が調査区東部を中心に堆積した。その結果、中州は発達し、調査区付近で上面が西へわずかに傾斜する微高地になった。

〔ステージ2〕 中州上には、弥生時代中期中ごろまでに少なくとも3層の細粒堆積物が洪水によつてもたらされた。最初にシルト質砂がやや地表高度の低い調査区西半部に堆積した。ついで調査区全域に砂質シルトとシルトの堆積が相次いでみられ、旧中州は浅く埋没していった。

〔ステージ3〕 遅くとも弥生時代中期中ごろ以降、調査区付近には洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が訪れた。調査区では、弥生時代中期中ごろから中期後半ならびに弥生時代後期後半から古墳時代初頭に堅穴住居が建てられ、埋没旧中州上は居住域として利用された。和久遺跡第9次調査区では、弥生時代後期前半に洪水が1度発生し、砂質シルトが堆積した。本調査区で同時に堅穴住居が建てられなかつたのは、この洪水に一因があると推定される。

〔ステージ4〕 調査区付近に広がる沖積低地が揖保川によって下刻され、段丘化した（完新世段丘の形成）。その結果、今も揖保川が流れる段丘崖下では度重なる洪水によって現氾濫原が発達していった。

5. おわりに

本遺跡の第10次調査区は沖積低地の完新世段丘に位置する。この付近では、縄文時代晚期以前に扇状地が揖保川や大津茂川によって形成され、その後弥生時代中期中ごろまでに埋没した。完新世段丘は、これが古墳時代初頭以降のある時期に段丘化したものである。調査区は埋没した旧中州上に分布する。この微地形は約55m

南方の和久遺跡第9次調査区から連続するもので、本調査区はその頂部付近に認められる。

調査区付近の埋没旧中州上は主に居住域として利用され、そこでは弥生時代後期前半を除く弥生時代中期中ごろから古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡が多数検出されている。これには2つの要因があげられる。ひとつは、埋没旧中州上が埋没旧河道上よりわずかに高いため、比較的高燥で排水されやすいことである。これは埋没旧中州上の特性にある。他の1つは、調査区付近の環境が遅くとも弥生時代中期中ごろから比較的安定し、洪水がほとんど発生しなかったことである。調査区では、こうした人間の居住に適する地形環境がみられたと考えられる。ただし、和久遺跡第9次調査区付近では、弥生時代後期前半に洪水が1度発生した。この時期には本調査区でも人間が居住しておらず、これは第9次調査区付近での洪水に影響を受けた可能性がある。第10次調査区では、以上のような地形環境と人間生活の関係が認められる。

註

- 1) 抽稿「和久遺跡の地形環境」、姫路市埋蔵文化財センター『和久遺跡』所収、2013年
- 2) 兵庫県まちづくり技術センターが発掘調査した鎌治田遺跡調査区での観察による。
- 3) 兵庫県まちづくり技術センターの発掘調査成果による。
- 4) 前掲1)

第2節-1 和久遺跡出土種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

和久遺跡（兵庫県姫路市網干区和久）は、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡であり、これまでの発掘調査で、弥生時代から古墳時代の竪穴住居が多数検出されている。

本分析調査では、弥生時代後期とされる竪穴住居内の覆土を対象として、洗い出し同定を実施し、当時の植物利用に関する資料を作成する。

1. 試料

試料は、弥生時代後期とされる第1次調査竪穴住居SH39-1の床面上より採取された土壌1点である。試料は、乾燥した状態でポリ袋に入っている。

2. 分析方法

土壌試料から炭化種実を分離・抽出するために、水を入れた容器に試料を投入し、速やかに容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの籠に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20回程度）。残土を粒径0.5mmの籠を通して水洗する。水洗後の水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を抽出する。炭化種実の同定は、現生標本や佐藤（1988）、谷城（2007）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、写真を添付する。また、保存状態が良好な炭化米の大きさをデジタルノギスで計測し、炭化米の「粒大（長さ×幅）、粒形（長さ／幅）」（佐藤、1988）を求め、結果を一覧表に併記する。炭化種実以外は、個数または重量、一部の最大径を一覧表に併記する。

分析後は、炭化種実を分類群・部位別に容器に入れて返却する。

3. 結果

結果を表1に示す。また、炭化種実各分類群の写真を写真1に、計測値を表1に示して同定根拠とする。

SH39-1の土壌試料900gを洗い出した結果、被子植物3分類群（木本のブナ科、草本のイネ、ホタルイ属）284個0.68gの炭化種実が同定された。炭化種実以外は、炭化材が0.07g（最大5.3mm）、炭化材主体3.09g、砂礫主体51.96g、土器片1個10.90g（径34.6mm）が確認された。

炭化種実群は、栽培種のイネの穂（基部）が6個0.01g未満、穂・玄米が9個0.05g、玄米（炭化米）が267個0.63gと、抽水性多年草のホタルイ属の果実が1個0.01g未満、広葉樹のブナ科（クヌギ節の可能性）の果実の破片が1個0.01g未満（残存径2.7mm）から成り、圧倒的なイネ主体の組成を示す。

炭化種実の保存状態は概ね不良で、炭化米は焼き彫れや発泡、欠損、摩耗しており、完全な形状をとどめた個体や表面模様が明瞭な個体が少ない。一方、表面に穂が残る個体や、虫類による食痕も少量確認される。その他、ホタルイ属にも食痕がみられる。以下、炭化種実の形態的特徴を記す。

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属 写真1-1～14

穂（内外穂）は、基部が残る破片と、玄米表面に残る破片で、残存長は2.05mmを測る。穂は完形ならば長さ6～7.5mm、幅3～4mm、厚さ2～3mmのやや偏平な長楕円体で、基部に径1mm程度の斜切状円

表1 土壌試料洗い出し・炭化種実同定結果

分類群	部位・状態/粒径	SH39-1		計測値 (mm)			粒大	粒形	図版 番号	備考
		(側)	(g)	No.	長さ	幅				
本木種実										
ブナ科	果実 破片	1	0.00	-	271	-	-	-	16	残存長、クリカクヌギ節の可能性
草本種実										
イネ	稻(基部) 破片	6	0.00	-	205	-	-	-	34	残存長
	稻・玄米 完形	1	0.00	-	476	221	1.92	1052	215	10 長粒極小型
	完形未溝	8	0.05	-	-	-	-	-	5-9	2個食痕
玄米	完形	6	0.06	1	478	241	1.92	1152	198	11 短粒極小型
				2	407	276	2.40	1123	147	12 短粒極小型
				3	395	225	2.01	889	176	14 短粒極小型
				4	451	206	1.89	929	219	13 長粒極小型
	完形未溝	28	0.20	-	-	-	-	-	2	
	破片	233	0.37	-	-	-	-	-	1	
ホタルイ属	果実 完形	1	0.00	-	-	-	-	-	15	食痕
種実合計		284	0.68	-	-	-	-	-	-	
分析残渣										
炭化材	>2mm	-	0.07	-	-	-	-	-	-	最大5.29mm
炭化材主体	2-1mm	-	0.90	-	-	-	-	-	-	炭化物・植物片含む
	1-0.5mm	-	2.20	-	-	-	-	-	-	炭化物・植物片含む
砂礫主体	>4mm	-	4.27	-	-	-	-	-	-	岩片3個
	4-2mm	-	8.23	-	-	-	-	-	-	
	2-1mm	-	10.78	-	-	-	-	-	-	
	1-0.5mm	-	28.68	-	-	-	-	-	-	
土器片		1	10.90	-	3456	-	-	-	-	
分析量		-	900	-	-	-	-	-	-	乾重

注) 計測はデジタルノギスを使用。粒大・粒形は佐藤(1988)に基づく。

柱形の果実序柄(小穂軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言ふ場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稻穎を構成する。果皮表面には微細な顆粒状突起が縱列する。

軸内に1個入る玄米(穎果)は、長さ4.0~4.8mm、幅2.1~2.8mm、厚さ1.9~2.4mmを測る。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面に2~3本の縦隆条があるが、出土玄米は不明瞭な個体が多く、焼き跡や発泡、欠損、摩耗している。かろうじて計測が可能な完形5個の計測値より求めた粒大・粒形(佐藤1988)は、3個が短粒・極小型、2個が長粒・極小型に該当する。2個の稻が残る玄米には歪な円形の孔があり、孔周囲に直交する浅い縦筋模様がみられる。縦筋模様は歯型とみなされ、虫類による食痕と考えられる。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科 写真1-15

果実は長さ2.0mm、幅1.3mmの片凸レンズ状広倒卵形。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片を欠損する。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。背面に径0.7mmの歪な円形の孔があり、孔周囲に直交する浅い縦筋模様がみられる。縦筋模様は歯型とみなされ、虫類による食痕と考えられる。

・ブナ科 (Fagaceae) 写真1-16

果実は残存径2.7mmの果皮片である。果皮は薄く、外面は平滑、内面は粗面で縦筋は不明瞭、断面の外側に薄い柵状構造がある。曲率が小さいため、クリヤクヌギ節(クヌギやアベマキ)などの大型果実に由来する可能性がある。

4. 考察

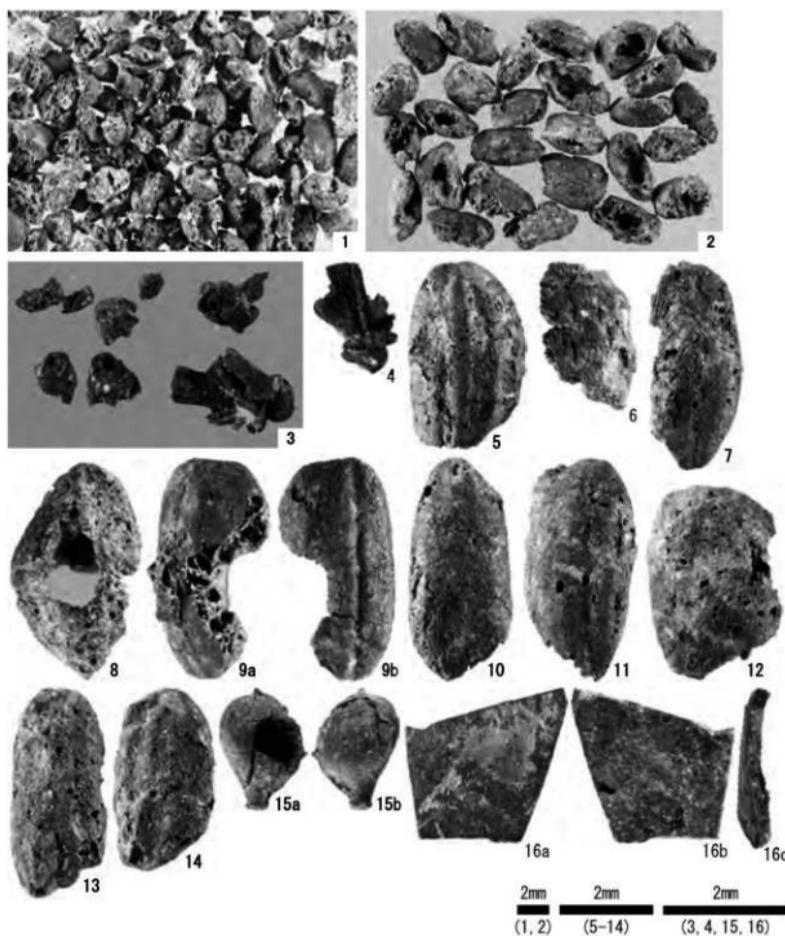
弥生時代後期（庄内期）とされる堅穴住居SH39-1の床面上から得られた炭化種実群は、ほぼ栽培種のイネ（炭化米）から成り、他の穀類は確認されなかった。イネは、近辺で栽培されたか持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆される。出土炭化米の粒大・粒形（佐藤,1988）は、3個が短粒・極小型、2個が長粒・極小型であった。邦産の炭化米としては標準的である（佐藤,1988）。また、炭化米の表面に糊殻が残る個体が確認されることから、脱稃（だつぶ：糊殻を取り去る、糊摺り）前の段階で火を受けたと推測される。さらに、糊殻が残る炭化米の一部に食痕が確認されたことから、火を受ける前の段階で害虫による食害を受けた可能性がある。

イネを除いた炭化種実には、木本のブナ科と草本のホタルイ属が確認された。ブナ科は、高木になる常緑または落葉広葉樹である。周辺の森林に生育していたと考えられる。また、堅果類のブナ科は、果実内部の子葉が食用可能である。出土果実に人が利用した痕跡は認められないが、当時の遺跡周辺の森林より採取され、利用された可能性はある。

ホタルイ属は、水深が浅い水湿地に生育する抽水性多年草である。調査区周辺の水深の浅い水湿地に生育していたと考えられる。多量のイネが供伴することから、水田雑草に由来する可能性もある。また、出土果実には食痕が確認されたことから、火を受ける前の段階で虫類による食害を受けた可能性がある。

引用文献

- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑（2010年改訂版）,東北大学出版会,678p.
佐藤敏也,1988,弥生のイネ,弥生文化の研究2 生業,金闇 恵・佐原 真編,雄山閣,97-111.
鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッキングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－,誠文堂新光社,272p.
谷城勝弘,2007,カヤツリグサ科入門図鑑,全国農村教育協会,247p.



1. イネ 玄米 (SH39-1)
2. イネ 玄米 (SH39-1)
3. イネ 粽 (基部) (SH39-1)
4. イネ 粽・基部 (SH39-1)
5. イネ 粽・玄米 (SH39-1)
6. イネ 粽・玄米 (SH39-1)
7. イネ 粽・玄米 (SH39-1)
8. イネ 粽・玄米 (食痕) (SH39-1)
9. イネ 粽・玄米 (SH39-1)
10. イネ 粽・玄米 (SH39-1)
11. イネ 玄米 (SH39-1)
12. イネ 玄米 (SH39-1)
13. イネ 玄米 (SH39-1)
14. イネ 玄米 (SH39-1)
15. ホタルイ属 果実 (SH39-1)
16. ブナ科 果実 (SH39-1)

写真1 炭化種実

第2節-2 和久遺跡第1次調査SH39-1について

前節では、今回の調査に南接する第1次調査SH39-1（以下、SH39-1とする。）床面出土の炭化米についての分析を行った。

当該遺構については、これまで『姫路市史』第七巻下（小柴2011）に一覧表として紹介されているので、ここでは遺構と出土遺物について報告しておきたい。

SH39-1は調査区南西隅付近で検出した。平面はやや不整形な七角形を呈し、検出面から床面までは17～20cmを測る。床面積はベッド状遺構の内側で20.7m²、ベッド状遺構は21.2m²である。屋内施設としては、主柱穴、周壁溝、ベッド状遺構と燃焼施設であるイチマル土坑を有する。主柱穴は7基あり、径約20～50cmと幅がある。周壁溝はベッド状遺構の内側と外側にそれぞれ巡り、内側が幅約10cm、外側が幅約20cm、深さを測る。ベッド状遺構の西辺には床面に通じる階段状の段差がみられる。燃焼施設であるイチマル土坑は床面のほぼ中央にマル土坑（SK02）を北側に、イチ土坑（SK01）を南側に配置している。両者の周囲にはそれぞれ盛土による土手が構築されている。以上の特徴から、小柴分類のB3に当たる（小柴2003）。イチ土坑底面のほぼ全面には炭層が広がる。またその短辺両側には径約10cmの小柱穴が1基ずつ穿たれている。マル土坑は土坑の上方と下方で平面形態が異なる。このイチマル土坑については後述するSH39-2のものを再利用している。なお、今回の分析対象となった炭化米は、ベッド状遺構の内側の床面全体からまばらに出土したことを付記しておく。

SH39-1の下には、SH39-2・3として認識した2棟の竪穴建物が重複している。土層断面の観察から、最初にSH39-3が構築され、その後、埋没、あるいは埋戻しという過程を経て、SH39-2・1の順番に新たに建て替えられていたことがわかっている。

次に、最初に構築されたSH39-3についてふれておきたい。当該建物は、部分的な削平を受けているものの、明らかに平面多角形を呈しており、SH39-1と同様七角形である可能性が高いといえる。床面構築前に、不整形な平面形の掘り込み地業のような痕跡が観察できる。用途は不明であるが、いわゆる下部構造と呼ばれるものと考えられる。床面積は30.0m²を測る。屋内施設について確実に当該建物に帰属するものとしては、周壁溝とイチマル土坑がある。柱穴については、次段階のSH39-2に帰属するものとの分別が容易ではなかったという。床面中央付近にあるイチマル土坑は、先出の小柴分類によるB3に当たる。ただ、イチ土坑であるSK03がマル土坑の西側に位置することは特異な状況といえ、これまでの和久遺跡の調査例でみると、管見の限りでは1次調査で1例、9次調査でも1例、今回の調査では確認できなかった。そして、その他のほとんどがマル土坑の南側にイチ土坑を配置しているという（小柴2003）。本遺構の用途についてはなお不明な点が多いが、配置という点に着目すると、一種の規範のようなものの存在を想定できよう。この傾向はイチマル土坑を有する播磨の竪穴建物でも一般的にみられるものであるといえる。

最後にSH39-2についてふれておく。一見すると平面形が不整形な円形とも捉えられかねないが、東側の肩についてはSH39-3と共有していることから、本段階においても七角形を志向していると考える。床面積は35.7m²を測る。屋内施設に関しては、柱穴については先述のようにその帰属が不明確である。ただ、SP04・15～17については本段階のものとする妥当性は高いが、その機能について考えた場合、主柱穴でなく副次的なものであるといえよう。イチマル土坑についてもすでに述べているとおりSH39-1に引き続き使用されているようである。

以上、遺構については現場での観察所見を交えて記載した。次に出土土器についてふれておくことにする。SH39-1では、床面から遊離した状態、イチ土坑であるSK01、SP06からそれぞれ土器類が出土している

(挿図4)。床面から遊離した状態では、短頸壺(挿図6-1)、壺(挿図6-2~5)、高杯(挿図6-6・7)、鉢(挿図6-8・9)が出土した。1はあまり見かけない器形である。2~4は概ね同時期のものと思われるが、5は古式土器の小平底にもみえる。SK01からは、長頸壺(挿図6-10)、壺(挿図6-11)、小型の壺(挿図6-12)、壺(挿図6-13~16)、高杯(挿図6-17)が出土した。11の壺はやや新相を示し、他の伴出資料よりも5の時期に近い。15は口縁部の形態や胴部上半の張り具合などや新相を呈しているように思われる。SP06からは、小型壺(挿図6-18)、壺(挿図6-19)が出土した。18の小型壺は当該期に散見されるタイプと思われる。19の壺も違和感はない。

これらと周辺の資料群を比較すると、周世入相遺跡の土坑8・20(甲斐1990)など、弥生時代後期後葉の指標となりうる資料群とはほぼ同時期のものとして捉えられる。

SH39-2からは良好な状態の遺物が出土しなかったため、SH39-3出土遺物についてふれておく。

壺(挿図7-1)、鉢(挿図7-2・3)が、ベッド状構造の盛土内から出土した。いずれも小片で残存状況がよくないもの多いため、詳細は不明であるが弥生時代後期後半の範疇に収まると思われる。



写真2 SH39-1 全景（北から）

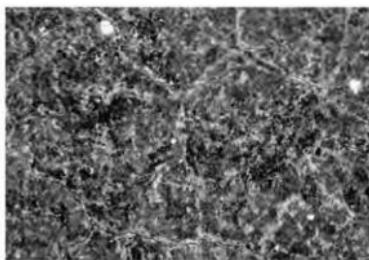
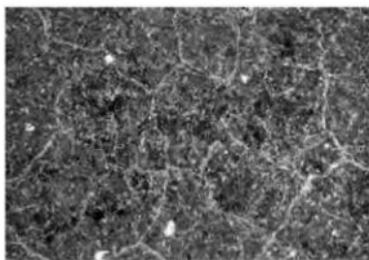
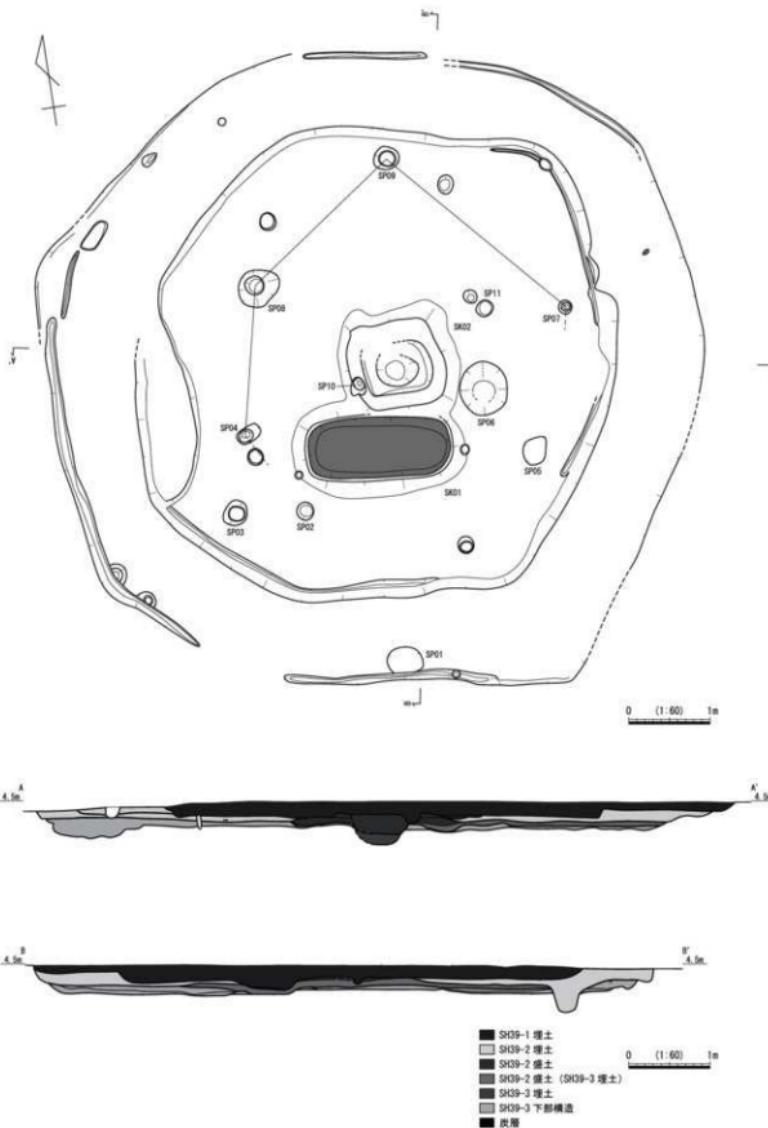
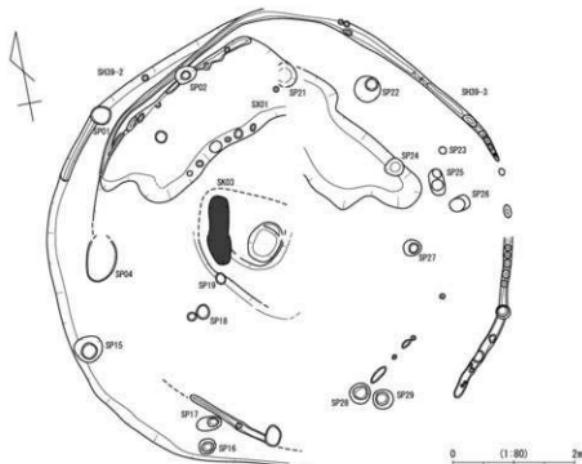


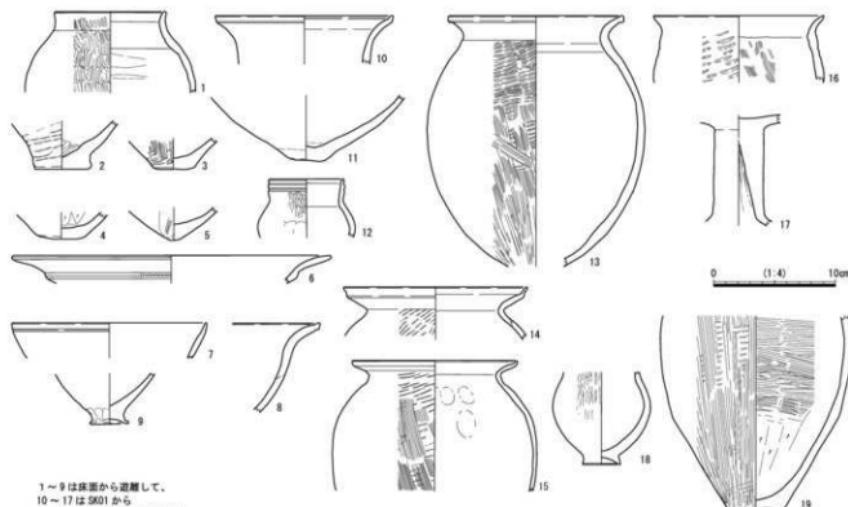
写真3 貧化米出土状況（右は左の詳細）



挿図4 1次調査 SH39-1平面図・断面図 (S=1:60)



挿図5 1次調査 SH39-2・3平面図 (S=1:80)



挿図6 1次調査 SH39-1出土遺物 (S=1:4)



挿図7 1次調査 SH39-3出土遺物 (S=1:4)

第3節 和久遺跡出土遺物年代測定および樹種鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

和久遺跡（兵庫県姫路市網干区和久）は、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡であり、これまでの発掘調査で、弥生時代から古墳時代の堅穴住居が多数検出されている。

本分析調査では、用材や植物利用、年代に関する情報を得るために、樹種同定、種実同定、放射性炭素年代測定を実施する。

1. 試料

分析用試料は、No.1 (SI 2)、No.2 (SI 2)、No.3 (1次SHI4-3 SP01)、No.4 (1次SHI4-3 SP02)、No.5 (1次SHI4-3 SP02)、No.6 (1次SHI4-3 SP04)、No.7 (1次SHI4-3 SP04)、No.8 (1次SHI4-3 SP04)、No.9 (1次SHI4-3 SP04)、No.10 (1次SHI4-3 SP04)、No.11 (SH39-1 床面) の11点である。放射性炭素年代測定は、11点全てについて分析を行う。No.1はa1、a2の2点あるが、a2の方を用いる。樹種同定はNo.1(a1、a2両方)とNo.2を対象にする。種実同定はNo.11を対象にする。いずれの試料も弥生時代後期（庄内期）に帰属する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、周りを削って付着物を除去する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。脆弱な試料は、アルカリの濃度を薄めて処理する (AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube と Ionplus社のAge 3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からの差を千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma=68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk 2009)、較正曲線はIntcal13 (Reimer et al. 2013)である。

(2) 樹種同定

炭化材は、木口（横断面）、柵目（放射断面）、板目（接線断面）の各剖片を作成する。炭化草本は横断面を作成する。これらを電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 種実同定

年代測定を実施する試料(No.11)について実体顕微鏡下で種類を同定し、計測を行う。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	性状	方法	(暦年較正用) BP	暦年較正年代												Code No.
				年代値												
No.1 SI2	炭化材 アカガシ 重属	AAA (IM)	2060 ± 20 (2048 ± 20)	-27.01 ±0.26	σ	cal BC 94	-	cal BC 37	2043	-	1986	calBP	55.5			YU- 9286
					2 σ	cal BC 11	-	cal BC 2	1979	-	1970	calBP	6.0			
No.2 SI2	炭化 草木 イネ科	AaA (0IM)	2075 ± 20 (2077 ± 20)	-11.21 ±0.25	σ	cal BC 149	-	cal BC 141	2084	-	2090	calBP	5.9			YU- 9287
					2 σ	cal BC 112	-	cal BC 5	2061	-	2000	calBP	62.3			
No.3 1次SH14-3 SP01	木材	AAA (IM)	1870 ± 20 (1872 ± 20)	-23.56 ±0.25	σ	cal AD 81	-	cal AD 40	1869	-	1810	calBP	57.6			YU- 9278
					2 σ	cal AD 159	-	cal AD 166	1798	-	1784	calBP	3.8			
No.4 1次SH14-3 SP02	木材	AAA (IM)	2039 ± 20 (2030 ± 20)	-22.25 ±0.21	σ	cal BC 46	-	cal AD 5	1996	-	1946	calBP	68.2			YU- 9283
					2 σ	cal BC 88	-	cal BC 76	2037	-	2025	calBP	2.2			
No.5 1次SH14-3 SP02	木材	AAA (IM)	2015 ± 20 (2017 ± 20)	-22.43 ±0.40	σ	cal BC 56	-	cal AD 30	2005	-	1921	calBP	90.5			YU- 9280
					2 σ	cal AD 37	-	cal AD 50	1913	-	1900	calBP	2.8			
No.6 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (IM)	1910 ± 20 (1911 ± 20)	-22.97 ±0.28	σ	cal AD 70	-	cal AD 90	1880	-	1860	calBP	31.9			YU- 9279
					2 σ	cal AD 99	-	cal AD 124	1851	-	1827	calBP	36.3			
No.7 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (IM)	1870 ± 20 (1870 ± 20)	-24.93 ±0.22	σ	cal AD 53	-	cal AD 131	1897	-	1820	calBP	95.4			YU- 9284
					2 σ	cal AD 83	-	cal AD 141	1867	-	1809	calBP	54.0			
No.8 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (IM)	1935 ± 20 (1933 ± 20)	-25.29 ±0.27	σ	cal AD 156	-	cal AD 167	1798	-	1783	calBP	6.2			YU- 9281
					2 σ	cal AD 196	-	cal AD 209	1755	-	1742	calBP	8.0			
No.9 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (IM)	1935 ± 20 (1934 ± 22)	-22.51 ±0.22	σ	cal AD 29	-	cal AD 39	1922	-	1912	calBP	9.5			YU- 9282
					2 σ	cal AD 50	-	cal AD 86	1900	-	1865	calBP	54.8			
No.10 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (IM)	1885 ± 20 (1887 ± 20)	-22.36 ±0.22	σ	cal AD 110	-	cal AD 115	1840	-	1835	calBP	4.0			YU- 9283
					2 σ	cal AD 23	-	cal AD 125	1928	-	1825	calBP	95.4			
No.11 SH09-1 灰化木		AAA (0IM)	1885 ± 20 (1884 ± 20)	-27.01 ±0.25	σ	cal AD 84	-	cal AD 130	1867	-	1820	calBP	68.2			YU- 9288
					2 σ	cal AD 68	-	cal AD 176	1882	-	1775	calBP	90.3			
					2 σ	cal AD 191	-	cal AD 212	1760	-	1739	calBP	5.1			

1) 年代値の算出には、Libby の手式(1958年)を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付した数字は、測定誤差(標準偏差の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAA は、酸+アルカリ+酸処理を示す。AaA は試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

5) 勘年の計算には、Excel v3.2を使用。

6) 勘年の計算には、1 柄目まで示した年代値を使用。

7) 勘正データーセットは、Intcal13を使用。

8) 勘正曲線と較正プロダクムが改正された場合の再計算や比較を行いやすいように、1 柄目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、σ が 98.2%, 2 σ が 99.4% である。

3. 結果および考察

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表2、挿図8に示す。いずれも試料の状態が良く、年代測定に必要な炭素が得られた。同位体補正を行った測定値は、No.1が2050 ± 20BP、No.2が2075 ± 20BP、No.3が1870 ± 20BP、No.4が2020 ± 20BP、No.5が2015 ± 20BP、No.6が1910 ± 20BP、No.7が1870 ± 20BP、No.8が1935 ± 20BP、No.9が1935 ± 20BP、No.10が1885 ± 20BP、No.11が1885 ± 20BPである。

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer et al. 2013) を用いる。2 σ の値は、No.1がcalBC161 ~ AD 5、No.2がcalBC166 ~ BC45、No.3がcalAD78 ~ AD215、No.4がcalBC88 ~ AD50、No.5がcalBC83 ~ AD51、No.6がcalAD53 ~ AD131、No.7がcalAD80 ~ AD215、No.8が

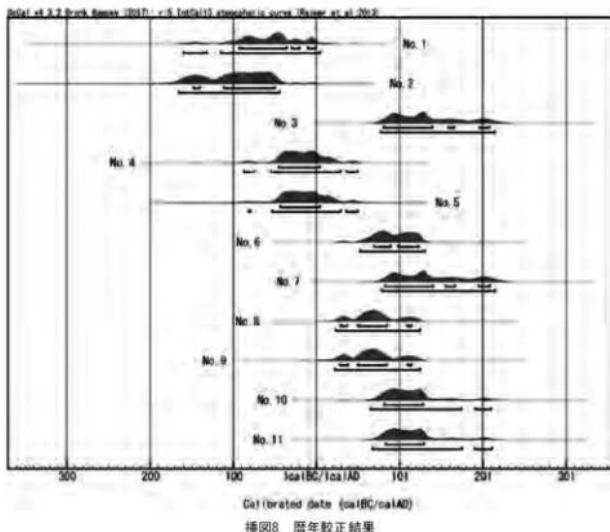


図8 历年較正結果

calAD24～AD125、No.9がcalAD23～AD125、No.10がcalAD66～AD211、No.11がcalAD68～AD212、である。多少ばらつきがあるものの、紀元前1世紀～2世紀前半の範囲内にある試料が大半であり、弥生時代後期（庄内期）と考えられている発掘調査所見とも概ね調和的である。

(2) 樹種同定

結果を表2に示す。No.1はa1、a2ともにアカガシ亜属、No.2はイネ科草本類である。以下に検出された試料の解剖学的所見や用途等について述べる。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列で1～15細胞高である。複合放射組織は、写真的範囲内には存在しない（存在する場所もある）。

アカガシ亜属は、遺跡周辺に普通にみられる樹木で、容易に採取できる。加工しにくいが、重硬なため、農耕具や器具材、建築材として使われることが多い。当時の用材が何らかの火熱を受けて炭化したと思われる。

・イネ科草本類 (Gramineae)

断面は直径2.5mm（葉鞘含む）の円柱状で一部欠損。中心部は中空。茎の周囲が葉鞘に包まれる。小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に節部細胞がある。これらを繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。タケ類に比べて繊維細胞が薄いので、草本類と思われる。柔組織中は海綿状の粗い細胞からなり、維管束も大きく繊維細胞も薄い。一方茎の周囲の維管束は小型で、繊維細胞の密度が高く、細胞壁も厚い。このように維管束が組織中に散在し、不齊中心柱をなす。葉鞘の構造、茎の太さ、繊維細胞の発達状況からイネ科草本類である。イネ科草本類は光合成の方式によりC3植物とC4植物に分類される。今回の試料は、炭素の安定同位体比の数値（年代測定結果に記されているδ13Cの値）からみて、C4植物

表3 炭化米試料の計測値

No.	遺構	分類群	状態	個数	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ×幅	長さ/幅	粒大・粒形
11	SH39-1	床面	イネ 完形 炭化	6	1	4.40	2.45	1.99	10.78	1.80	短粒極小型
11	SH39-1	床面	イネ 完形 炭化	-	2	4.81	2.66	1.84	12.79	1.81	短粒小型
11	SH39-1	床面	イネ 完形 炭化	-	3	4.41	2.99	2.14	13.19	1.47	短粒小型
11	SH39-1	床面	イネ 完形 炭化	-	4	4.56	2.86	1.91	13.04	1.59	短粒小型
11	SH39-1	床面	イネ 完形 炭化	-	5	4.52	2.60	1.72	11.75	1.74	短粒極小型
11	SH39-1	床面	イネ 完形 炭化	-	6	4.39	2.63	1.93	11.55	1.67	短粒極小型

注) 計測はデジタルノギスを使用、粒大・粒形は佐藤(1988)に基づく。

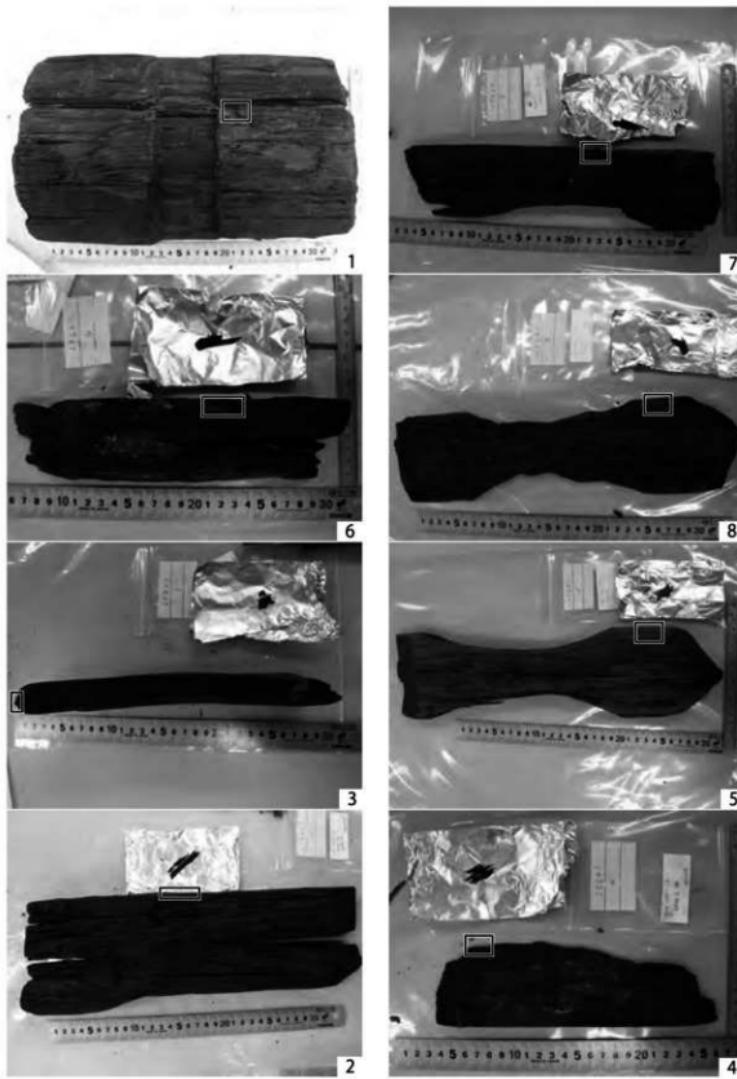
である。桿の太さから草丈數十センチの小型のC4植物イネ科(たとえばオヒシバとかエノコログサの類)と思われる。C4植物は温暖で乾燥した場所において光合成を効率よく行うよう進化した植物である。本遺跡周辺は降水量が少なく温暖な気候であり、C4植物のイネ科は人家近くや田畠の雑草として普通に生育していたと思われる。

(3) 種実同定

結果を計測結果とともに表3に示す。炭化米の粒大・粒形(佐藤1988)は、3個が短粒・極小型、3個が短粒・小型であった。邦産の炭化米としては、標準的である(佐藤,1988)。

引用文献

- Bronk RC., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
 林 昭三,1991.日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫,1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31.京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32.京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33.京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34.京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35.京都大学木質科学研究所,47-216.
 伊東隆夫・山田昌久(編),2012.木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
 Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
 Richter H.G., Grosser D., Heinz I., and Gasson P.E. (編),2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修).海青社,70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I., and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
 佐藤敏也,1988.弥生のイネ.弥生文化の研究2生業.金闇 恕・佐原 真編.雄山閣,97-111.
 烏地 謙・伊東隆夫,1982.図説木材組織.地球社,176p.
 Stuiver M. & Polach AH., 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編),1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修).海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

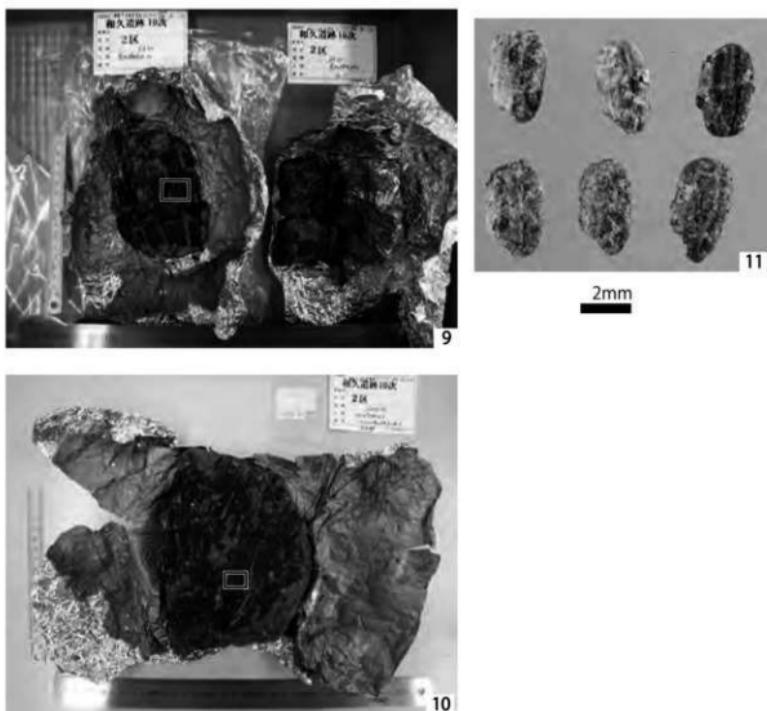


1.礎板(転用)試料採取後(No.3;SH14-3) 2.礎板試料採取後(No.6;SH14-3) 3.礎板試料採取後(No.5;SH14-3)

4.礎板試料採取後(No.10;SH14-3) 5.礎板(転用)試料採取後(No.9;SH14-3) 6.礎板試料採取後(No.4;SH14-3)

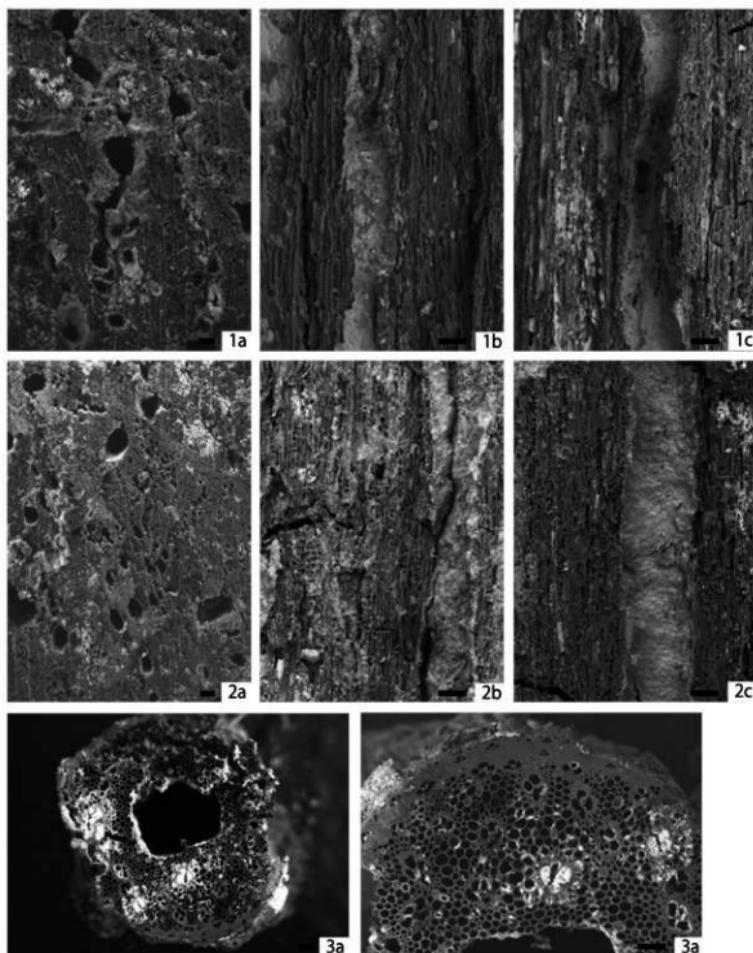
7.礎板試料採取後(No.7;SH14-3) 8.礎板(転用)試料採取後(No.8;SH14-3)

写真4 年代測定試料(1)



9.炭化材試料採取前(No.1;SI2) 10.炭化草本試料採取前(No.2;SI2) 11.炭化米(No.11;SH39-1)

写真5 年代測定試料(2)



- 1.アカガシ亜属(No.1 a1)
- 2.アカガシ亜属(No.1 a2)
- 3.イネ科草本類(No.2)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μm

写真6 炭化材

第4節 和久遺跡第1次調査SH14-3出土礎板について

前節で行った分析の試料のうち、第1次調査SH14-3（以下、SH14-3とする。）については、主に『姫路市史』第七巻下（小柴2011）において出土した土器の一部が紹介されている。本節においては、まず、試料となった礎板についてふれたのちに、出土した遺構と伴出した遺物についても概観しておきたい。

挿図9-3（写真7-1）はSP01出土で、長さ33.9cm、幅18.6cm、厚さ3.8cm～5.0cmを測る。板目取りである。長辺のはば中央に、幅5.5cm、深さ0.5～1.0cmの彫り込みがみられる。

挿図9-4・5（写真7-5）はSP02出土である。断面二段掘り状を呈するピットで、4が下段に、5が上段に配置されていた。4は長辺23cm、短辺6.4cm、厚さ約2.5cmを測る。板目取りである。5は長辺約23cm、短辺8.5cm、厚さ1.8～2.2cmを測る。板目取りである。4よりも整った板状を呈する。上端は欠損しているが、下端については4と同様上下面から削りを加えている。

挿図9-6（写真7-2）・7・8（写真7-4）・9（写真7-3）・10（写真7-6）はSP04出土である。出土位置は、6が最上部で、その下位に7・8が併置され、9が最下部に据えられていた。なお、10の詳細な出土状況は不明である。6は長辺36.7cm、短辺10.5～12.0cm、厚さ2.7～3.4cmを測る。板目取りである。下端は前述の4・5と同様、上下面から斜めに削られている。7は幅10.8～12.0cm、長さ37.2cm、厚さ1.5～2.6cmを測る。面に僅かに加工痕と思われる擦痕がみえるが、板状を呈する以外のことは不明と言わざるを得ない。8・9は鳥形木製品で、板の側面や小口を切り込むことにより形作られており、平面的に鳥の胴体を象ったと考えられる。胴体部分には羽根を接合したような痕跡はみられない。両者を比較すると、8は細部に未だ粗さを残すのに対し、9はより整美な印象を受ける。法量について、8は全長34.2cm、厚さは3.0～4.8cmと、尾から頭部にかけて厚みを増す。また、頭部は幅9.0cm、長さ13.2cm、胴部は長さ8.5cm、幅4.7～6.0cm、尾は長さ12.5cm、幅9.1cmをそれぞれ測る。表面には僅かに擦痕が残る。9は全長38.1cm、厚さは概ね2.7cmで、8とは異なり一定した厚みを保っている。また、頭部は長さ18.5cm、幅10.0cm、胴部は長さ9.0cm、幅5.2cm、尾は長さ11.1cm、幅10.2cmをそれぞれ測る。表面に明瞭な加工痕はみえないが、尾の端部は上面からのみ削りを加えている。10は長さ21.9cm、幅約6cm、厚さ2.0cmを測る板状を呈する。両小口側は斜めに削られている。

以上が、今回分析した礎板であるが、7を除く全てに加工痕を確認した。その多くが板状の部材の両小口を斜めに削るというものであった。また、8・9のように鳥形木製品の転用材と思われる部材がみられたことは、木製品の出土数が少ない姫路市内においては重要な例となる。

次に、上述の木製礎板が出土したSH14-3と、その廃絶後に構築されたSH14-1についてみておきたい。

SH14-3は調査区中程やや東寄りで検出した。平面は1辺約5.2mの方形を呈し、検出面から床面までの深さは約40cmを測る。床面積はベッド状遺構の内側が14.1m²、ベッド状遺構は12.3m²である。屋内施設としては、主柱穴、周壁溝、ベッド状遺構と燃焼施設であるイチマル土坑を有する。主柱穴は4基あり、それぞれ長軸約35cm、短軸約20cmの平面楕円形を呈する。このうちSP01とSP02については、礎板が2枚あり、その間には拳大から人頭大の円礫が充填されていた。周壁溝はベッド状遺構の外側のみに巡り、幅約10cmを測る。盛土によるベッド状遺構は北西側で途切れており、全周しない。床面からの高さは12cmである。燃焼施設であるイチマル土坑は床面のはば中央にマル土坑（SK01）を、イチ土坑をその西側に配置している。このような配置は和久遺跡の既往調査例においては珍しい。盛土による土手はマル土坑の周囲にのみ構築されている。小柴分類のB5に当たる（小柴2003）。イチ土坑は明瞭な土坑状の掘り込みを有さず、炭屑の広がりで認識した。マル土坑の平面形は不整形な隅丸方形で、長軸55～75cm、短軸30～40cm、深さ45cmを測る。床面下には深さ約10cmの平面不整形な下部構造を有する。

SH14-3 墓没後にはほぼ重複する位置でSH14-2が、そしてSH14-2 墓没後にはほぼ同位置でSH14-1という3棟の堅穴建物が連続して構築されている。

次に、床面から一括性の高い状況を示す遺物が出土したSH14-1について述べることにする。SH14-1は1辺が5.5m～6.2mの平面方形を呈する。検出面から床面までの深さは約10cmである。床面積は36.2m²である。屋内施設としては、主柱穴、周壁溝と燃焼施設であるイチマル土坑を有する。主柱穴は2基あり、それぞれ長軸約45cm、短軸約30cmの不整な楕円形を呈する。周壁溝は外側に巡り、幅約20cmを測る。燃焼施設であるイチマル土坑は床面のはば中央にマル土坑を、イチ土坑をその西側に配置している。このような配置はSH14-3同様、和久遺跡の既往調査例においては珍しい。なお、このイチマル土坑は土手を持たず、小柴分類のB5に当たる（小柴2003）。また、イチ土坑は明瞭な掘り込みを持たず、炭層の広がりで認識した。マル土坑の平面形は不整形な隅丸方形で、長軸105cm、短軸95cm、深さ12cmを測る。

以上、遺構については現場での観察所見を交えて記載した。次に出土土器についてふれておくことにする。

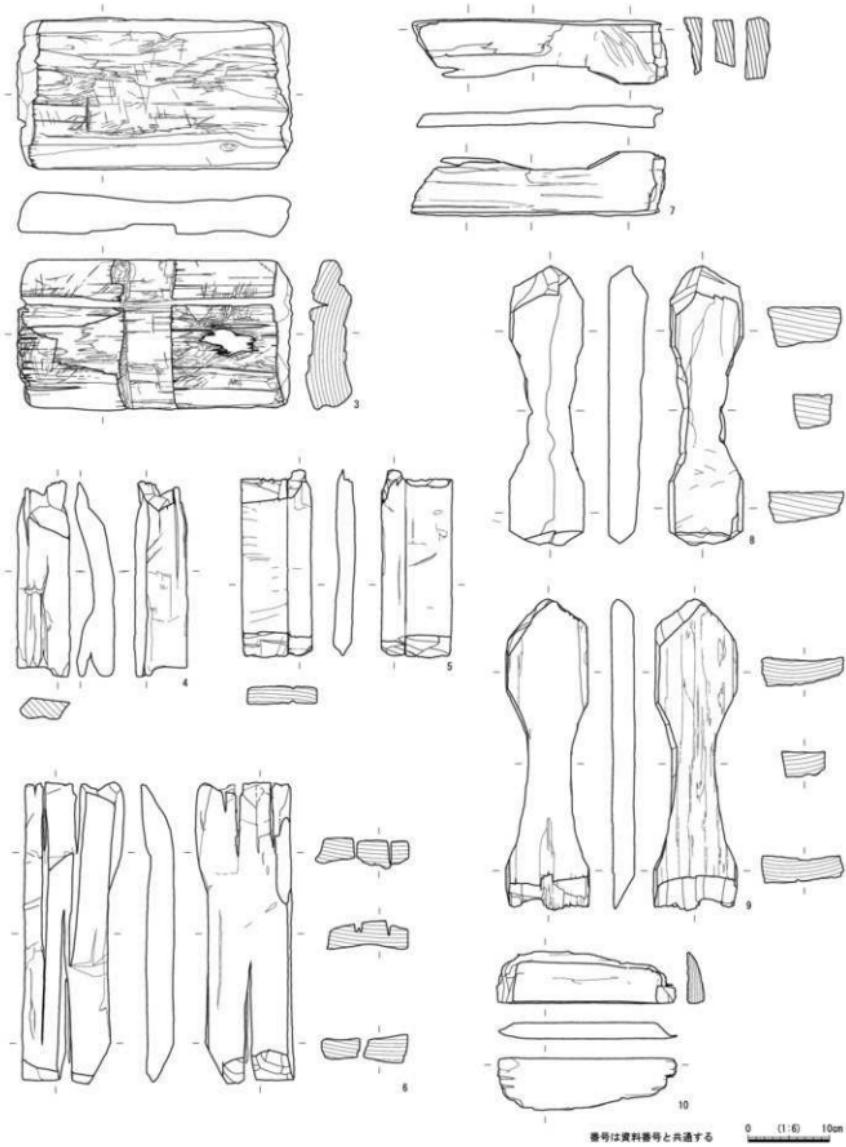
SH14-3では、主に床面から遊離した状態で出土している。複合口縁壺（挿図11-1）、壺（挿図11-2・3）、小型の鉢（挿図11-4・5）、鉢（挿図11-6）、性格不明の土製品（挿図11-7）である。1はやや中膨れする口縁部を有する。2は外面に僅かに右上がりのタタキが残存する。3は底部の粘土塊の充填が不十分なために上げ底状になっている。2と比するとやや古層を呈するようと思われる。図面は掲載していないが、丸底を呈する小片が伴出していたことも付記しておく。4・5について、4は細部の調整が甘くやや古層を呈するのに対し、5は細部の稜線がやや鋭く新相を呈するようにみえる。両者はともに器壁が粗いため、調整は不明である。6は外面上半に3条の浅い沈線を有する。上半は横位の、下半はやや左上がり斜位の匙面状のミガキを施す。7は紐通しの孔が穿たれた把手と思われる。本来は長軸が上下となり、長胴、もしくは筒状の部位を有する器種から剥落したものと考えられる。

これらのうち、1や4・5については川島遺跡20-溝出土の土器群との共通性が看守できるが、3・4・6のようにやや古層を呈するものも含んでおり、庄内式の中でも前半に位置付けるのが妥当ではないかと思われる。

次にSH14-3 墓没後に構築されたSH14-1の出土土器についてみることにする。本遺構では、床面上で一括性を保った状態で出土した一群（挿図12-1～10）と床面から遊離した状態で出土した一群（挿図12-11～24）がある。1～4は庄内型壺である。1は比較的直線的に伸びる口縁部を有し、端部は僅かに摘むことで外面に直立気味の面を持つ。胴部上半から肩部においては横方向の細密なタタキがみえる。肩部は張らない。内面調整は不明である。2は口縁部中程が僅かに膨れ気味に伸びる。端部は上下に僅かに抵張し外傾面を有する。胴部上半から肩部においては外面には、横方向の細密なタタキがみえる。内面調整について胴部上半は反時計回りでやや左上がりのケズリの後に、時計回りの右上がりケズリを施すが、口縁部の屈曲部までは至らない。3は長くやや内湾気味に伸びる口縁部形態で、端部は丸く取めており面を持たない。外面調整は不明な一方、内面はわずかにケズリが残り、口縁部の屈曲部に至る。4は中程が膨れる口縁部形態で、端部は丸く収めている。調整について、外面はヨコナデがみえる。内面は不明であるが、口縁部の屈曲部の稜線がしっかりとをしているのは、ケズリによるものと考えられる。1～4は肉眼観察から地元産と思われる。5は器壁がやや厚く、ごく僅かに外反する口縁部を有し、端部は上方に僅かに摘み上げることで外傾面を形成する。外面には接合痕が残る。調整について、外面はごく僅かに右上がりのタタキが残り、内面は反時計回りのはば横方向のケズリがみえる。6は口径17.0cm、残存高は27.3cmを測る。底部は稜線の甘い平底、もしくは丸底であると思われ、本来の器高もさほど変わらないと推定できる。口縁部は中程が僅かに膨れ、内湾する。端部は肥厚する。外面の

ヨコナデは強く肩部上半まで至る。内面は左上がりのハケメが微細に残る。胴部最大径は器高の中央付近に位置し、さほど強くは張らない。外面調整は右上がりのやや比較的細かいタタキの後に胴部最大径付近までは上下方向のピッチの短いハケメが切る。内面は下から上方に向かって搔き上げるようなケズリが胴部最大径付近まで至り、それ以上はやや左上がり方向、肩部付近では横方向へと部位毎に向きを変える。口縁部の形状や全体的な器形から、長越遺跡住居址15や鶴遺跡1次調査の「土師の溝」(中溝1973)等の資料に類例がみられ、庄内式併行期でもやや新相を示すと考えられる。7・8は有稜高杯である。7は棱線を境に口縁部と杯部の底面が明瞭に分かれるタイプで、口縁部は直線的に長く伸びる。残存しないが、杯部の底面は内湾せずには水平であったと思われる。本資料はその棱線の接合箇所で剝離しているようである。庄内式併行期の中でも半ばに位置づけられる。8はほぼ完形に復元できた。口縁部は外反しながらやや大きく広がっている。杯部下半は内湾気味にやや深さを持つ。脚部は中実である。脚部は直線的に広がるが底径はさほど大きくなない。7とは同時期の所産と位置づけられるが、杯についてみると、例えば北山遺跡土坑25例に類似する形態がみられることから所属時期についてはなお検討の余地を残す。9は台付椀と呼ぶべき器形を呈する。類例は少ない。椀部・脚台部の内外面に沈線状のミガキがみえる。7・8と同時期の遺構に類例がみられるため、ここでは同時期のものとして捉えておくことにする。10は小型器台である。器壁が粗いため微細なハケメが残るのみである。7~9とほぼ同時期に類例がみられる。

次に床面から遺離して出土した一群についてみておく。11~13は壺である。11の器壁は粗く詳細は不明である。12は中程でやや膨れる口縁部形態が特徴で、内外面に丁寧な横なでを施す。肩部のタタキは細密である。庄内形壺の可能性がある。13は庄内形壺である。直線的に伸びる口縁部で、端部はやや斜め上方に摘み上げることで内傾する端面を有する。12・13はいずれも地元産と思われる。14は有段鉢である。先述の鶴遺跡1次調査の「土師の溝」に類例がみえ、やや新相を示す。15~20は高杯である。15は脚部内面に絞り目を残すが器壁は粗くその他の調整は不明である。16の器壁も粗いが、脚部頭部に刺突痕がみえる。杯部に脚部を貼付けている可能性がある。17は杯部中央に凹みがあり、弥生土器に通じる製作技法を残していると思われる。18は同一個体の杯部底部と脚据部である。杯部には脚部を挿入して接合した痕跡がみえる。19は器壁が粗いが、外面に細いミガキが微細に残る。20も僅かに調整が残る程度であるが、内面に二次被熱の痕跡がみえるという。21は小型器台の脚部である。外面調整はみえないが、内面にはナデ・オサエが残る。作りはやや粗い。22は小型丸底土器である。器壁が粗いためか、口縁部の屈曲部がいまだ付くみえる。23は鉢である。外面に右上がりのタタキがみえる。鉢部内面上端には横方向のミガキを施すことにより口縁部の屈曲部を形成しているように思われる。24は山陰型瓶形土器である。横位の半環状の把手が対称的位置に一対付けられている。把手の断面形は長方形を呈し、底部の形態は先述の把手直下から内湾し緩やかに窄まっており、突堤はめぐらさない。器面の調整について、外面は主に縱方向のハケメ、内面は下から上方向のケズリである。



番号は資料番号と共に通する

0 (1:6) 10cm

插図9 1次調査 SH14-3出土石板 (S=1:6)



写真7 1次調査 SH14-3 出土碳板

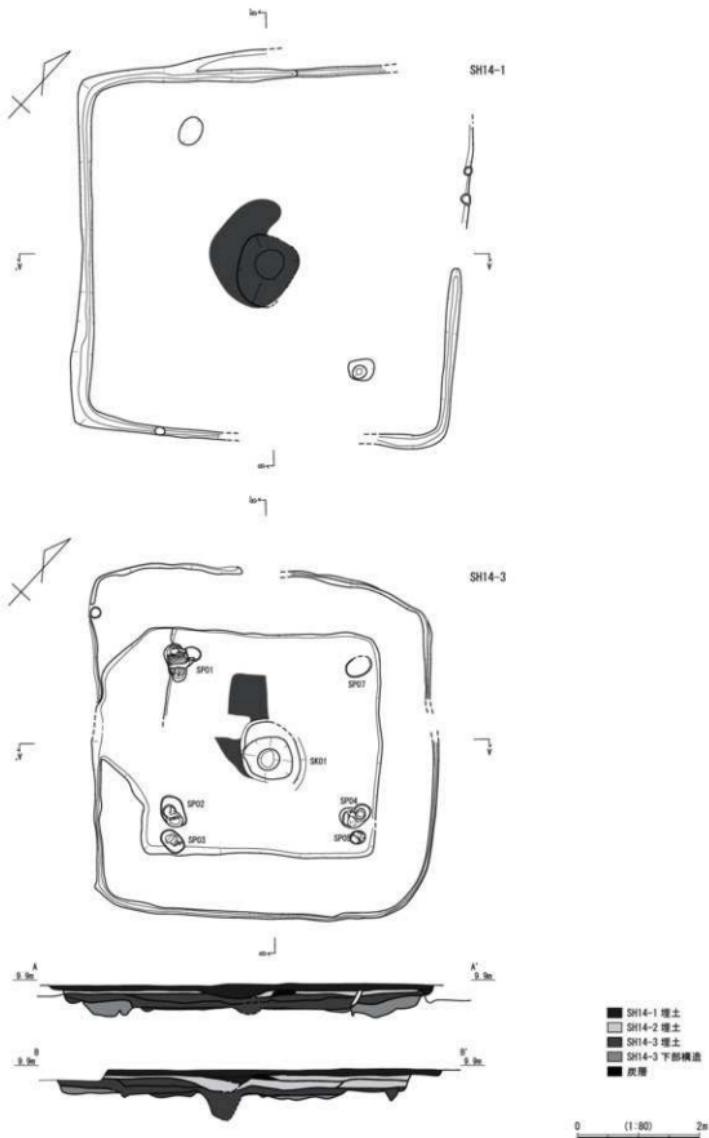
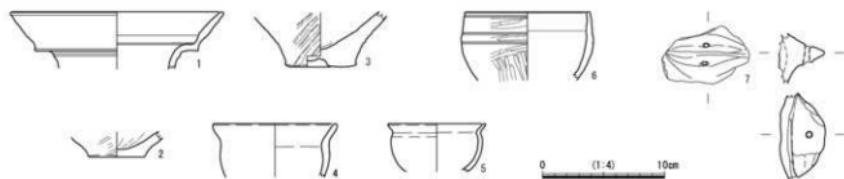
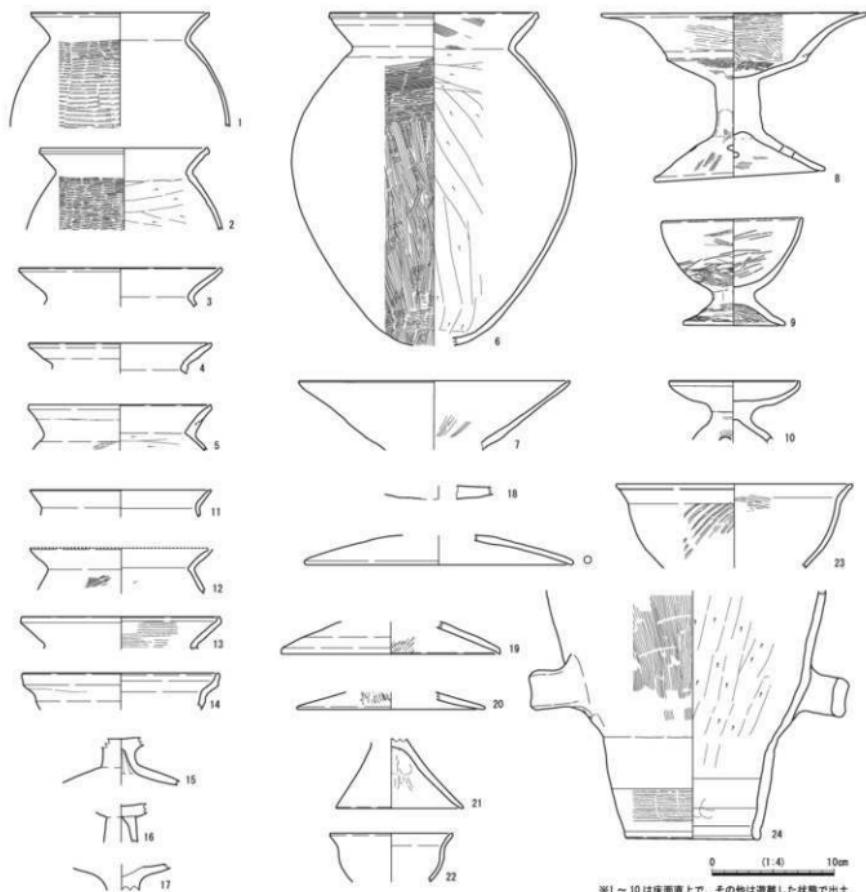


插圖10 1次調查 SH14-1・14-3平面図・断面図 (S=1:80)



挿図11 1次調査 SH14-3出土土器 (S=1:4)



挿図12 1次調査 SH14-1出土土器 (S=1:4)

第5章　まとめ

第1節　竪穴建物跡の変遷

今回検出した竪穴建物跡についての概要是、先述したとおりであるが、それらの変遷についてまとめる。

弥生時代中期中葉

SK 1を検出した。建物跡の可能性もわずかに考えられるSK 1は、現代の搅乱や他の遺構により削平を受け、その規模・形状は判然としない。第9次調査では、弥生時代中期後半の遺物が共伴する竪穴建物跡が検出されている。そのため後述するように、弥生時代中期後葉には、和久遺跡において集落形成が行われていることは確実であるが、その時期が中期中葉まで遡れるかは今回の調査では言及できない。

弥生時代中期後葉

SI 1～3の3棟を検出した。平面形態はいずれも円形を呈する。第9次調査で検出した弥生時代中期とされるSH 9の出土遺物ともおよそ同時期の遺物がSI 1～3で出土している。このことから和久遺跡の集落の形成が弥生時代中期後葉であることを追認することができた。建物跡以外にも土坑も検出していることから、集落の営為活動をうかがうことができる。

弥生時代後期後葉

SI 4・5の2棟を検出した。第1・9次調査を含めると34棟となる。SI 4・5は、第9次調査で述べられているように互いに重複することのない円形、もしくは一回り小さい方形の平面形態を呈しており、これまでの成果を追認する成果であった。

古墳時代（庄内式Ⅲ）

SI 6～9の4棟を検出した。平面形態はいずれも方形を呈する。

古墳時代（庄内式Ⅲ～Ⅳ）

SI 10～16の7棟を検出した。平面形態はいずれも方形を呈する。

古墳時代（Ⅳ～Ⅴ）

当該時期の竪穴建物跡は確認できなかったが、その他の遺構としては、SD 4を検出した。

以上、時期ごとに竪穴建物跡を主にした遺構の変遷を述べてきた。その結果、庄内期になるにつれ、建物数が増える傾向を確認することができる。この傾向は、第9次調査の成果をおよそ追認するものである。また弥生時代後期後葉と庄内期での建物数の差は著しく、この段階において和久遺跡に何らかの画期があったことは、疑いないものと考えられる。

第2節　SD 2について

今回検出したSD 2は、先述したように調査区西部を南北に貫く溝であり、埋土中層では溝中央部から東法面にかけて土器が集中して出土する状況であった。ここではそれらの要素も含めた上でSD 2の性格について若干の考察を行う。

調査区の地形をみると、竪穴建物跡を多数検出した範囲周辺の標高は約41m前後である。これに対してSD 2に近づくにつれて、標高は徐々に低くなりSD 2東肩際で387m、SD 2以西はさらに低く381mとなる。この地形の高低差は、地形が下がりはじめるSD 2以東約1.0m辺りからSD 3にかけて、須恵器などが混入する堆積層を検出したことからも明らかである。加えて遺構分布に注目すると、比較的標高が高い範囲で竪穴建

物跡などの遺構が展開し、SD 2に近づくにつれて遺構が少なくなる傾向にある。SD 2以西に関しては、調査範囲がわずかな範囲ではあるが、遺構が皆無であったことも注目すべきことであろう。これに付加して、今回の調査区から南西20mの地点で、平成17年度に行われた試掘確認3次調査Tr.8（図版3）では、SD 2と同時期・同規模とみられる溝が検出されたとともに、溝の西側では低湿地が検出されている。SD 2と平成17年度に検出された溝が一連のものと想定すればSD 2以西で遺構が皆無であったことと整合する。

これらを勘案すると、SD 2は集落域の内と外とを隔てる区画施設としての溝であったと考えられる。またSD 2と平行に伸びるSD 3については遺物がないため、時期は判然としないが、同時期に一体のものとして機能していた可能性も考えられ、今後の調査への課題となる。

第3節 中世以降の遺構について

中世以降の遺構は、歎溝群・SB 1～4・SA 1・SD 6を検出した。歎溝群は、その形状・規模から、田畠の歎溝痕跡である。SB 1～3・SA 1の主軸方向はいずれもおよそ真北方向を向いている。またこれらを構成する柱穴の規模はおよそ同等であることから大幅な時期差があるとは考えにくい。SB 4の主軸方向は北から約15度東へ振る。そのためSB 1～3・SA 1とは時期が異なるものと考えられる。SD 6は、先に述べたとおり東西方向に伸び、調査区内で直角に折れ曲がって北方向へと伸びる溝である。平成17年に行われた試掘確認2次調査Tr.5（図版3）で検出された溝がSD 6の北延長部で検出されており、断面形状・出土遺物からSD 6と一連の溝であると考えられる。基幹水路のような性格が想定できる。

なお中世段階の和久遺跡の遺構を考えるにあたり、歴史学的視点から和久遺跡周辺の状況に触れておく。中世段階の播磨では、莊園が設立されるようになり、姫路市域においても院政期になると増加するようになる（姫路市2018）。このうち、和久遺跡が位置する揖東郡、その西側の揖西郡には、鳥羽院・後白河院などに関連する王家領が展開した。和久遺跡一帯は、福井莊と呼ばれる莊園に含まれる。福井莊は、現在の姫路市勝原区・大津区・網干区から揖保郡太子町糸井付近まで広がる莊園であり（姫路市2018）、その規模もさることながら福井莊関連史料も豊富に残ることから、姫路市域を代表する莊園とされる。

福井莊は、寿永2年（1183）に平家が都落ちをするまでは平家領であった。しかし都落ち後は、後白河院が進退するようになり、莊園領主は、高野山を経て神護寺となつた。なお同時期には、梶原景時・吉川氏が地頭として入部し、武家勢力による支配系譜がみられるようになるなど、中世段階の福井莊は、様々な権力支配の下に位置していたといえよう。

今回調査で検出した遺構が、上述した中世福井莊に直接関連するものと評価することはできない。しかし、今後の調査成果の蓄積を待って、今回検出した4棟の掘立柱建物跡や水路が、中世福井莊の空間復元に繋がる可能性は充分に考えられる。今後の周辺における調査成果に期待したい。

第4節 おわりに

今回の調査では、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭にかけての堅穴建物跡を検出するとともに、集落域の西限を区画すると考えられる溝を検出した。また集落形成時期の上限年代を従来よりも遡らせる可能性をもつ弥生時代中期中葉の遺物を伴う遺構も検出した。第1次・第9次調査の成果を着実に追認する成果とともに、新たな成果を若干ながらでも得られたことの意義は大きい。

集落域を区画する可能性がある溝の検出と、溝（SD 2）と堅穴建物跡が集中するエリアの標高差により、微高地に集落が営まれていることは確実である。今後は、水田など食料生産に関する遺構などが今回検出

第5章　まとめ

した溝（SD 2）以西において検出されることが期待される。検出されれば、遺跡の空間復元が一挙に前進し、近隣に立地する間ノ口遺跡・前田遺跡との比較をもって、和久遺跡の本質にさらに迫ることが可能になろう。今後の調査成果を期待してまとめとしたい。

引用・参考文献

- 秋山浩三2006「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
浅田芳朗・今里幾次『播磨横跡遺跡発掘調査略報』
池田征弘編1999「清水遺跡-県道桑原北山保川緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告-」兵庫県文化財調査報告第183冊 兵庫県教育委員会
石野博信1971「川島・20溝の土師器群」樋本誠一編『川島・立岡遺跡（本文編）』太子町教育委員会
市村慎太郎2012「布留式と画期」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会
今里幾次1943「姫路市之郷彌生式遺跡の研究-播磨國彌生式土器の様式分類-」『古代文化』第十四卷 第9號
今里幾次1969a「播磨彌生式土器の動態（一）」『考古学研究』第15卷第4号 考古学研究会
今里幾次1969b「播磨彌生式土器の動態（二）」『考古学研究』第16卷第1号 考古学研究会
今里幾次1977「播磨の雲母土器」『考古学研究』第22卷第4号 考古学研究会
今里幾次1978「第2章 長越遺跡調査前史」松下勝編『播磨・長越遺跡-本文編-』兵庫県文化財調査報告書第12冊 兵庫県教育委員会
今里幾次1980a『播磨考古学研究』 今里幾次論文集刊行会
岩崎直也1984「四国系土器群の伴出」『大阪文化誌』第17号 財团法人大阪文化財センター
上田千佳徳1999「Ⅲ 土器からみた地域性」『研究輯録』Ⅸ 財团法人広島県埋蔵文化財調査センター
大久保徹也1990「第10節 下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」藤吉史郎・西村尋文編『下川津遺跡 - 第2分冊 - 濑戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・本州四国連絡橋公団
大久保徹也2006「讃岐及び周辺地域の前方後円墳成立時期の土器様相」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
置田雅昭1985「弥生土器から土師器へ」『月刊考古学ジャーナル』9月号（第二百五十二号） ニューサイエンス社
大谷輝彦 2003 「2 和久遺跡（2次）」
甲斐昭光編1990「周世入相遺跡-県道高尾・有年横尾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」兵庫県文化財調査報告書第70冊 兵庫県教育委員会
香芝市二上山博物館編2006『シンポジウム『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』資料集』ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 香芝市教育委員会
香芝市二上山博物館編2011『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』株式会社学生社
岸本一宏2001「北東播磨の弥生後期土器」松岡千寿編『荒田神社裏遺跡 - 主要地方加美山崎線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告-』兵庫県文化財調査報告 第221冊 兵庫県教育委員会
岸本道昭1995「2494-土器群の実態と性格」『養久山・前地遺跡-龍野広域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』龍野市文化財調査報告15 龍野市教育委員会
岸本道昭1995「庄内播磨型甕発生説考」「庄内式土器研究-庄内式併行期の土器生産とその動き-」X 庄内式

土器研究会

- 岸本道昭編2001『北山遺跡-1988・1989年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』龍野市文化財調査報告23 龍野市教育委員会
- 國下多美樹1999「乙調地域における土器交流拠点」『庄内式土器研究-庄内式併行期の土器生産とその動き-』庄内式併行期の土器交流拠点』XX 庄内式土器研究
- 甲元真之・寺沢薰編2011『弥生時代 上』講座日本の考古学5 青木書店
- 甲元真之・寺沢薰編2011『弥生時代 下』講座日本の考古学6 青木書店
- 小柴治子2003「丁：○（いぢまる）型中央土坑」の変遷-和久遺跡出土資料の検討-』『統文化財学論集』 文化財学論集刊行会
- 小柴治子2010「Y22」和久遺跡』姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第七卷下 資料編 考古 姫路市
- 酒井龍一1975「第6章「付載」-和泉における弥生式-土師器の移行過程について- 認識論的作業仮説として』『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会
- 酒井龍一1976「和泉における『伝統式V様式』に関する覚え書」「農中・古池遺跡 発掘調査概報 そのⅢ』農中・古池遺跡調査会
- 狹川真一編2001『旧練兵場遺跡』普通寺教育委員会・(財)元興寺文化財研究所
- 篠宮正1996「第3節 弥生時代中期中頃から後半の土器」兵庫県埋蔵文化財調査事務所編『神戸市西区玉津田中遺跡-第6分冊-』兵庫県文化財調査報告 第135-6冊 兵庫県教育委員会
- 篠宮正編2002「五反田遺跡 県立コウノトリの鷺公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告 第227冊 兵庫県教育委員会
- 篠宮正2007「2.東播磨地域の編年」長友朋子編『弥生土器集成と編年 -播磨編-』六一書房
- 篠宮正2007b「弥生土器の分類」篠宮正編『川戸遺跡（主）穴粟香寺線単独道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 兵庫県文化財調査報告第314冊 兵庫県教育委員会
- 菅原康夫1987「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」森浩一編『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 菅原康夫1992「弥生時代終末期社会の特質」森浩一編『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 菅原康夫・梅木謙一編2000「弥生土器の様式と編年」四国編 株式会社木耳社
- 杉井健1994「山陰型瓶型土器と山陰地方」「古文化談叢」第33集 九州古文化研究会
- 高木真光1981「7中田遺跡<刑部遺跡>関西電力K.K.地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」「昭和53・54年度 埋蔵文化財発掘調査年報」八尾市文化財調査報告7 八尾市教育委員会
- 高野陽子編2003「佐山遺跡」京都府遺跡調査報告書第33冊<本文編> (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子2004「共同研究 庄内式壺の出現」『京都府埋蔵文化財情報』第92号 財團法人京都府埋蔵文化財センター
- 高野陽子2010「山城の庄内式壺をめぐる二、三の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財團法人京都府文化財センター
- 田中琢1965「布留式以前」「考古学研究」第12卷第2号 考古学研究会

第5章　まとめ

- 田中元浩2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 有限責任中間法人日本考古学協会
- 次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40卷第2号 考古学研究会
- 坪井清足1956『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』笠岡市教育委員会
- 都出比呂志1974「古墳出現前夜の集團関係-淀川水系を中心に-」『考古学研究』第20卷第4号 考古学研究会
- 寺沢薰1980「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」寺沢薰編『奈良市六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 寺沢薰1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」寺沢薰編『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 友久伸子1990「弥生時代の播磨型装飾壺-その文様にみる地域色-」『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会
- 長友朋子2004「近畿における編年研究の経緯と現状」「弥生中期土器の併行關係」第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 長友朋子・田中元浩2007「3、西播磨地域の土器編年」大手前大学史学研究所編『弥生土器集成と編年-播磨編-』六一書房
- 西岡達哉編1989『稻木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 香川県埋蔵文化財研究会
- 原口昭三1968「大阪府松原市上田町遺跡の調査」「大阪府立島上高等学校研究紀要」復刊第3号 大阪府立島上高等学校
- 播磨学研究所編2010「播磨から読み解く邪馬台国 最新考古学事情」神戸新聞総合出版センター
- 姫路市2018『姫路市史』第七巻 下 資料編 考古
- 姫路市教育委員会 2013『和久遺跡第9次発掘調査報告書-ツカザキ病院新館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査-』
- 姫路百年編集委員会編1990『姫路百年』姫路市
- 樋本誠一編1981『川島・立岡遺跡(本文編)』太子町教育委員会
- 古本寛1993「中期後半の弥生土器について」「尾崎遺跡Ⅱ-市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 龍野市文化財調査報告14 龍野市教育委員会
- 古本寛2001「播磨系弥生鉢形土器の地域性について -地域制の位置指標として-」「ひょうご考古」第8号 兵庫考古研究会
- 松下勝1971「檀特山遺跡確認調査報告」「川島・立岡遺跡」太子町教育委員会
- 松下勝編1976「播磨・長越遺跡-本分編-」兵庫県文化財報告第12冊 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人1985「土器の交流-西日本-」「月刊考古学ジャーナル」9月号(第二百五十二号) ニューサイエンス社
- 村上泰樹編1990「上構遺跡-揖保川流域下水道建設に伴う発掘調査報告-」兵庫県文化財調査報告 第69冊 兵庫県教育委員会
- 山田清朝編1997「美乃利遺跡」兵庫県文化財調査報告書第165冊 兵庫県教育委員会
- 山田清朝編2002「共同住宅造成にもなう日輪寺遺跡発掘調査報告書 日輪寺遺跡第4次~第7次調査」神戸市教育委員会

- 山本三郎1971「第2節　播磨中期弥生式土器の実態－土坑出土土器を中心に－」榎本誠一編『川島・立岡遺跡（本文編）』太子町教育委員会
- 山本三郎・田井恭一編1990『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会
- 山本三郎編1995『赤穂市　堂山遺跡－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告XVI-本文編』兵庫県文化財調査報告第142冊　兵庫県教育委員会
- 山本博利・秋枝芳編『八代深田遺跡－姫路市八代字深田－』姫路市文化財調査報告VI　姫路市教育委員会
- 米田敏幸1986『中田1丁目39番地出土土器』「八尾市文化財紀要」2　八尾市教育委員会文化財室
- 湯村功編2002『鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡－一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II-』鳥取県教育庁文化財団調査報告書74　財团法人　鳥取県教育文化財団
- 渡辺昇他編1987『法林寺北遺跡』兵庫県文化財調査報告　第49冊　兵庫県教育委員会
- 渡辺昇編1990『上構遺跡－揖保川流域下水道建設工事に伴う発掘調査報告-』兵庫県文化財調査報告第69冊　兵庫県教育委員会
- 渡辺昇1996「長越遺跡の庄内式土器について－播磨での庄内式土器編年と播磨型甕存在の意義」「庄内式土器研究－庄内式併行期の土器生産とその動き－「摂津・播磨を中心とする庄内併行期の動き」」XI　庄内式土器研究
- 渡辺昇1999「庄内期の播磨の集落」森岡秀人・渡辺昇編『庄内式土器研究』XXI　庄内式土器研究会
- 渡辺昇編2010『姫路市所在　長越遺跡Ⅱ（飯田湯田遺跡）－（二）船場川水系船場川都市一般河川改修事業に伴う発掘調査報告書-』兵庫県文化財調査報告書　第375冊　兵庫県教育委員会
- 渡辺昇編2011『揖保郡太子町　沖代遺跡－一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書-』兵庫県文化財調査報告第391冊　兵庫県教育委員会
- 渡辺昇編2012『姫路市　長越遺跡Ⅲ（飯田湯田遺跡）』兵庫県文化財調査報告第432冊　兵庫県教育委員会

土器觀察表

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量		形態・技法の特徴
				口径	底径	
1	弥生土器	広口壺	SK1	(36.2)	(48.2)	外縁部は縦面下端に2段の割目。頭部下端に指頭圧痕突堤4条。肩部に横描直線文と波状文。頭部最大径付近ヨコ位ミガキ。下半は左上がりリミガキ。内面：口縁部内面に指頭圧痕突堤2条。頭部は左上がりのハケメ。
2	弥生土器	広口壺	SK2	(17.6)	—	外縁部：口縁部は縦やかに折り曲げ、縦部上端に刻目。口縁部内面に新面三角形貼付突堤3条。腹部外縁に3条の貼付突堤。頭部外面に横描直線文・波状文。受部内面に突堤1条。4個一対の円形浮文1組、2対一対の鉢穴2組。頭部外縁タテ位1ヶメ、同内ヨコ位ミガキ。
3	弥生土器	広口壺	SK2	(15.2)	—	口縁部は縦やかに折り曲げ、縦部上端に刻目。口縁部内面に新面三角形貼付突堤3条。腹部外縁に新面三角形貼付突堤3条。背面外縁に横描直線文・波状文。受部内面に突堤1条。4個一対の円形浮文1組、2対一対の鉢穴2組。頭部外縁タテ位1ヶメ、同内ヨコ位ミガキ。
4	弥生土器	広口壺	SK2	(12.4)	—	頭部僅かに内凹しながら立ち上がる。口縁部下方にやや拡張。嘴面にハラ振描捺字文。頭部に横描直線文。頭部外縁タテ位ミガキ。同内ナデ・オサエ。底部外縁板状工具によるナデ・ユビオサエ。やや上選状。
5	弥生土器	壺	SK2	—	8.4	外縁タテ位ハケメ。内面ナデ・オサエ。底部外縁板状工具によるナデ・ユビオサエ。やや上選状。
6	弥生土器	壺	SK2	—	(14.4)	内外面器壁が粗く調整不明。
7	弥生土器	壺	SK2	—	—	口縁部は上方を描み上げる。内外面器壁が粗く調整不明。
8	弥生土器	壺	SK2	—	—	口縁部は上方へ描み上げる。外面上半は左上がりのハケメ。内面は主に右上がりのハケメ。
9	弥生土器	壺	SK2	—	(5.8)	外縁タテ位ミガキ。内面ケズリの後に底部付近オサエ。底部中央部に施成前穿孔。
10	弥生土器	高杯	SK2	—	—	内外面器壁が粗く調整不明。
11	弥生土器	高杯	SK2	—	(13.2)	外縁主にタテ位のピッチの低いハケメ。内面は不明。
12	弥生土器	広口壺	SI1	—	—	口縁部は縦やかに折り曲げ、縦部は捏出。口縁部内面に刻目をもつ突堤2条。
13	弥生土器	壺	SI1	—	(5.8)	外縁にタテ位ミガキが彌縫に残存。内面は奇数が粗く調整不明。
14	弥生土器	高杯	SI1	—	—	外縁は奇数が粗く調整不明。内面はヨコ位のケズリ。
15	弥生土器	台付鉢	SI1	—	—	脚部外縁主にヨコ位のミガキ。脚部との境附近に新面三角形の突堤2条。脚部内面は主にヨコ位のミガキ。脚部内面オサエ・オサエ。
16	古式土器類	鉢	SK95	—	—	外縁形態の不明。脚部外縁は左上がりのタタキ。口縁下に接合縫みえる。口縁部内面は反時計回りのハケメ。脚部内面はおもにタテ位のミガキ。
17	古式土器類	小型容器	SK95	(9.6)	(11.2)	受部・脚部外縁は隔壁が粗く調整不明。
18	石器	砾状石斧	SI1	—	—	半分欠損。中央付近に両面の穿孔の跡跡。外縁部にやや粗い剥離面と敲打痕。
19	弥生土器	広口壺	SI2	—	—	外縁僅かにタテ位1ヶメ残存。内面隔壁が粗く調整不明。頭部下半に指頭圧痕突堤。
20	弥生土器	SI2	—	—	—	口縁部は端に刻目。その後に指頭圧痕突堤2条。内面はナデ・オサエ。下端は接合面で剥離。
21	弥生土器	壺	SI2	—	(10.0)	外縁主にタテ位のミガキ。底部側面は粘土円盤接合に伴うオサエ。内面ナデ・オサエ。破面で底部の粘土円盤接合跡。
22	弥生土器	高杯	SI2	—	—	受部下半のミガキはタテ位→ヨコ位。内面は隔壁が粗く調整不明。
23	弥生土器	高杯	SI2	—	—	外縁ヨコ位ミガキ。内面ヨコナデ。
24	石器	石錐	SI2	—	—	外縁部に幅1.3~1.8mmの敲打痕。
25	石器	削離	SI2	—	—	—
26	弥生土器	高杯	SI3	—	—	内外面：主にヨコ位のミガキ。
27	弥生土器	壺	SK3	15.1	6.0	27.0 外縁：タテ位→右上がりのハケメの後にタテ位ミガキ。内面：隔壁が粗く調整不明。
28	弥生土器	把手	SK3	—	—	外縁：把手下に斜糸文。隔壁はタテ位ミガキ。把手下に複雑なタテ位ハケメの後に粗いミガキ。内面：把手の押込み痕が内面で観察可。隔壁が粗く調整不明。
29	弥生土器	広口壺	SK4	—	—	短い脚部外縁にタテ位ハケメの後に新面三角形突堤2条貼付。口縁部は縦やかに折り曲げ。頭部の面はヨコ位のミガキ。
30	弥生土器	広口壺	SK4	—	—	口縁部は下方に拡張。嘴面に5条の鋸歎線文上にタテ4個の円形浮文2列残存。
31	弥生土器	広口壺	SK4	—	—	口縁部は下方に拡張。嘴面に4条の鋸歎線文上に2本一対の棒状浮文2対残存。口縁部内面に2条の割目突堤2条。
32	弥生土器	広口壺	SK4	—	—	形態は31に近い。嘴面に円形浮文4個と棒状浮文。
33	弥生土器	壺	SK4	—	(9.6)	外縁はタテ位ミガキ。底部側面はオサエ。内面は左上がりのハケメ。底部内面の痕跡僅かに観察可。
34	弥生土器	無縁壺	SK4	—	—	外縁新面三角形突堤2条貼付。頭部に刻目。口縁部頂部に円形浮文1個残存。内面隔壁が粗く調整不明。
35	弥生土器	壺	SK4	—	—	縦やかに折り曲げた口縁部の隔壁は上方に僅かに描み出す。内外面の調整は不明。
36	弥生土器	壺	SK4	—	—	口縁部の形状は35に近い。外縁はタテ位→左上がりのハケメ。内面は左上がりのハケメ。内外面でハケメの原体が異なる。
37	弥生土器	壺	SK4	—	—	外縁はタテ位→左上がりのハケメ。内面隔壁部付近は板状工具によるナデつけ、それ以下はタテ位ケズリ。
38	弥生土器	壺	SK4	—	—	外縁はタテ位ハケメの後にハケメの原体による左上がりのハケメ。内面タテ位ハケメ、外面調整・施文に伴うオサエ。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
10YR5/4にぶい黄褐色 10YR7/3にぶい黄褐色	軟質	径1mmの大石英粒・長石粒を多く含む。	24		口縁部内面に2孔一対の組孔3対残存。
10YR7/3にぶい黄褐色 7.5YR8/3浅黄褐色	軟質	径1mm大の長石粒・赤褐色粒を含む。	24		口縁部内面に2孔一対の組穴4対残存。
7.5YR7/4にぶい黄褐色 7.5YR8/4浅黄褐色	軟質	径1.5mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	24		口縁部内面に2孔一対の組孔2対残存。
10YR8/2灰白色 7.5YR8/2灰白色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
10YR7/6深黄褐色 7.5YR8/4浅黄褐色	良好	径1~5mm大の石英粒・長石粒・灰褐色粒を多く含む。	24		底部に黒斑。
2.5YR5/8明赤褐色 5YR6/6褐色	良好	径1mm大の石英粒・長石粒を多く含む。比較的精良。	24		
10YR7/2灰白色 7.5YR8/4にぶい褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
7.5YR8/2灰白色 7.5YR8/6浅黄褐色	良好	径1mm以下の石英粒を少量含む。同大黒色粒(角閃石?)をやや多く含む。	24		
10YR7/2にぶい黄褐色 10YR6/2灰白色	良好	径1mm以下の角閃石粒・石英粒・長石粒を多く含む。	24		外面に黒斑。
10YR6/8浅黄褐色 10RS5/5赤色	良好	径1mm大の石英粒を含む。	24		
10YR7/3にぶい黄褐色	軟質	鈍物粒をほとんど含まない。	24		口縁部内面に組孔1孔残存。
10YR7/3にぶい黄褐色 10RS4赤褐色	良好	径1mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
7.5YR7/3にぶい褐色 2.5GY5/1リーブ灰黑色	良好	径2mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
10YR8/2灰白色 10YR7/4にぶい黄褐色	良好	径1mm大の石英粒・長石粒を含む。	24		
10YR8/3深黄褐色 10YR8/3浅黄褐色	良好	径1mm以下の赤褐色粒を少量化。比較的精良。	24		脚部に円孔4孔残存。
10YR8/3深黄褐色 10YR8/3浅黄褐色	良好	径2.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	25		未製品か。170.7g。
7.5YR8/3浅黄褐色 10YR8/2灰白色	軟質	鈍物粒をほとんど含まない。	25		
10YR7/2にぶい黄褐色 2.5YR6/6褐色	良好	径1mm以下の赤褐色粒を少量含む。	25		
2.5Y7/3浅黄色 2.5Y7/2灰黄色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒を含む。	25		外面に黒斑。
2.5Y8/2灰白色 2.5YR6/8褐色	軟質	長径5.1cm、短径4.4cm、厚さ2.7cm。	25		124.7g。
10YR8/2灰白色 10YR8/3深黄褐色	軟質	長径5.29cm、幅5.3cm、厚さ0.5cm。サクカイト製。	25		7.6g。
5YR7/6褐色	軟質	径0.5mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含む。	25		
10YR6/1褐色	軟質	径0.5mm大の石英粒・長石粒・雲母片を少量含む。	25		
7.5Y8/2浅黄褐色 10YR8/2灰白色	良好	径0.5mm大の石英粒・長石粒を少量含む。	25		口縁端部に黒斑。
10YR7/3にぶい黄褐色 2.5Y7/3浅黄色	軟質	径1~3mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	25		口縁部内面に2孔一対の組孔1孔残存。
5Y4/1赤色 10YR7/2にぶい黄褐色 10YR6/2灰黄色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を多く含む。	25		
10YR8/3深黄褐色 2.5YR8/2灰白色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	25		
7.5YR8/6深黄褐色 5YR7/6褐色	良好	径0.5mm大の石英粒・長石粒を少量含む。	25		
10YR8/3深黄褐色 5YR8/4褐色	良好	径1mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	25		
2.5Y8/2灰白色 10YR7/2にぶい黄褐色	軟質	径2mm大の石英粒・長石粒・角閃石を含む。角閃石は自形をなす。	25		
10YR8/2灰白色 10YR8/4深黄褐色	軟質	径0.5mm大の石英粒・長石粒をやや多く含む。	25		外面下半にスス付着。

土器觀察表

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量		形態・技法の特徴
				口径	底径	
39	弥生土器	甕	SK4	—	(6.0)	外腹タテ位ミガキ。底部付近はヨコナデ。底面は乱方向のナデ。内面は器壁が粗く調整不良。
40	弥生土器	甕	SK4	—	5.2	内外面ともに器壁が粗いが、外面上には僅かにタテ位ミガキが残存。
41	弥生土器	高杯	SK4	—	—	外腹：主に放射状のミガキ。内面：主にヨコ位のミガキ。
42	弥生土器	高杯	SK4	—	11.6	外腹：調整のタテ位ハケメの後に同方向のミガキ。内面：底部は反時計回りのケズリ。内外面の調整の後に底部端縁をヨココロ。長方形透かし孔対向二対。
43	弥生土器	高杯	SK4	—	—	外腹：三角形の透かし孔が未貫通。内面：ヨコナデ。
44	弥生土器	甕	SK4	19.9	7.8	36.4 外面：同部上半は維持調整のタテ位ハケメが残り、下半は同方向で3cm幅単位のミガキ。内面：下半は板状工具によるナデ及び、最大付近はタテ位ハケメ、器部は左上がりのハケメ。両者とも異なる工具を使用。底部中央に焼成後縫孔。
45	弥生土器	甕	SK4	—	5.8	外腹：タテ位ミガキ。ナデ・オサエ。底部中央に焼成後縫孔。
46	石器	打製石器	SK4	—	—	長さ26cm、葉幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.3g。平基式。サヌカイト製（金山産、複数）
47	石器	打製石器	SK4	—	—	長さ21cm、葉幅1.6cm～、厚さ0.45cm、重さ1.7g。平基式。基部折損。サヌカイト製（金山産、複数）
48	弥生土器	広口甕	SK5	—	8.7	胸脚部・大往付近で、強く張る。外腹：脚部下半ヨコ位ミガキ。上半は一次調整のタテ位ハケメの後に板状工具による調査跡・波状文・斜格子文・剥離文を残す。内面：下半は板状工具によるナデ及び、最大付近はナデ・オサエ。上半は左上がりのケズリ、頭脚部はナデ・オサエ。
49	弥生土器	甕	SK5	34.8	—	外腹：口部部は強いヨコナデ。胸脚上半は一次調整のタテ位ハケメが残る。脚部中程は左上がりのミガキが僅かに残る。内面：胸脚上半はタテ位ハケメの後に左上がりのハケメ、脚部下部は下へ向かう方向のケズリ。
50	弥生土器	無颈甕	SK6	(16.6)	—	圓錐的に膨らむ瓶形に内側に拡張する口縁端壁を持つ。外腹：瓶部の一次調整はタテ位ハケメ。瓶部上端部上の4条の凹部文間にねじれな割目、2孔一対の円孔一対残存、その下位にはハケメ原体による剝突文、円形浮文。内面：器壁が粗く調整不良。
51	弥生土器	甕	SK6	—	—	外腹：主にタテ位ハケメ。内面：左下がりのハケメ。内外面ともに口縁部ヨコナデ。
52	弥生土器	高杯	SK6	—	(14.0)	脚部上端付近で杯部との接合痕確認（分割成型）。外腹：脚部はタテ位ハケメ。底部の端面はヨコ位ハケメ。内面：時計回りのケズリ。
53	弥生土器	高杯	SK6	—	—	外腹：一次調整のタテ位ハケメの後にミガキが僅かに残存。それ以外は内外面ともに器壁が粗く調整不良。
54	弥生土器	甕	SK6	5.1	(16.4)	7.2 外腹：一次調整のタテ位ハケメの後にナデ。頂部は乱方向のケズリの後にナデ。内面：下半はナデ・オサエ。上半は反時計回りのケズリ。
55	弥生土器	長颈甕	SI4	14.6	4.3	24.5 器壁は全体的に厚く、脚部はやや張る。外腹：瓶部上半に一次調整のタテ位ハケメ残る。同時に下半から肩部付近にかけて左上がり（時計回り）のハケメ。頭部ぐるぐるに左上がりのピッヂの跡の新しい一次調整のタテ位。頭部・瓶部の一次調整を以て瓶部世界から開始することで、ぐるぐるな器壁となる。内面：脚部については瓶部不可。瓶部はナデが僅かに残存。約2cm幅の粘土帯の接合痕みえる。口縁部はわざかに外反させ、丁寧なヨコナデにより成形。それ以外ナデ・オサエ。
56	弥生土器	長颈甕	SI4	—	6.1	— 後にタテ位ハケメ。内面：幅約3～4cmの粘土帯の合巻みる。脚部半ばはヨコ位ハケメ。それ以外ナデ・オサエ。
57	弥生土器	広口甕	SI4	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不良。緩やかに曲げた口縁部端壁には板状工具による左上がりの剝突文。
58	弥生土器	甕	SI4	—	—	内外面ともに器壁が粗いが、外面上には僅かにタテ位ミガキが残存。
59	弥生土器	壺	SI4	—	3.8	外腹：ナデつけ。内面：クモノ巣状のハケメ。
60	弥生土器	甕	SI4	(14.6)	—	内外面ともに器壁が粗いが、外面上には僅かに右上がり平行タタキが残存。
61	弥生土器	甕	SI4	—	(5.4)	外腹：タテ位ハケメが僅かに残る。内面：主に左上がりのケズリ。
62	弥生土器	甕	SI4	—	3.6	底部やや上げ底状。外腹：平行タタキ。内面：主にタテ位ケズリの後に体部付近は底部を充填に伴う削たナデ・オサエ。
63	弥生土器	高杯	SI4	—	—	内外面ともに器壁が粗いが、外面上にはハケメが、内面にはケズリの後にミガキがごく僅かに残る。
64	弥生土器	高杯	SI4	—	11.2	科部底面は粘土塊残る。そらく対向方向の孔2個残存。外腹：瓶部下端付近では二次調整のタテ位ハケメが残る。それ以上タテ位のミガキ。内面：上半のしづり目を外腹調整に伴うオサエがナデにて切る。
65	弥生土器	高杯	SI4	—	—	やや膨らむほぼ円形の内腹。上部に科部内腹の複合痕跡僅かに残る。外腹：器壁が粗く調整不良。内面：粘土帯の接合痕みる。ヨコ位ケズリ（時計回り）の単位は不明。
66	弥生土器	高杯	SI4	—	—	対向する円孔4個。外腹：タテ位のハケメ。内面：断続的なヨコ位ハケメ。
67	弥生土器	高杯	SI4	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不良。
68	弥生土器	鉢	SI4	—	—	外腹：僅かにタテ位ハケメが残る。内面：粘土帯の接合痕を外腹調整に伴うナデ・オサエが切る。
69	弥生土器	器台	SI4	—	(23.5)	対角する長方形透かし孔4個。外腹：タテ位ミガキ。内面：粘土帯の接合痕を外腹調整伴うナデ・オサエが切る。
70	弥生土器	甕	SI5	—	(6.6)	内外面ともに器壁が粗く調整不良。
71	弥生土器	器台	SI5	—	—	外腹：金属製と思われる鋸刃的なハラ状工具による鋸齒文Rを施す。内面：ナデ。
72	古式土器	壺	SI6	—	3.0	内外面ともに器壁が粗く調整不良。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
2.5YB/1灰白色 2.5Y6/1黄灰色	軟質	径2.5mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含む。	25		
10YR6/3Cに似る黃褐色 7.5YR7/4Cに似る橙色	良好	径1.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	25		
7.5YR8/4淡黄褐色 2.5YB/1淡黄色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	26		
7.5YB/3浅黄褐色	軟質	径1mm以下の石英粒を多く、角閃石粒・赤褐色粒を少量含む。	26		
SYR褐色 7.5YR3淡黄褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	26		
10YR8/2灰白色	良好	径1mm以下の石英粒・赤褐色粒を多く含む。	26		
7.5YR5/3Cに似る褐色～10YR7/1灰白色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を多く含む。	26		
			26		
7.5YR7/4Cに似る橙色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	26		
			26		
10YR8/3淡黄褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	26		
10YR2/6灰黄褐色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	26		
10YR8/3浅黄色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	26		
10YR8/1灰白色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒を少量・径1mm大の角閃石粒をやや多く含む。	26		
SYR6/3に似る褐色 SYR6/2灰褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・赤褐色粒を多く、同大長石粒を少量含む。	26		
7.5YR7/4Cに似る橙色	良好	径2.0cm以下の長石粒・赤褐色を多く、同大石英粒をそれよりも少なく含む。	27		
7.5YR8/4淡黄褐色 7.5YR7/4Cに似る橙色	良好	径1mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	27		
10YR8/2灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27		
2.5YR/1灰白色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27		
10YR/1黒褐色 10YR5/4Cに似る黃褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒（両者が複合うものもあり）・角閃石粒を多く含む。	27		外来系（譲吸産？）
7.5YR6/6淡黄褐色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27		
7.5YR7/3Cに似る橙色 7.5YR5/1褐灰色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27		
7.5YR5/1褐灰色	良好	径3mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	27		
7.5YR6/4Cに似る褐色 2.5Y7/7灰黄色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒をやや多く含む。	27		
10YR8/3淡黄褐色 10YR8/2J灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27		外画面斑。
10YR8/3淡黄褐色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27		
7.5YR5/2灰褐色 7.5YR6/4Cに似る褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。角閃石粒を含む。	27		外画面斑。
2.5YR/3淡黄色	良好	径1mmの石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27		
SY7/1灰白色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	27		内面に粉粂痕。
2.5YR/3淡黄色	軟質	径1mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	27		
2.5Y7/1灰白色 2.5Y2/1黑色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を含む。	27		外面スス付着。
7.5YR7/4Cに似る褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27		外面に僅かに赤褐色残存か。
10YR5/1褐灰色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。赤褐色を含む。	27		

土器觀察表

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量			形態・技法の特徴
				口径	底径	器高	
73	弥生土器	甕	SP349	—	3.3	—	内外面ともに器壁が細いが、内面部底付近に粘土充填に伴う粗いオサエが僅かに残る。
74	弥生土器	広口壺	SP345	(13.6)	—	—	外腹：口縁部背面にへら状工具による左下がりの刺突文とその上に3個一対の円形浮文3列残存。頸部はタテ位ハケメ。内腹は器壁が粗く調整不明。
75	古式土師器	高杯	SP345	—	—	—	下端に受部との接合部。内外面：タテ位のミガキ。
76	古式土師器	高杯	SP345	—	—	—	外腹：器壁が粗く調整不明。内面：ナデ。
77	古式土師器	裝飾器台	SP345	(28.8)	—	—	外腹：口縁部背面に金属器と思われる鋭利なへら状工具による刺突文と腰手状の浮文。端面上端には半裁竹彫。受部外腹は同心円形の平行タタキとそれ切る粗いハケメ。内腹：受部外腹には半裁竹彫。口縁部正面に同様の刺突文。受部中央付近に貼付突痕。その外側に半裁竹彫。内腹に斜溝文。2次調査時は放状のミガキ。
78	弥生土器	鉢	SP468	(13.4)	—	—	外腹：獨脚部以下で幅約2.5cm単位のタテ位ミガキ。口縁部に接合痕。内面：口縁部は丁寧なヨコナデ。底部はやや粗いナデ・オサエ。
79	古式土師器	甕	SI6	—	—	—	外折した口縁部の内程は僅かに彫れる。外腹：肩部に細密な平行タタキ。内面：肩部ヨコ位カズリの間にヨコ位ハケメ。口縁部に僅かにヨコ位ハバメ残る。内外面ともに口縁部に丁寧なヨコナデ。
80	古式土師器	甕	SI7	—	—	—	外反する口縁部の暗部を上下に僅かに強張る。外腹：肩部にタテ位ハバメ。内面：器壁が粗く調整不明。
81	古式土師器	甕	SI7	—	—	—	口縁部は横縞に施み出し、端部に面を持つ。内外面ともに器壁が粗く調整不明。
82	古式土師器	甕	SI7	—	—	—	外腹：右上がりの平行タタキ。内面：粗いナデ・オサエ。
83	古式土師器	甕	SI7	—	(3.1)	—	外腹：右上がりの平行タタキ。底部南辺は粘土塊充填に伴うナデ・オサエ。
84	古式土師器	甕	SI7	—	(4.0)	—	外腹：右上がりのやや細かい平行タタキ。内面：クモノ/累状ハケメ。
85	古式土師器	有孔鉢	SI7	—	—	—	外腹：右上がりの平行タタキ。内面：蒸氣孔部分はノミ状工具により内側から穿孔。
86	古式土師器	鉢	SI7	—	—	—	底部付近で倒り曲げた口縁部は僅かに外反する。外腹：肩部は主にタテ位ハケメ。内面：主にヨコナデ。
87	古式土師器	鉢	SI7	—	—	—	内外面とともに外腹にタテ位ハケメが僅かに残る。
88	古式土師器	脚台	SI7	—	(5.3)	—	内外面ともに、脚台部分の接合に伴うナデ・オサエ。
89	古式土師器	鉢	SI7 SP473	13.8	—	—	外腹：器壁が粗く調整不明。内面：上半は主にタテ位ハケメ、底部付近はクモノノミ状ハケメ。
90	古式土師器	高杯	SP470	—	—	—	内外面ともにヨコ位のミガキが僅かに残る。
91	古式土師器	甕	SI7	—	—	—	外腹：口縁部右上がりの平行タタキによるタタキ出し。内面：主にヨコナデ。
92	古式土師器	甕	SI7	—	—	—	外腹：肩部板状工具によるヨコナデ、口縁部ヨコナデ。内面：肩部は器壁が粗く調整不明。
93	古式土師器	甕	SI7	—	(3.6)	—	外腹：脚部下半は右上がりの平行タタキ、底部付近オサエ。内面：クモノ/累状ハケメ。
94	古式土師器	壺	SI9	—	2.2	—	外腹：肩部は右上がり～ヨコ位の平行タタキ。内面：底部付近はナデ・オサエ。脚部は器壁が粗く調整不明。
95	古式土師器	複合口縁壺	SI9	(19.6)	—	31.0	底部は削除していないが丸底の可能性。外腹：口縁部はヨコナデ、底部は器壁が粗く調整不明。脚部はヨコ位の後にタテ位のハケメ。内面：脚部はナデ・オサエ。脚部は削りの痕跡が僅かに残る。
96	古式土師器	壺	SI9	—	—	—	底部丸底。底部付近からヨコ位の平行タタキ。内面：板状工具によるナデづけ。
97	弥生土器	高杯	SI9	—	—	—	外腹：タテ位のミガキ。内面：ヨコ位の削りの後にナデ・オサエ。
98	古式土師器	小型丸底壺	SI9	(9.9)	—	(14.2)	外腹：口縁部は一次調整の左上がりリハケメの後にタテ位の波線状ミガキ。底部は一次調整のタテ位～ヨコ位リハケメ。内面：口縁部はヨコ位ハケメの後にヨコ位ミガキ。底部付近は左上がりの波線状ミガキ。内面：口縁部はタテ位波線状ミガキ。肩部は外腹調整に伴うナデ・オサエ。肩部下半はヨコ位ハメ。
99	古式土師器	甕	SI9	(16.6)	—	—	口縁部は中程でわざに難れ外反する。外腹：口縁部は強いヨコナデ。肩部は一次調整の右上がりリハケメの後にヨコ位ハケメ。内面：口縁部はヨコ位ハケメの後に強いヨコナデ。脚部時回りヨコ位～右上がりヨコカズリ。
100	古式土師器	鉢	SI9	(39.6)	—	—	外腹：鉢部は左上がりのハケメの後に下半のみ同方向のミガキ。内面：鉢部上端はヨコ位ハケメが僅に残る、大半は左上がりのハケメ。口縁部は左上がりのハメ。
101	古式土師器	壺	SI10	—	—	—	底部粘土塊の接合痕観察可。外腹：脚部下半は板状工具によるナデづけ。底部はタタキ。内面：ナデ・オサエ。
102	古式土師器	鉢	SI10	(7.7)	(3.8)	7.2	外腹：脚部内程は板状工具によるナデづけ。口縁部はヨコナデ、蓋台部は接合に伴うナデ・オサエ。内面：粗いナデ・オサエ。
103	古式土師器	甕	SK62	—	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
104	古式土師器	甕	SK62	—	—	—	外腹：脚部は不定方向のナデ・オ縁部はヨコナデ。内面：ヨコ位ミガキ。
105	古式土師器	甕	SK431	14.5	—	—	口縁部の接合痕観察可。脚部最大径はやや上方に偏る。外腹：口縁部叩き出し、脚部は右上がりの粗い連続ラッタタキ。内面：口縁部は口縁部叩き出しに伴うナデ・オサエ。脚部は板状工具によるナデづけ。
106	古式土師器	甕	SK431	—	(3.6)	—	外腹：脚部右上がりの連続ラセントタキ。内面：板状工具によるナデづけ。
107	古式土師器	甕	SK431	—	—	—	内外面ともに器壁が細いが、脚部外面に平行タタキが、同部内面にケズリがわずかに残存。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
10YR6/3にぶい黄褐色 7.5YR8/6淡黄褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。		27	
10YR8/3淡黄褐色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む		27	
2.5YR3/1暗赤灰色 5YR4/1褐色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む角閃石粒を含む。		27	
7.5YR7/6褐色	軟質	径2mmの石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		27	
10YR8/3淡黄褐色 10YR7/4にぶい黄褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・雲母片・茶褐色粒を含む。比較的精良。		27	
10YR7/6弱黄褐色 10YR7/4にぶい黄褐色	良好	径2~3mmの大石英粒、径1mmの大石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		27	
7.5YR6/1褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		27	
10YR8/2灰白色	軟質	径0.5mm以下の赤褐色粒をやや多く含む。		28	
10YR8/2灰白色	不良	径2mmの大石英粒・長石粒を多く含む。		28	
2.5Y/2黒褐色	良好	径1mmの大石英粒・長石粒を多く含む。		28	
10YR5/1褐色	不良	径3mm以下の石英粒・長石粒・雲母片を多く含む。		28	
10YR7/3にぶい黄褐色 2.5YR6/4にぶい褐色	軟質	径3mm以下の石英粒・長石粒を含む。		28	
2.5Y/7灰黄色 2.5Y/7灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。		28	
10YR7/1にぶい黄褐色 10YR8/3淡黄褐色	良好	径1mmの大石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		28	
10YR8/4淡黄褐色 10YR7/3にぶい黄褐色	軟質	径3mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含む。		28	
10YR8/2灰白色	軟質	径1mmの大石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。		28	
2.5Y/6/4にぶい褐色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量化。		28	
10YR8/3淡黄褐色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量化。		28	
7.5YR8/4淡黄褐色 10YR8/2灰白色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・雲母片を含む。		28	
2.5Y/6/灰黄色	良好	径1mmの大石英粒、0.5mmの大長石粒をそれぞれ少量含む。		28	
2.5Y/7/3淡黄色 2.5Y/7/3淡黄色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色・黒褐色粒を少量含む。		28	
2.5YR4/1灰褐色 2.5YR7/4にぶい褐色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。		28	
10YR4/1にぶい黄褐色 2.5YR6/8淡黄褐色	良好	径2mmの大石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く含む。		28	
10YR7/2暗黄褐色 10YR7/3にぶい黄褐色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。		28	胸部上半にスス付着。
2.5Y/7/2灰黄色 2.5Y/7/6褐色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		28	
10YR7/3にぶい黄褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒、径2mm以下の雲母片・黒褐色粒を含む。		28	腹部に円孔1個。
10YR6/3にぶい黄褐色 10YR6/4にぶい黄褐色	甘	径2mm以下の石英粒・長石粒・褐色粒（チャートか？）を少量含むが比較的精良。		28	
10YR6/2灰黄色 2.5Y/7灰黄色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・灰色色を含むが精良。		28	
10YR6/1褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		28	外腹スス付着。
2.5Y/8/1灰白色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を少量含む。		28	
10YR4/灰褐色6/2 10YR7/3にぶい黄褐色7/3	軟質	径1mmの大石英粒・長石粒・赤褐色粒・雲母片・褐色粒を含む。		28	
10YR7/3にぶい黄褐色 5YR6/4にぶい褐色	甘	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。		28	
5Y/7/1灰白色 2.5Y/6/1黄褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。		28	
2.5Y/8/1灰白色 2.5Y/8/2灰白色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。		28	106と同一個体。
10YR7/1灰白色 10YR8/2灰白色	甘	105と同じ		28	105と同一個体。
2.5Y/4/1黄褐色 2.5Y/5/2暗灰黄色~2.5Y/7/2灰黄色	軟質	径2mmの大石英粒・長石粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。		28	

土器觀察表

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	法量			形態・技法の特徴
				口径	底径	器高	
108	古式土師器	甕	SK431	—	2.1	—	外腹：ナデ。内腹：ナデ・オサエ。
109	古式土師器	甕	SK431	—	1.6	—	底部小さく平底。外腹：ナデ。内腹：ナデ・オサエ。内腹は器壁が粗く調整不明。
110	古式土師器	鉢	SI11 (12.0)	4.0	6.2	—	口縁部の形成は相ひため變口縁状となり不整形な波状を呈する。外腹：上半は細いナデ、底部附近はオサエが施される。内腹：成形後に板状工具による不十分なナデづけ。
111	古式土師器	壺	SK110	—	5.7	—	外腹：タテ位ハケメ。内腹：クモノ葉状ハケメ。
112	古式土師器?	甕	SK110	—	—	—	口縁部は側面に上方に掘み出す。外腹：口縁端部下端に刻目。胴部上半は主にタテ位ハケメ。内腹：ナデ・オサエ。
113	古式土師器	甕	SK110	—	—	—	口縁端部は僅かに傾き、底部は上方に掘み出す。外腹：肩部は平行タタキ、口縁部はヨコナデ。内腹：肩部は外腹調整に伴うオサエ。
114	古式土師器	鉢	SK110 (11.1)	—	—	—	口縁部は丁寧なヨコカニによる調整を施されていないために不整形な波状を呈する。外腹：右上がりの平行タタキ。内腹：や左上がりのハケメ。
115	古式土師器	鉢	SI11	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明であるが、内腹に粘土帯の接合痕が見える。
116	古式土師器	甕	SI11 (11.1) (3.3)	11.6	—	—	成形や調整は全体的に荒い。外腹：ヨコ位へ上がりの平行タタキ。口縁部は叩き出し。内腹：下半部下へ上方に向、肩部附近は反時計回りの粗いケズリ。
117	古式土師器	甕	SI11	—	(3.8)	—	底部に粘土塊充填の痕跡觀察可。外腹：右上がりの平行タタキ。内腹：タテ位→ヨコ位のハケメ。
118	古式土師器	甕	SI11	—	4.8	—	底部に粘土円錐の痕跡觀察可。外腹：粗い平行タタキ。内腹：ナデ・オサエ。
119	古式土師器?	甕	SI11	—	—	—	比較的丁寧なつくり。外腹：比較的丁寧なタテ位のミガキ。内腹：外腹調整に伴うナデ・オサエ。
120	古式土師器	甕	SI12	—	—	—	口縁部はやきつて凹り唇。外腹：肩部はやや左上がりのハケメ、口縁部はヨコナデ。内腹：反時計回りのズレ。
121	古式土師器	高杯	SI12	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明。
122	古式土師器	小型丸底鉢	SI12 (21.7)	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明。
123	古式土師器	甕	SI13	—	(5.8)	—	底底。外腹：胴部はナデ、底部附近は不定方向のケズリの後にナデ。内腹：器壁は細いが肩部にけずりが僅かに残る。
124	古式土師器	鉢	SI13 (12.3)	—	—	—	外腹：右上がりのやや粗い平行タタキの後にナデ。内腹：ナデ・オサエ。
125	古式土師器	高杯	SI13 (21.2)	—	—	—	胴部の差違み痕跡觀察可。外腹ともに器壁が粗く調整不明。
126	古式土師器	高杯	SI13	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明。
127	古式土師器?	鉢	SI13	—	5.8	—	全体的に荒い作り。外腹：高台部貼り付けに伴うナデ・オサエ。内腹：クモノ葉状のハケメが僅かに見える。
128	古式土師器	甕	SK83	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明。
129	古式土師器	甕	SI13 馬背溝	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明。
130	古式土師器	甕	SPS38	—	—	—	小さな平底。外腹：器壁が粗く調整不明。内腹：ナデ・オサエ。
131	古式土師器	高杯	SK84	—	—	—	内外腹ともに器壁が粗く調整不明。
132	古式土師器	高杯	SK84	—	—	—	外腹：器壁が粗く調整不明。内腹：口縁部放射状のミガキが僅かに見える。
133	古式土師器	高杯	SI13	—	9.2	—	外腹：脚部ナデミガキ。受部は不規。内腹：脚部の側面にヨコ位ケズリ、他はナデ・オサエ。受部は不明。
134	古式土師器	甕	SI13	—	—	—	外腹：肩部にタテ位ハケメ。口縁部はヨコナデ。内腹：肩部は反時計回りのヨコ位ケズリ。
135	古式土師器	甕	SI13	—	4.4	—	内外腹：ナデ・オサエ。
136	古式土師器	甕	SI13	—	4.3	—	外腹：ナデ・オサエ。内腹は器壁が粗く調整不明。
137	古式土師器	高杯	SI13	—	—	—	内外腹：器壁が粗く調整不明。
138	古式土師器	広口壺	SI15 (17.8)	—	—	—	外腹：頭部に一次調整のタテ位ハケメの後にヨコ位の沈線状ミガキ。内腹：外腹調整に伴うナデ・オサエ。粘土帶の接着痕観察可。
139	古式土師器	無颈壺	SI15 (8.4)	—	—	—	外腹：ヨコ位ハケメがわずかに残るタテ位ハケメを切る。内腹：下半はタテ位ハケメ、上半はナデ・オサエ。
140	古式土師器	壺	SI15	—	—	—	外腹：タテ位ハケメ。内腹：クモノ葉状ハケメ。内腹：器壁は細いが僅かにケズリが残る。
141	古式土師器	甕	SI15 (17.0)	—	—	—	外腹：肩部ヨコナデ。口縁部は丁寧なヨコナデ。内腹：ナデ・オサエ。
142	古式土師器	甕	SI15 (15.0)	—	—	—	外腹：肩部ヨコナデ。内腹：口縁部は丁寧なヨコナデ。内腹：器壁が粗く調整不明。
143	古式土師器	甕	SI15 (15.0)	—	—	—	口縁部は一定程度で僅かに膨らむ。端部上方に掘み出し痕跡は僅かに面を持つ。外腹：口縁部はヨコナデ。胴部ヨコ位へ僅かに右上がりの細かなラセンタッカキ。内腹：胴部は反時計回りのケズリ。
144	古式土師器	甕	SI15	—	(4.0)	—	外腹：右上がりの平行タタキ。内腹は器壁が粗く調整不明。
145	古式土師器	甕	SI15	—	1.4	—	小さな平底。外腹：器壁が粗く調整不明。内腹：ナデ・オサエ。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
10YR7/2にぶい黄褐色	軟質	径 1mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	28		外間に黒斑。
10YR8/2灰白色～10YR2/1黒色					
10YR7/3にぶい黄褐色 2.5YR5.6明赤褐色	軟質	軽物粒をほとんど含まない。	28		
10YR6/2灰黃褐色	軟質	径 2mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR7/2にぶい黄褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を含む。	29		底部に黒斑痕。
2.5Y5/1灰赤色					
5Y2/1黒色, 5Y6/1灰色	良好	径 1mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く、同大黒褐色粒を少量含む。	29		
7.5YR6/4にぶい橙色	軟質	径 1mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く、同大黒褐色粒を少量含む。	29		
7.5YR5/4にぶい褐色					
7.5YR7/4にぶい橙色					
10YR8/4淡黄褐色	軟質	径 1.5mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	29		
2.5Y8/2灰白色～2.5Y7/1灰白色	軟質	径 3mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
2.5Y8/2灰白色					
10YR8/2灰白色 10YR8/2灰白色	甘	径 2mm 以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	29		
10YR8/3淡黄褐色 2.5Y7/6褐色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	29		
N3/暗褐色					
10YR4/2灰褐色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
2.5Y2/1黒色～2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1mm 以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	29		
10YR8/3淡黄褐色～10YR8/2灰白色					
5Y1/4褐色	良好	径 1mm 以下の石英粒・長石粒を多く含む。	29		
10YR2/7にぶい黄褐色					
10YR7/2にぶい黄褐色 10YR7/2にぶい黄褐色	良好	径 2mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
2.5Y8/2灰白色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 2mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含み細い。	29		
10YR5/1褐色					
10YR6/1褐色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	29		
10YR6/1褐色	甘	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・當母片を少量含む。	29		二次被熱の痕跡。
7.5YR4/6にぶい橙	良好	径 1mm 以下の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	29		
7.5YR6/7褐色					
7.5YR8/3淡黄褐色 5YR7/6褐色 7.5YR8/2灰白色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	29		外間に黒斑。 内間に數物圧痕。
2.5Y8/1灰白	甘	径 2mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
7.5YR8/3淡黄褐色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	29		
7.5YR6/6褐色	軟質	径 1mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR8/1灰白色 2.5YR5/6明赤褐色	軟質	径 1mm 大の石英粒・長石粒を含む。	29		外間にスス付着。
10YR8/4淡黄褐色 5YR6/6褐色	良好	径 4mm 以下の石英粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR6/3にぶい黄褐色 10YR7/3にぶい黄褐色	軟質	径 2mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
2.5Y8/1灰白色	甘	径 1mm 大の石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を少量含む。	29		脚部に対向位置に円孔三個。
10YR8/2灰白色	不良	径 1mm 以下の石英粒・長石粒・橙褐色粒を多く含む。	29		
10YR6/4にぶい黄褐色 10YR6/3にぶい黄褐色	甘	径 3mm 以下の石英粒・長石粒を多く含む。	29		
7.5YR3/7にぶい橙色	良好	径 1mm 大の石英粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR7/4にぶい黄褐色 7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	29		円孔二個。
7.5YR8/4淡黄褐色	軟質		29		1次調査のSH1。
5YR5/6明赤褐色～7.5YR5/2灰褐色	軟質		29		1次調査のSH1。 内間に漆付基。
10YR6/1褐色	軟質	径 2mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
7.5YR6/6淡黄褐色	やや軟		29		1次調査のSH1。
5Y7/1灰白色 2.5Y8/2灰白色	やや軟		29		1次調査のSH1。
10YR8/2灰白色	やや軟		29		1次調査のSH1。
10YR7/2にぶい黄褐色 10YR6/1灰黄褐色	軟質		29		1次調査のSH1。
10YR7/3にぶい黄褐色 7.5YR8/4淡黄褐色	やや軟		29		1次調査のSH1。

土器觀察表

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	法量		形態・技法の特徴
				口径	底径	
146	古式土師器	高杯	SI15	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
147	古式土師器	高杯	SI15	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
148	古式土師器	高杯	SI15	(10.5)	—	外腹：脚部タテ位ミガキ。内面：上方しづり痕、底部はナデ・オサエ。
149	古式土師器	高杯	SI15	(14.9)	—	内外面ともに丁寧なヨコナデ。
150	古式土師器	高杯	SI15 SP06	—	—	外腹：器壁が粗く調整不明。内面：ピッチの細いヨコ位ハケメ。
151	古式土師器	小型容器	SI15 SP06	(11.0)	—	外腹：器壁が粗く調整不明。内面：右上がりのハケメ。
152	古式土師器	甕	SI15 周壁溝	—	—	外腹：肩部タテ位ハケメ。口縁部ヨコナデ。内面：肩部内面は器壁が粗く調整不明。
153	古式土師器	甕	SI16 周壁溝	—	—	外腹：口縁部ヨコナデ。内面：肩部ケズリ。
154	古式土師器	甕	SI16	—	—	外腹：右上がりの平行タキ。内面：瓶状工具によるナデつけ。
155	古式土師器	長颈甕	SK7	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
156	古式土師器	甕	SK7	—	—	外腹：口縁部付近ヨコナデ。内面：肩部は瓶状工具によるタテ位ナデつけ。
157	古式土師器	甕	SK7	—	(3.6)	外腹：脚部下端はタテ位ハケメ。底部付近は成形に伴うオサエ。内面：ナデ・オサエ。
158	古式土師器	甕	SK7	—	3.3	外腹：脚部下端は瓶状工具によるタテ位ナデつけ。底部付近は成形に伴うオサエ。内面：ナデ・オサエ。
159	古式土師器	高杯	SK7	—	—	外腹：基本的にタテ位ミガキを施すが、秆部と脚部、脚部と瓶部界を意識しているように思われる。内面：脚部上部にはしづり痕、底部はヨコ位ハケメ。
160	古式土師器	甕	SK7	3.0	10.8	外腹：上部は成形に伴うナデ・オサエ。その他は器壁が粗く調整不明。内面：粗いナデ・オサエ。
161	古式土師器	広口甕	SK7	—	—	内外面ともに器壁が粗いが、外腹の頸部以下、内面の肩部にはハケメが僅かに残る。
162	古式土師器	甕	SK7	—	—	内外面ともに器壁が粗く調整不明であるが、口縁部外に接合痕が見える。
163	古式土師器	甕?	SK7	—	(5.2)	内外面ともに成形に伴うナデ・オサエ。
164	古式土師器	甕	SK7	—	—	外腹：肩部右上がりの平行タキ、口縁部はヨコナデ。内面：ナデ・オサエ。
165	古式土師器	甕	SK7	—	4.0	外腹：底部から右上がりの平行タキ。内面：底部付近は下→上方向のケズリ、それより上方は器壁が粗く調整不明。
166	古式土師器	高杯	SK7	—	—	外腹：ピッチの細いタテ位ミガキ。内面：しづり目。
167	古式土師器	高杯	SK7	—	—	外腹：ピッチの細いタテ位ミガキ。内面：しづり目。内面：上方はしづり目、下方はナデ・オサエ。
168	古式土師器	高杯	SK7	—	—	外腹：器壁が粗いが縫合にヨコ方向の縫合糸の縫跡。内面：ナデ・オサエ。
169	古式土師器	高杯	SK7	—	—	内外面ともに器壁が粗いが、口縁部背面に3箇所のヘラ括氈縫。
170	古式土師器	有孔鉢	SK7	—	3.5	外腹：左上がりの平行タキ。内面：ナデ・オサエ。
171	古式土師器	小型容器	SK7	—	—	外腹：タテ位ミガキ。内面：器壁が粗く調整不明。
172	古式土師器	甕	SK8	—	(2.2)	外腹：脚部下端はタテ位ハケメ。底部付近は成形に伴うオサエ。内面：ナデ・オサエ。内面：瓶状工具による左上がりのナデつけ。
173	古式土師器	甕	SK8	(16.2)	—	口縁部は直角的に鋭らしく内腹は端部は肥厚する。瓶部は最大径付近でぐるぐるに張りを見せる。外腹：肩部下端は平行タキ。中程で左上がりとなり、底部付近で右上がりとなる。内面：肩部は時計回りのスレーブ。底部付近は丁寧なヨコナデ。
174	古式土師器	甕	SK8	16.0	—	口縁部中央部でぐるぐるに鋭らしく内腹は端部は肥厚する。瓶部は最大径付近でぐるぐるに張りを見せる。外腹：肩部下端は平行タキ。中程で左上がりとなり、底部付近で右上がりとなる。内面：肩部は時計回りのスレーブ。底部付近は丁寧なヨコナデ。
175	古式土師器	甕	SK8	(18.4)	—	口縁部は中程でぐるぐるに鋭らしく内腹は端部は肥厚する。瓶部は最大径付近でぐるぐるに張りを見せる。外腹：肩部下端は平行タキ。中程で左上がりとなり、底部付近で右上がりとなる。内面：肩部は時計回りのスレーブ。底部付近は丁寧なヨコナデ。
176	古式土師器	甕	SK8	(15.4)	—	口縁部は中程でぐるぐるに鋭らしく内腹は端部は肥厚する。外腹：肩部右上がりにヨコ位の細密な平行タキの後の左上がり比較的緩急のタキ。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面：肩部は時計回りのスレーブ。底部付近は丁寧なヨコナデ。
177	古式土師器	甕	SK8	(15.2)	—	口縁部は中程でぐるぐるに鋭らしく内腹は端部は肥厚する。瓶部は最大径は上方に上がることで脚部側を呈する。外腹：肩部下端はタテ位ハケメ。上半は右上がりのタキが僅かに残る。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面：時計回りの左上がりのケズリ、口縁部界に僅かに段が残る。
178	古式土師器	甕	SK8	—	—	口縁部は中程でぐるぐるに鋭らしく内腹は端部は肥厚する。瓶部は最大径付近でぐるぐるに張りを見せる。外腹：肩部右上がりの細密な平行タキ。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面：肩部はケズリの後に外腹縫隙に伴うナデ・オサエ。
179	古式土師器	甕	SK8	—	—	口縁部は中程でぐるぐるに鋭らしく内腹は端部は肥厚する。瓶部は時計回りに伸びる。端部は上方に脱み出す。内外面ともに器壁が粗く調整不良。
180	古式土師器	高杯	SK8	—	14.1	脚部は中程で左右に伸び、底部は直角に広がる。外面：脚部状部はタテ位ミガキ。底部は左上がりの柱状部ハケメ。内面：柱状部はヨコ位ケズリ。底部上半は反時計回りヨコ位のピッチの細いハケメ。下半はヨコナデ。
181	古式土師器	高杯	SK8	—	—	脚部は中程で下方に僅かに広がる。外腹：タテ位のミガキ。もしくはヘラ状工具によるナデつけ。内面：ヨコナデ。
182	古式土師器	高杯	SK8	—	—	脚部は中程で下方に僅かに広がる。外腹：脚部はヨコ位の細密な平行タキ。内面：ヨコ位のヨコナデ。
183	古式土師器	甕	SD1	—	—	口縁部は中程で僅かに膨らむ。内面：瓶部は器壁が粗いがヨコ位ケズリが僅かに残る。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 番号	備考
5YR6/4にぶい橙色	やや硬		29		1次調査のSH1。
5YR6/6橙色	やや硬		29		1次調査のSH1。
5YR7/6橙色～10YR8/2灰白色	軟		29		1次調査のSH1。
7.5YR8/4浅黄橙色	やや軟		29		1次調査のSH1。
7.5YR8/3浅黄橙色～5YR7/6橙色	軟		29		1次調査のSH1。
7.5YR6/4にぶい橙色	軟		29		1次調査のSH1。
7.5YR7/2暗灰黑色	不良	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
10YR7/3にぶい黃褐色					
10YR5/1暗灰黑色	良好	径 0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		
10YR5/2暗黃褐色	良好	径 1 mmの大の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒を少量含む。	30		
2.5YR7/4浅赤褐色					
10YR7/1赤灰色～10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mmの大の石英粒・長石粒を含む。	30		
7.5YR8/6浅黄橙色					
10YR8/3浅黄橙色	良好	径 0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	30		
10YR8/3灰白色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	30		
2.5Y/7浅黄色					
2.5Y/7灰黄色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	30		
10YR7/2にぶい黄褐色	良好	径 1 mmの大の石英粒・長石粒を少量含む。	30		
10R2/1赤褐色					
10YR8/3浅黄褐色	軟質	径 1 mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30		脚部・塔部界のほぼ対向位置に円孔 4 個。
10YR8/2灰白色	甘	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	30		充形。
10YR8/2灰白色	甘	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30		
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30		
10YR8/2灰白色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30		
5YR7/6橙色～2.5Y8/3浅黄色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		
2.5Y8/3灰白色～5YR7/6橙色					
2.5Y7/1灰白色	軟質	径 1 mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	30		
10YR7/3にぶい黄褐色					
10R5/4にぶい赤褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30		円孔 1 個。
2.5YR5/4にぶい赤褐色					
10YR8/2灰白色	軟質	軸物粒はほとんど含まない。	30		三方に円孔。
10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を含む。	30		
10YR8/2灰白色	軟質	径 0.5mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を含む。	30		外系系（譲坡産）。
7.5YR2/3暗褐褐色					
2.5Y6/1灰黄色	良好	径 1 mmの大の石英粒・長石粒を多く含む。	30		底部中央に焼成前穿孔（外径1.0cm、内径0.4cm）
7.5YR8/3浅黄褐色	軟質	径 2 mm大長石粒を多く、径 0.5mm以下の石英・長石粒を含む。	30		
10YR6/1暗灰黑色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含むが比較的の良質。	30		
10YR8/2灰白色	軟質	径 0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色を多く含む。	30		庄内形。
2.5YB/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30		庄内形。
10YR8/3浅黄褐色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色を多く含む。	30		庄内形。
7.5YR8/1灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を少量、赤褐色粒をやや多く含む。	30		庄内形。
7.5YR8/3浅黄褐色～7.5YR8/1灰白色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30		庄内形。
10YR7/2にぶい黄褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30		庄内形。
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30		庄内形。
2.5Y7/2暗黄色	軟質	径 1 mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	30		庄内形。
10YR7/2にぶい黄褐色					
10YR8/3浅黄褐色	良好	径 0.5mm以下の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒を少量含む。	30		
10YR8/3浅黄褐色～10YR8/1灰白色	良好	径 0.5mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	30		
5YR7/6褐色	良好	径 0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		
2.5Y8/1灰白色～2.5Y6/1灰褐色	軟質	径 3 mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30		庄内形。
N7/灰					

土器觀察表

被載 番号	種別	器種	出土遺構	法量		形態・技法の特徴
				口径	底径	
184	古式土師器	壺	SD1	—	2.0	— 小平底。内外面ともに器壁が粗く調査不明。
185	古式土師器	壺	SD1	—	—	— 内外面ともに器壁が粗く調査不明。
186	古式土師器?	高杯	SD1	—	—	— 外面：タテ位ミガキが僅かに残る。内面：ナデ・オサエ。
187	古式土師器	壺	SD2 上層	(14.8)	—	— 外面：肩部上半は右上がりの平行タタキの後に部分的にタテ位なで消し、口縁部はヨコナデ。内面：肩部上半は板状工具によるナデつけ。底部は反時計回り左上がりのハケメの後に外面調整型で使うナデ・オサエ。
188	古式土師器	壺	SD2 上層	—	3.2	— 脊部：右上がりの平行タタキ。底部付近はオサエ。内面：板状工具によるナデつけの後に外面調整型で使うナデ・オサエ。
189	古式土師器	高杯	SD2 上層	(15.0)	—	— 外面：杯部は放射状のミガキ。口縁部はナデ・オサエ。底部はタテ位ミガキ。内面：杯部は放射状のミガキ。腰部はしぶり目。
190	古式土師器	高杯	SD2 上層	—	—	— 外面：器壁が粗いナデの跡跡が僅かに残る。内面：しぶり目。
191	古式土師器?	装飾器台	SD2 上層	—	(4.2)	— 外面：上下に拡張した口縁部上端に左下がりの刻目。端面に鋭利なへら状工具による削ぬ出し。内面：丁寧なヨコナデ。
192	弥生土器	広口壺	SD2 上層	—	—	— 口縁部は下方に弧状、接合面で倒壠。内外面ともに丁寧なヨコナデ。
193	弥生土器	壺	SD2 上層	(14.0)	—	— 外面：上下に描み出した口縁部端面に沈線2条。肩部上半は右上がりのハケメ。内面：肩部に外面調整型で使うナデ・オサエ。
194	弥生土器	高杯	SD2 上層	—	—	— 口縁部全体に内側に刷毛を持ち、上方に端面を持つ。外側：受部上半は丁寧なヨコナデ。下半は同心円状の新規的なミガキ。口縁部端面に擬似線3条。内面：受部下方は同心円状の新規的なミガキ。
195	弥生土器	長颈壺	SD2 中層	—	(3.4)	— 脊部は丸みを帯びる。肩部接合面で倒壠。器壁は厚い。外面：丁寧なヨコ位ミガキ。底部付近はオサエ。内面：丁寧な右上がりのハケメ。底部最大径付近は粘土帶の接合痕が残る。
196	弥生土器?	広口壺	SD2 中層	9.9	4.7	18.5 外面：肩部下半は主にタテ位の放射状工具によるナデつけ。底部最大径付近で後方に伴うナデ・オサエ。肩部上半斜面タタキや左上がりのハケメの組・ハケメ、口縁部は端部に上方に描み出し。丁寧なヨコナデ。内面：肩部下半は主にタテ位の放射状工具によるナデつけ。肩部最大径付近は反時計回りのヨコ位ハケメ。肩部上半は粘土帶の接合面が残す。
197	古式土師器	壺	SD2 中層	—	7.2	— 外面：肩部下半は一次調整のタテ位ハケメの後に同方向の粗いミガキ。底部付近はオサエ。内面：丁寧な上方向のケズリ。
198	古式土師器	壺	SD2 中層	—	5.1	— 外面：肩部下端板状工具によるタテ位ミガキ。底部付近は成形に伴うオサエ。内面：ナデ・オサエ。右上がりの平行タタキの間に、タテ位ミガキ。底部はオサエ。内面：方向のケズリ。
199	古式土師器	広口壺	SD2 中層	(16.0)	—	— 外面：肩部タテ位ハケメの後に同方向のミガキ。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面：肩部に粘土帶接合痕が見える。
200	古式土師器	広口壺	SD2 中層	13.8	—	— 外面：肩部上半・肩部は一次調整のタテ位ハケメの後に同方向の粗いミガキ。口縁部は主にヨコナデ。内面：肩部上半は主にタテ位ハケメ。肩部はヨコ位ハケメ。円周部は粘土帶の接合面を残す。
201	古式土師器	広口壺	SD2 中層	—	—	— 外面：一次調整の右上がり平行タタキの後に左上がりのハケメ。内面：肩部下半はヨコ位ハケメ。最大径付近は反時計回りヨコ位ケズリ。肩上部は下→上方向のケズリの後にヨコ位ハケメ。肩部はオサエ。
202	古式土師器	広口壺	SD2 中層	—	5.1	— 脊部最大径付近でやや振る。外見：肩部下半は右上がりのミガキ。最大径以上はタテ位ミガキ。底部付近はオサエ。内面：肩部最大径の接合痕以下は右上がりハケメ。同じくナデ・オサエ。
203	古式土師器	広口壺	SD2 中層	—	5.4	— 肩部は202に類似するが製作技法に差異が看取できる。外見：基本的に右上がりの平行タタキで肩部下半は内面調整型でオサエが持てる。内面：肩部最大径の接合痕以下は右上がりのハケメで肩部付近は反時計回りのケズリ。それ以上は左上がり斜位のハケメ。粘土帶の接合面を残す。
204	古式土師器	広口壺	SD2 中層	—	5.0	— 202・203と相似する形態で調査が最も丁寧。外見：タテ位・やや右上がりのミガキ。底部付近はオサエ。内面：左上がりのハケメ・板状工具によるナデつけ。
205	古式土師器	広口壺	SD2 中層	(23.9)	—	— 外面：(同)・円状下端板状工具による放射状状のハケメ。丁寧なヨコナデ。口縁部端面には擬似線3条。内面：丁寧なヨコナデ。
206	古式土師器	壺	SD2 中層	12.9	—	— 外見：やや低い右上がりの放射状タタキ。肩部下部は上→下方向の粗いハケメ。内面：主にタテ位のハケメ。粘土帶の接合痕を残す。口縁部は反時計回りヨコ位のハケメ。
207	古式土師器	壺	SD2 中層	(12.8)	—	— 外見：右上がりの平行タタキの後にタテ位の粗いハケメ。下半は原体を端面から離す連続して施す。内面：左上がりのケズリ。
208	古式土師器	壺	SD2 中層	(15.6)	—	— 外見：右上がりの平行タタキ。口縁部タタキ出し。口縁部に接合痕が見える。内面：左上がりのケズリ。
209	古式土師器	壺	SD2 中層	—	4.2	— 外見：右上がりの平行タタキ後にタテ位の粗いハケメ。内面：下→上方向のケズリ。
210	古式土師器	壺	SD2 中層	—	3.8	— 外見：右上がりの平行タタキ。上半は右上がりの粗いハケメ。内面：左上がりのハケメの後にタテ位の板状工具によるナデつけ。
211	古式土師器	壺	SD2 中層	—	(3.8)	— 外見：右上がりの平行タタキ。特に下半はタテ位のハケメが切る。内面：下→上方向のケズリ。上半はやや左上がりのケズリ。
212	古式土師器	壺	SD2 中層	(14.0)	4.0	20.2 外見：肩部は主に下→上方向のハケメ。口縁部は内面調整型で使うオサエ。内面：肩部下部は下→上方向のケズリ。上半は左上がりのケズリ。口縁部は左上がりのハケメの後にヨコナデ。
213	古式土師器	壺	SD2 中層	13.2	—	— 口縁部は下方に弧状、堆積物を持ち。外見：肩部はタテ位向のハケメ。その上端は口縁部のヨコナデに切れ込む。口縁部端面は擬似線3条。内面：肩部中程は下→上方向のケズリ。上半は左上がりの方向のケズリ。
214	古式土師器	壺	SD2 中層	—	— 外見：肩部は器壁の粗い根が右上がり平行タタキが僅かに残る。口縁部ヨコナデ。内面：粘土帶の接合痕が見える。	
215	古式土師器	壺	SD2 中層	—	3.4	— 外見：器壁が粗く調査不明。内面：下→上方向のケズリ。
216	古式土師器	壺	SD2 中層	—	5.8	— 内外面ともに不定方向のナデ・オサエ。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
2.5Y7/3浅黄色	軟質	径 3 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30		
2.5Y8/2灰白色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		在来系ではい可能性。
7.5Y5/4Cにぶい褐色	軟質	径 1 mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・角閃石粒を多く含む。	30		外來系、2 孔のうち 1 孔は未貫通。
10Y5/3Cにぶい黄褐色					
2.5Y7/3浅黄色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30		外面に黒斑。
2.5Y8/2灰白色～2.5Y6/2灰黄色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30		
10Y8/4浅黄褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	30		
10Y7/3Cにぶい黄褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	30		
2.5Y8/2灰白色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	30		
7.5Y7/2明褐色灰	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		
2.5Y8/2灰白色	軟質	径 3 mm 以下の石英粒・長石粒・棕褐色粒を含む。	31		
3.5Y8/2灰白色					
10Y5/3Cにぶい黄褐色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	31		外來系（河内産）。
7.5Y5/4Cにぶい褐色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・角閃石粒をやや多く含むが、比較的精良。	31		外來系（讃岐産）。
10Y9/4Cにぶい黄褐色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	31		外來系（讃岐産）。
10Y8/3浅黄褐色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	31		
2.5Y9/3浅黄褐色					
2.5Y6/1黄灰色	良好	径 3 mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	31		
10Y9/1灰白色					
10Y8/2灰白色	軟質	径 3 mm 以下の石英粒・長石粒を多く含む。	31		
10Y5/1灰黑色	良好	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	31		
7.5Y6/4Cにぶい褐色～10Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm 以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含むが比較的精良。	31		
10Y8/3浅黄褐色					
10Y9/4/1褐色灰	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒を含む。	31		
2.5Y7/2灰黄色					
2.5Y7/6褐色～10Y8/1褐色	良好	径 1 mm 以下の石英粒・長石粒を含む。	31		
10Y8/2灰白色～10Y6/2灰黄褐色					
2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を多く、同大黒褐色粒を少量含む。	31		
2.5Y8/1灰白色					
10Y8/4浅黄褐色～10Y8/1褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	31		
2.5Y7/1灰黄色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒を、径 1 mm 以下の赤褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	31		
10Y8/3浅黄褐色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含み、やや粗い。	31		外來系（讃岐）
2.5Y8/6褐色～SYR7/6褐色					
10Y8/6褐色	甘	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒を含む。	31		
10Y8/2灰白色					
10Y7/2Cにぶい黄褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	31		
2.5Y7/1灰白色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	31		
10Y7/2Cにぶい黄褐色	軟質	径 3 mm 以下の石英粒・長石粒・褐色粒（チャート？）・黒褐色粒を含む。	31		
7.5Y8/8/1灰白色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・褐色粒（チャート？）・黒褐色粒を含む。	32		
2.5Y8/8褐色					
2.5Y8/1灰白色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を含む。	32		
10Y8/3浅黄褐色					
2.5Y7/1黑色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒を多く含む。	32		外側に黒斑。
10Y7/2Cにぶい黄褐色	軟質	径 2 mm 以下の長石粒・角閃石粒を多く含む。	32		
10Y8/4浅黄褐色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	32		
SYR6/4Cにぶい褐色	軟質	径 3 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	32		
2.5Y6/6褐色					
7.5Y4/1灰黑色	軟質	径 3 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	32		外側に黒斑。
2.5Y5/6褐色					
7.5Y5/3Cにぶい褐色	軟質	径 1 mm 以下の長石粒・角閃石粒を多く含む。	32		外來系（讃岐）
10Y4/3Cにぶい黄褐色	軟質	径 1 mm 以下の長石粒・角閃石粒を多く含む。	32		外來系（讃岐）

土器觀察表

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	法量			形態・特徴
				口径	底径	器高	
217	古式土師器	甕	SD2 中層	13.5	4.9	25.2	外観：胸部の一次調整は基本的に下→上方向のハケメで、一度器壁を平滑にした後に底部付近から脚部最大径付近まで再度施し、その後に脚部下半のみタテ位の密なミガキ。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面：脚部最大径以下は下→上方向のケズリ、それ以上は外面調整に伴う密なオサエ。
218	古式土師器	甕	SD2 中層	(14.0)	—	—	器形・調整等は217・218に近い。
219	古式土師器	甕	SD2 中層	—	5.2	—	器形・調整等の殆どは217・218に近いが、脚部外側のミガキの範囲が前2者よりもやや低い範囲にとまる。
220	古式土師器	甕	SD2 中層	(14.0)	—	—	器形・調整等は217~219に近い。
221	古式土師器	甕	SD2 中層	—	5.0	—	器形・調整等の殆どは217~220に近いが、外面のミガキが強かれていない。
222	弥生土器	高杯	SD2 中層	(25.6)	—	—	外観：受部は放射状のハケメの後に下方向のミガキが僅かに残る。口縁部・受部界にヘラ挫沈線1条、口縁部ヨコナデ。内面：脚部は放射状のハケメ。
223	弥生土器	高杯	SD2 中層	(27.4)	—	—	外表面とともに器壁に粗いが、両者にミガキが僅かに残る。
224	弥生土器	高杯	SD2 中層	—	—	—	外観：受部は放射状のハケメ。口縁部・受部界にヘラ挫沈線1条、口縁部ヨコナデ。内面：受部は放射状のミガキ。
225	弥生土器	高杯	SD2 中層	—	—	—	受部へ口縁部はミガキ、口縁部端部はヨコナデ。
226	弥生土器	高杯	SD2 中層	17.4 (18.0)	12.5	—	脚部は左上がりのハケメの後にタテ位ミガキ。裾部は放射状のハケメ、秆部は下部分が放射状のミガキ、上半はナデ・オサエ。脚部はしづり目、時計回りのヨコ位ケズリ、裾部は同じ円状のハケメ。
227	古式土師器	高杯	SD2 中層	—	(16.6)	—	脚部は左上がりのミガキ。内面：脚部はタテ位ミガキ。脚部は右上がりハケメの後に放射状のミガキ。受部は放射状のミガキ。内面：脚部はしづり目、脚部はヨコ位ハケメ、受部は放射状のミガキ。
228	古式土師器	高杯	SD2 中層	—	(13.7)	—	脚部上半は中央。外観：脚部はタテ位ミガキ。裾部上半は放射状のミガキ。同端部はヨコナデ。内面：脚部はしづり目、同端部はヨコナデ、軒部はミガキ。
229	古式土師器	高杯	SD2 中層	—	—	—	脚部頂部及びその脚綫には脚部を接合した痕跡なし。外観：脚部主にタテ位ハケメ。内面：脚部上はしづり目、そのままヨコ位ミガキ。裾部はヨコ位ハケメ。
230	古式土師器	高杯	SD2 中層	—	—	—	脚部は中空。外観：脚部柱はタテ位ミガキ。秆部と裾部は器壁が粗く調節不明。内面：脚部はしづり目、ケズリの後にナデ、粘土接合痕残る。秆部は不規、裾部はヨコ位ハケメが僅かに見える。
231	古式土師器	高杯	SD2 中層	—	—	—	脚部は中空。外観：脚部はタテ位ミガキ。内面：脚部はしづり目、ヨコ位ケズリの後にナデ、秆部はミガキ。
232	古式土師器	鉢	SD2 中層	11.1	3.2	6.7	外観：下部は左上がり、上部はヨコ位の平行タキ。底部付近はナデ・オサエ。内面：底部付近はナデ・オサエ、中程部ナデ、口縁部付近は左上がりハケメの後にヨコナデ。
233	古式土師器	鉢	SD2 中層	8.0	2.4	8.7	外観：脚部は主にヨコ位ハケメ。口縁部ヨコナデ・オサエ。内面：脚部下半はナデ・オサエ。それ以上は板状工具によるヨコ位のナデづけ、口縁部の接合痕が見える。
234	古式土師器	脚台	SD2 中層	—	9.2	—	外観：脚部は右上がりの平行タキ。脚部は接合に伴ナデ・オサエ。内面：脚部は主に左上がりヨコ位ハケメ。脚部は板状工具によるヨコ位のナデづけ。
235	古式土師器?	把手付鉢	SD2 中層	13.7	3.5	10.1	外観：胸部は左上がりのミガキ。口縁部下には沈線3条。把手の接合痕残る。内面：脚部は横樋間にミガキが残る。口縁部はナデで、脚部は微弱に伴ナデ・オサエ。
236	古式土師器	装飾器台	SD2 中層	—	—	—	口縁部に上に低張した粘土接合痕が僅かに見える。外観：受部主に放射状のハケメ。口縁部端面に二形状工具による断面文。内面：口縁部端面に小さい半裁竹穿文2列。
237	古式土師器?	鉢	SD2 中層	(14.1)	—	—	外観：脚部は器壁が粗く調節不良。口縁部はヨコナデ。内面：脚部は板状工具による左上がりのナデづけ。
238	古式土師器	鉢	SD2 中層	(22.4)	4.4	16.8	外観：胸部は透底部付近にやや左上がりの平行タキが僅かに残る。右上がりハケメの後に左上がりのナデ・ナデ・ハケメ。口縁部はヨコナデ・オサエ。内面：底部付近はナデ・オサエ。それ以上は左上がりヨコ位ハケメ、同方向の工具の当たりが見える。
239	弥生土器?	器台	SD2 中層	—	—	—	外観：胸部は右上がりのミガキ。口縁部上には沈線3条。把手の接合痕残る。内面：脚部は横樋間にミガキが残る。口縁部はナデで、脚部は微弱に伴ナデ・オサエ。
240	古式土師器?	手筋形土器	SD2 中層	—	3.5	17.5	外観：胸部下半は主にタテ位のミガキ。接合部はヘラ挫沈線により接合痕を消す。内面：脚部は下→上方向のケズリを残す。
241	石器	砥石	SD2 中層	—	—	—	長辺7.1cm～、短辺6.6cm～、厚さ3.4cm～、重さ1788g。全面研削。僅かに基面が残る。
242	弥生土器	広口壺	SD2 下層	—	—	—	外観：口縁部端面に左下がりの刻目、そのうえに3個一対の円内浮文2組。内面：口縁部には2条の貼付突起。
243	弥生土器	高杯	SD2 下層	—	—	—	外表面ともに器壁が粗く調節不明であるが、三角形透かし孔は未貫通。
244	弥生土器	広口壺	SD2 下層	—	—	—	外観：脚部は1次調節のタテ位ミガキの後に新面三角形の貼付突起3条。内面：口縁部内面に貼付突起1条、脚部上半はヨコナデ。下半はヨコ位ミガキ。
245	弥生土器	高杯	SD2 下層	—	—	—	外観：秆部は短いヨコ位のミガキ。脚部上端に円孔1個未貫通。内面：脚部はヨコ位ミガキ。
246	弥生土器	脚台	SD2 下層	—	—	—	外表面ともに器壁が粗く調節不明。脚部に丸孔3個残存。
247	石器	敲石	SD2 下層	—	—	—	長さ9.1cm、幅8.2cm、厚さ5.1cm、重さ640.1g。側面に敲打痕が見れる。
248	弥生土器	長颈壺	SD2 下層	11.6	—	—	外観：口縁部ヨコナデ。脚部はタテ位ミガキ。脚部下端以下に一次調節のハケメが残る。肩部は粗い左上がりヨコ位。内面：脚部上半はヨコ位ミガキ。下半は左上がりのハケメ。肩部は接合に伴ナデ・オサエ。

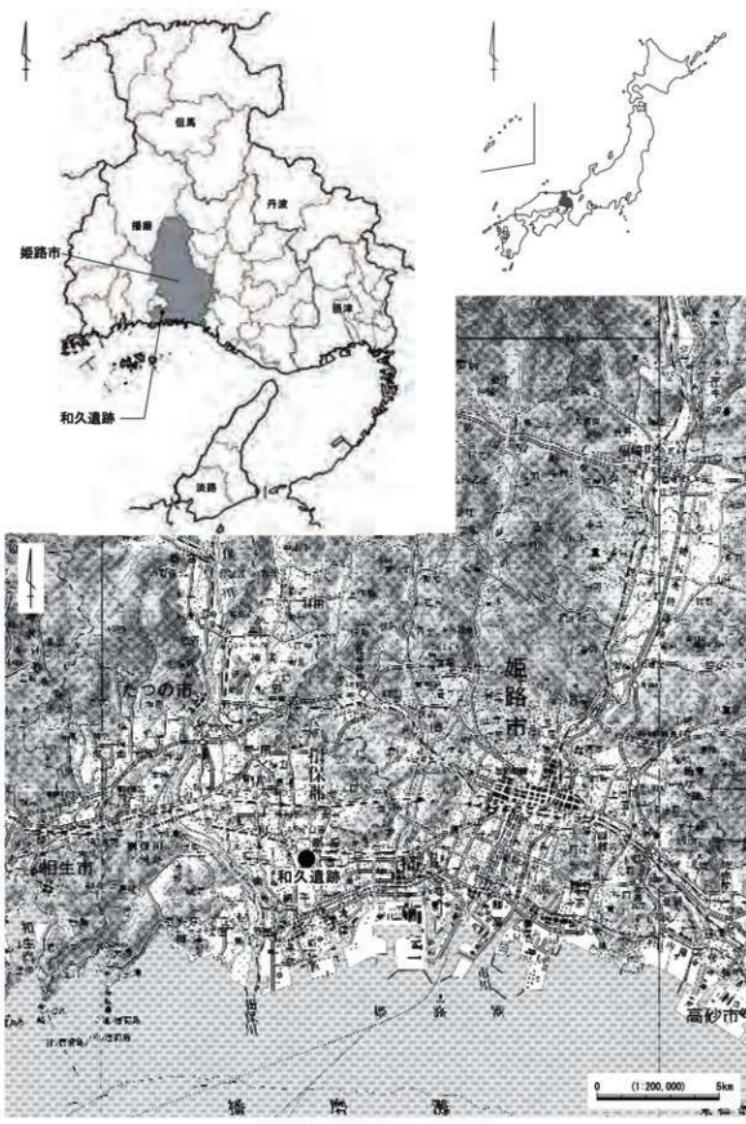
色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
10YR6/4にぶい黄褐色	軟質	径1mm以下の長石粒・角閃石粒を少量、同大赤褐色粒を極僅かに含む。	32		外来系(譲岐産)
5YR5/3にぶい赤褐色	良好	径1mmの大の石英粒・長石粒・角閃石粒を多く含む。	32		外来系(譲岐産)
7.5Y5/4にぶい褐色	軟質	径1mmの大の石英粒・長石粒・角閃石を多く、雲母片・赤褐色粒を少量含む。	32		外来系(譲岐産)
7.5Y6/4にぶい褐色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	32		外来系(譲岐産)
2.5Y7/1灰白色～2.5Y7/1黄灰色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	32		外来系(譲岐産)
10YR4/1褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	32		
2.5Y8/1灰白色～2.5Y7/1灰白色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を少量含む。	32		
7.5YR8/4赤褐色	良好	径2mmの大の石英粒・長石粒を多く、径5mmの大の赤褐色粒を稀に含む。	32		
7.5YR7/4にぶい褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	32		
5YR6/6褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	32		
10YR8/2灰白色	軟質	径1mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	32		
7.5YR8/4淡黄褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	32		
10YR7/2にぶい黄褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	32		裾部の対向位置に円孔4個。
2.5Y8/2灰白色	良好	径1mmの大の石英粒・長石粒を含む。	32		
2.5Y8/2灰白色	軟質	径1mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	32		
10YR7/2にぶい黄褐色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		高杯の未成品が別西槽の可能性もあり。対向位置に円孔4個。
10YR7/3にぶい黄褐色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		
5YR7/6褐色～5YR8/4淡褐色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		おそらく対向位置に円孔2個。
7.5YR7/6褐色～7.5YR7/3にぶい褐色	軟質	径2mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		おそらく対向位置に円孔2個。
10YR7/1褐色	軟質	径2mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		
10YR7/2にぶい黄褐色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含むが比較的精良。	33		内面に黒斑。
2.5Y8/2灰白色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含むがやや少く含む。	33		
2.5Y8/2淡黄色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・褐色粒(チャートか?)を多く含む。	33		外面に赤色顔料残る。
10R6/6赤褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	33		
10R6/4にぶい赤褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く含む。	33		
5YR8/4淡褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	33		
5YR7/6褐色	良好	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	33		
10YR8/2灰白色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒をやや多く含む。	33		
10YR5/4にぶい黄褐色	軟質	径4mmの大の石英粒・長石粒を少量、径1mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	33		
10YR7/3にぶい黄褐色	良好	径1mmの大の石英粒・長石粒を多く含む。	33		
10YR8/3淡黄褐色	軟質	径2mmの大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	33		おそらく対向位置に長方形透かし孔2個。
2.5Y8/3淡黄色	軟質	径1mmの大の石英粒・長石粒・褐色色粒を含む。	33		
10YR8/2灰白色～NA/灰色	良好	径1mmの大の石英粒・長石粒・褐色色粒を含む。	33		完形。
10YR8/1灰白色	良好	径1mmの大の石英粒・長石粒を多く含む。	33		
—	—	—	33		
10YR3/2黒褐色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	34		
10YR1/1/1黑色	軟質	—	34		
5YR6/6褐色	軟質	径2mmの大の石英粒・長石粒・褐色色粒を多く含む。	34		
5YR7/4にぶい褐色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・褐色色粒を含む。	34		
2.5Y7/2灰黄色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	34		
2.5Y8/3淡黄色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く含む。	34		
7.5YR5/3にぶい褐色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	34		
10RS4/赤褐色	良好	径1mmの大の石英粒・長石粒を多く含む。	34		
10RS4/赤褐色	良好	—	34		
2.5Y7/2灰黄色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒、径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	34		
2.5Y8/2灰白色	軟質	—	34		

土器觀察表

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量		形態・技法の特徴
				口径	底径	
249	弥生土器	長甕壺	SD2 下層	—	2.3	—
						外側：腹部は一次調整の左上がり平行タキの後にタテ位のハケメ。内面：腹部下半は下→上方のケズリ、中程はやや右上がりのケズリ、それ以上は外側調整に伴うナデ・オサエ、上半には粘土帯の接合面を残す。
250	弥生土器	広口壺	SD2 下層	—	—	—
						外側：口縁部瑞圖面にヘラ彫沈線2条の上に竹管文4個。内面：ナデ。
251	弥生土器	高杯	SD2 下層	(27.9)	—	—
						内外面ともに器壁が粗く調整不明。
252	弥生土器	鉢	SD2 下層	(27.6)	5.0	11.1
						外側：口縁部は成形時のナデ・オサエの後にヨコ位ミガキ、鉢部は頸部下のヨコ位ミガキを鉢部のタテ位ミガキが切る。
253	弥生土器	鉢	SD2 下層	(26.6)	—	—
						外側：鉢底にタテ位ミガキが僅かに残る。内面：鉢部下半はタテ位ミガキ、上半のヨコ位ミガキがそれを切る。
254	古式土師器	広口壺	SD2 下層	(13.0)	—	—
						外側：頭部は以下の大字位ハケメを口縁部のヨコナデが切る。内面：腹部は粘土帯の接合面が見える。口縁部はヨコ位ハケメをヨコナデが切る。
255	古式土師器	広口壺	SD2 下層	(12.4)	—	—
						外側：腹部は頭部界隈→やや右下方のハケメ、頭部は頸部下半は→上方向のハケメ、口縁部ヨコヨコ。内面：腹部は板状工具によるタテ位ナデつけ、粘土帯の接合面を残す。頭部ヨコナデ。
256	古式土師器	広口壺	SD2 下層	—	4.5	—
						外側：一次調整の左上がり平行タキをタテ位ミガキが切る。内面：主に右上がりのハケメ。
257	古式土師器	広口壺	SD2 下層	—	3.8	—
						外側：腹部下半はタテ位ミガキ、上半は器壁が粗く調整不明。内面：ナデ・オサエ。
258	古式土師器?	台付無縁壺	SD2 下層	7.1	—	—
						外側：頭部最大幅に接合面が見える。腹部全周タテ位ミガキ、口縁部ヨコナデ。内面：腹部下半は主に左上がりリケメ、上半はナデ・オサエ。
259	古式土師器	壺	SD2 下層	(15.6)	—	—
						外側：頭部は右上がりの平行タキの後にタテ位ハケメ、同方向の板状工具によるナデつけ、口縁部ヨコナデ・オサエ、接合面を残す。内面：腹部下半は左上がりのハケメ、上半はヨコ位ハケメ。外側面部にナデつけ・オサエ。
260	弥生土器?	壺	SD2 下層	(11.6)	(2.7)	—
						外側：右上がり平行タキの後に左上がりのハケメ、口縁部ヨコナデ。内面：腹部下半下→上方向のケズリ、同じ半は左上がりのケズリ。
261	古式土師器	壺	SD2 下層	13.5	—	—
						外側：頭部は右上がりの平行タキ。口縁部タキ出し、口縁部ヨコナデ・オサエ、接合痕を残す。内面：腹部は板状工具によるナデつけ、口縁部はヨコナデの後にヨコナデ・オサエ。
262	古式土師器	壺	SD2 下層	—	—	—
						口縁部は受光部に立上がる。外側：腹部は粗く調整不明。内面：腹部は板状工具によるナデつけ、口縁部ヨコナデ。
263	古式土師器	壺	SD2 下層	—	3.6	—
						外側：タテ位ハケメ。内面：底部付近は下→上方向のケズリ、腹部下半以上は左上がりケズリ。
264	古式土師器	高杯	SD2 下層	—	—	—
						脚部は中空。外側：脚部はタテ位ミガキ、杯部は放射状のミガキ。内面：脚部は上半しぶり目、瓶部はハケメ。
265	古式土師器	高杯	SD2 下層	—	—	—
						脚部は中空。外側：脚部は一次調整の左上がりのハケメの後にタテ位ミガキ。内面：脚部は時計回りのヨコ位ナデつけ、瓶部はそのケズリを左上がりのハケメが切る。
266	古式土師器	高杯	SD2 下層	—	—	—
						脚部は中空。外側：タテ位のミガキの後にヘラ彫沈線3条。内面：時計回りのヨコ位ケズリ。
267	古式土師器	高杯	SD2 下層	—	13.7	—
						脚部は中空。外側：脚部はタテ位のミガキ。瓶部端にヘラ彫沈線1条。内面：上半はしぶり目、瓶部はヨコ位ハケメ。瓶部ヨコナデ。
268	古式土師器	有孔鉢	SD2 下層	(15.9)	3.6	(12.0)
						外側：瓶部は右上がりの平行タキ。口縁部はヨコナデ。内面：左上がりのケズリ。
269	古式土師器	直口壺	SD4	(15.6)	—	—
						外側：脚部は左上がりのハケメ、口縁部はヨコナデ。内面：脚部は時計回りのヨコ位ケズリ、口縁部はヨコナデ。
270	古式土師器	縦合口縁壺	SD4	—	—	—
						内外面ともに器壁が粗く調整不明。
271	古式土師器	壺	SD4	—	—	—
						内外面ともに器壁が粗く調整不明。
272	古式土師器	壺	SD4	—	—	—
						内外面ともにヨコナデ。
273	古式土師器	壺	SD4	—	—	丸底。外側：右上がりの平行タキ。内面：器壁が粗く調整不明。
274	古式土師器	壺	SD4	—	—	外側：頸部ヨコナデ、口縁部端面は10条一単位の縞ヨコ線文。内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ。
275	古式土師器	高杯	SD4	—	—	脚部は中空。外側：タテ位のミガキが僅かに残る。内面：器壁が粗く調整不良。
276	古式土師器	高杯	SD4	—	—	脚部は中空。外側：外側はタテ位ミガキ。内面：ヨコ位の削りが僅かに残る。
277	古式土師器	小型器台	SD4	—	—	外側：受部はヨコ位のミガキでミガキが僅かに残る。他は器壁が粗く調整不良。内面：受部はナデ・オサエ、脚部はハケメの痕跡が僅かに残る。
278	古式土師器	小丸底鉢	SD4	(8.8)	—	5.9
						丸底。外側：オサエ、胎土の乾燥が進行してから成形したためにタテ位のひび割れが見える。内面：底部行はナデ・オサエ。脚部は板状工具によるナデつけ。
279	古式土師器	鉢	SD4	—	—	—
						内外面ともにナデ・オサエ。
280	古式土師器	壺	SP100	(13.8)	3.2	(23.0)
						外側：右上がりの平行タキ。特に下半はタテ位のハケメが切る。内面：下→上方向のケズリ、上半はやや右上がりのケズリ。後円部タキ出し。内面：脚部は主にタテ位ハケメ、口縁部はヨコナデ。
281	古式土師器	壺	SP102	(12.6)	—	—
						外側：脚部はヨコ位の平行タキ。口縁部はヨコナデ・オサエ。内面：脚部は時計回りのヨコ位ケズリ。口縁部はヨコナデ。
282	土師器	皿	SP131	8.6	5.9	1.5
						内外面回転ナデ・底部回転糸切り。
283	瓦質土器	楕	SD6	(14.1)	(5.0)	4.6

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
10YR5/2灰黃褐色 2.5YR8/2灰白色～6/3淡黃色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く、径 4 mm 大の石英粒・長石粒を稀に含む。	34		
10YR4/6褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母片を含む。	34		外来系（河内産）
2.5YR7/1灰白色～7.5YR7/4にぶい褐色 7.5YR17/1黒色～7.5YR7/3にぶい褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	34		
10YR8/1灰白色 10YR7/2にぶい黃褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	34		内面底面に網状。
10YR8/3淡黃褐色 7.5YR8/3淡黃褐色	軟質	径 0.5mm 石英粒・長石粒を少量含む。	34		
7.5YR8/1暗褐色 5YR8/4淡褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を多く含む。	34		
10YR8/1灰白色～10YR7/1灰白色 2.5YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	34		
10YR4/2灰黃褐色 2.5YR8/2灰白色～2.5YR8/1暗褐色	軟質	径 3 mm 大の石英粒・長石粒を多く含む。	34		外面に黒斑。
7.5YR8/1灰白色 7.5YR7/3にぶい褐色～7.5YR4/1褐色	甘	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・茶褐色粒（チャートか？）を多く含む。	34		
10YR8/2灰白色 10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・雲母片？を含む。	34		
5YR7/4にぶい褐色 5YR7/6褐色	軟質	径 3 mm 大の石英粒・長石粒・茶褐色粒・茶褐色粒（チャートか？）を含む。	34		外面スス、内面コゲ。
10YR6/1褐色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	34		
10YR8/2灰白色	軟質	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含むが、やや粗い。	34		外表面スス、内面コゲ。
7.5YR8/3淡黃褐色 2.5YR8/2灰白色	良好	径 0.5mm 以下の長石粒を少量含む。	34		外来系（近江系か？）
10YR7/1灰白色	良好	径 2 mm 以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	34		外表面（横崎産）
7.5YR8/6淡黃色 7.5YR8/4淡黃色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・灰色粒（結晶片岩か？）を含む。	35		
10YR8/2灰白色 10YR7/2にぶい褐色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・雲母片を含むが比較的精良。	35		対向位置に円孔 4 個。
10YR8/4にぶい黃褐色 10YR5/3にぶい黃褐色	軟質	径 1 mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黑褐色粒を多く含む。	35		
7.5YR8/6淡黃褐色	良好	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を少量含む。	35		対向位置に円孔 4 個。
7.5YR8/2灰白色 10YR8/1灰白色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・褐色色・灰色粒・径 5 mm 大の長石粒を稀に含む。	35		底部に焼成前穿孔。
10YR8/3淡黃褐色 10YR8/1灰白色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35		
10YR8/3淡黃褐色 2.5YR7/1灰白色 N/6灰白色 7.5YR7/4にぶい褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を多く含む。	35		
7.5YR8/3淡黃褐色 7.5YR8/2灰白色 7.5YR8/6淡黃褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	35		
2.5YR7/2灰黄色 5YR5/6明赤褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒を多く含む。	35		在地産か不明。
2.5YR7/3浅黄色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・两者のみ含む・角閃石を少量含む。	35		外表面（吉備産）
10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	35		
5YR7/3にぶい褐色 2.5YR7/6褐色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35		おそらく対向位置に円孔 2 個。
7.5YR8/3淡黃褐色 10YR8/2灰白色～7.5YR8/3淡黃褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・径 1 mm 大の赤褐色粒をやや多く含む。	35		
10YR8/2灰白色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	35		
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm 以下の石英粒・長石粒・径 5 mm 以下の赤褐色粒をやや多く含む。	35		
	軟質	径 1 mm 大の赤褐色粒を・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35		図上復元。
10YR8/2灰白色 2.5YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35		
10YR8/2灰白色～10YR6/1褐色 5YR7/4にぶい褐色～5YR7/1明褐色	軟質	径 0.5mm 以下の石英粒・長石粒をやや多く・雲母片？を少量含む。	35		
7.5YR8/1灰白色～7.5YR6/1灰白色 N/7灰白色～7.5YR6/1灰白色	軟質		35		

図　版



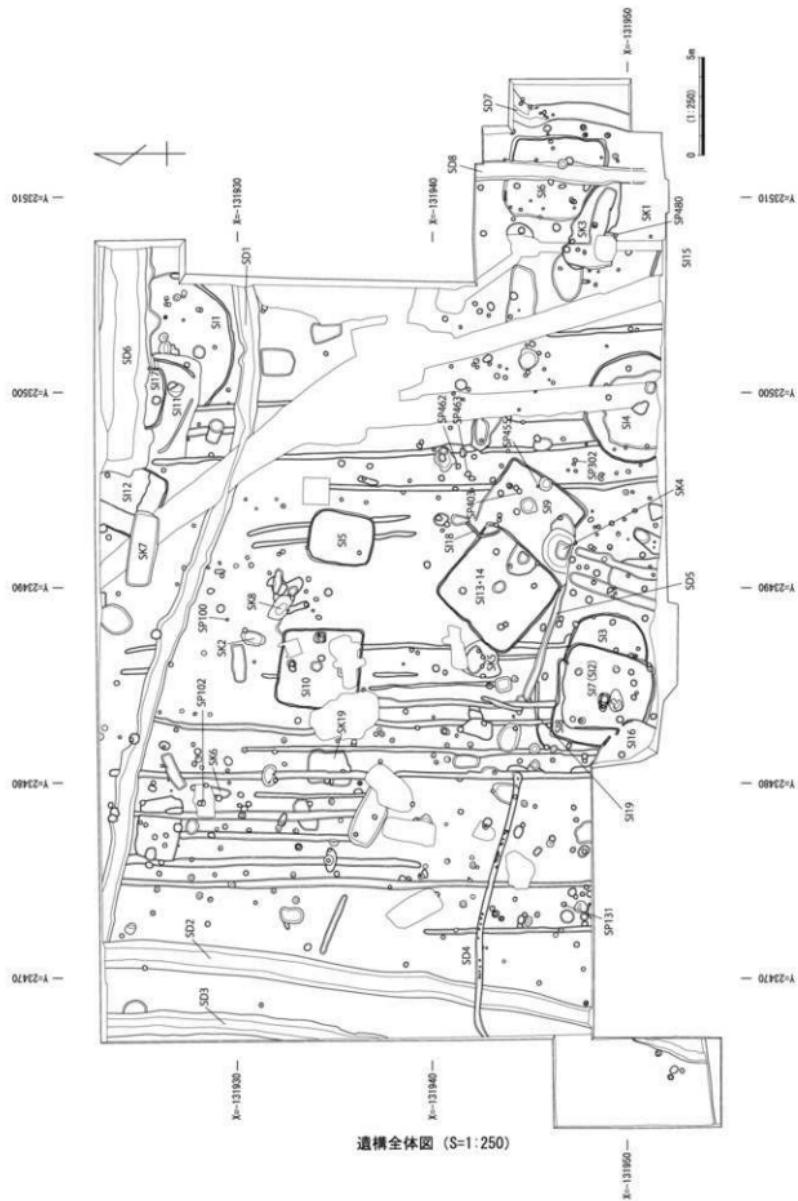


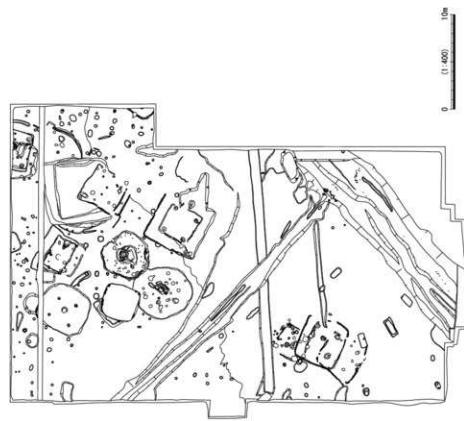
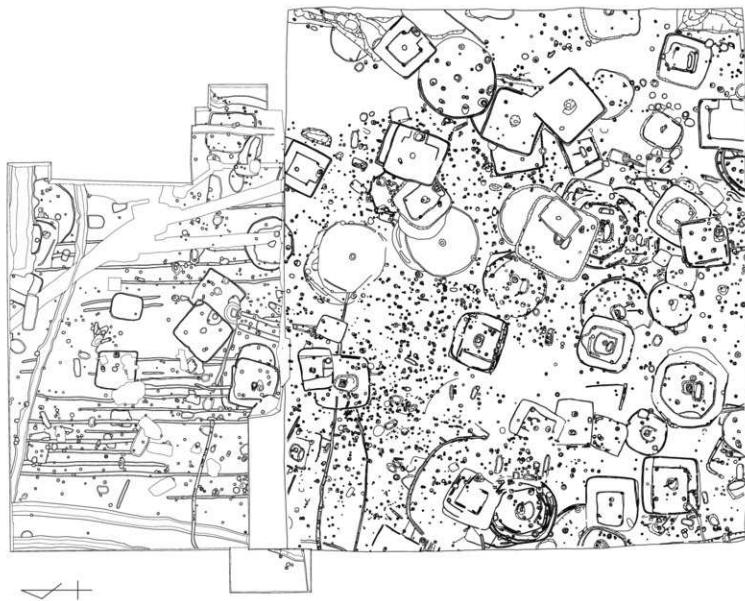
関連する周辺の遺跡 (S=1:25,000)



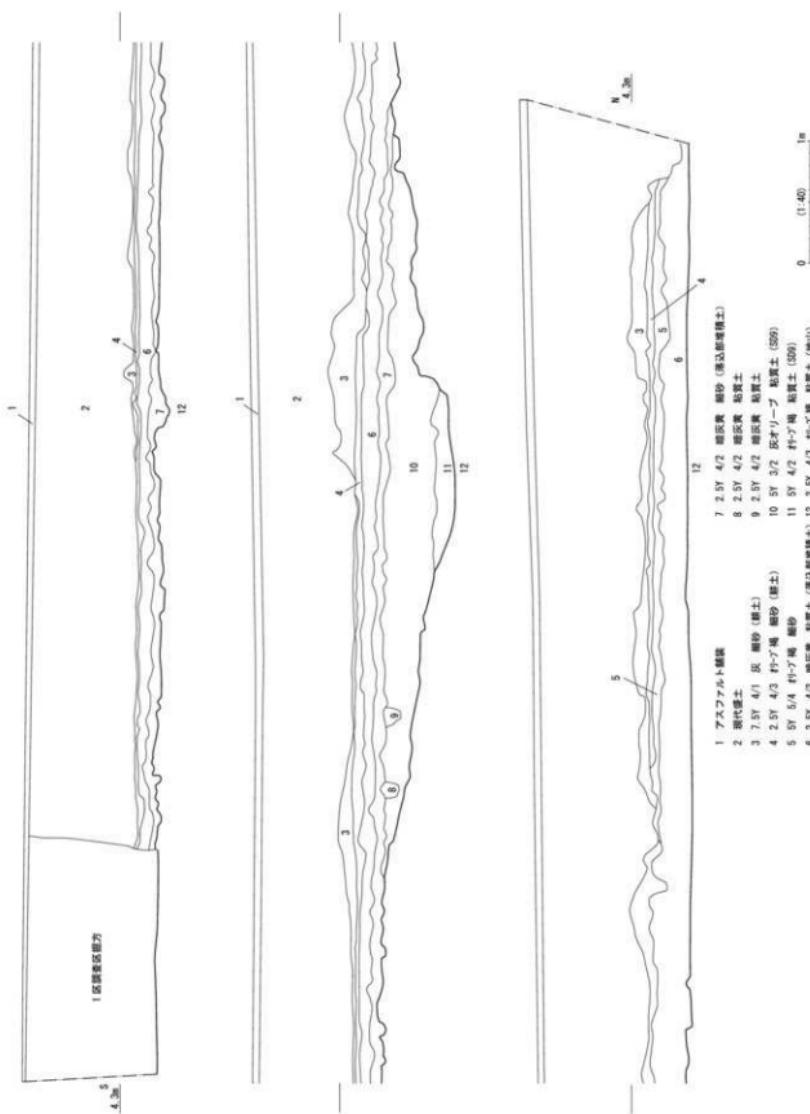
和久遺跡における既往の調査 (S=1:3,000)

圖版 4



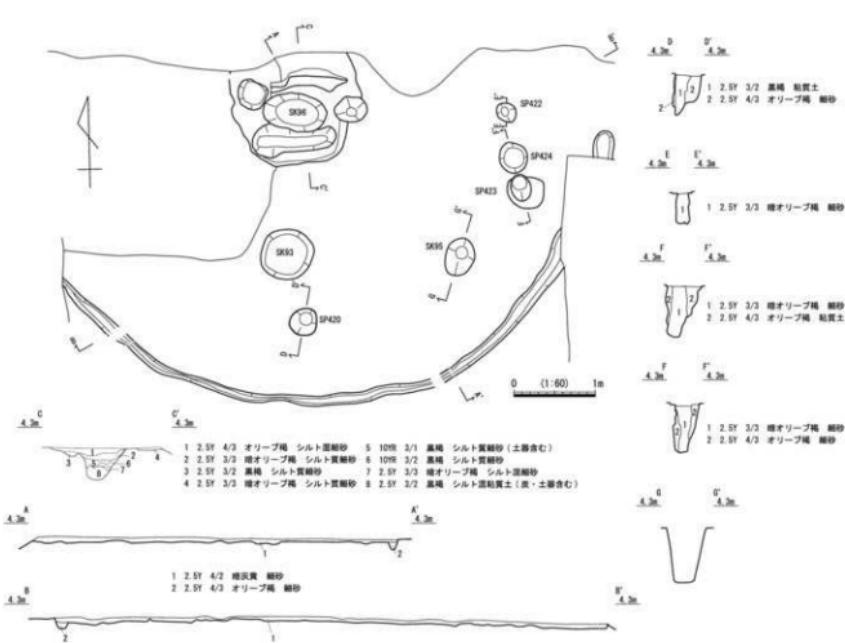
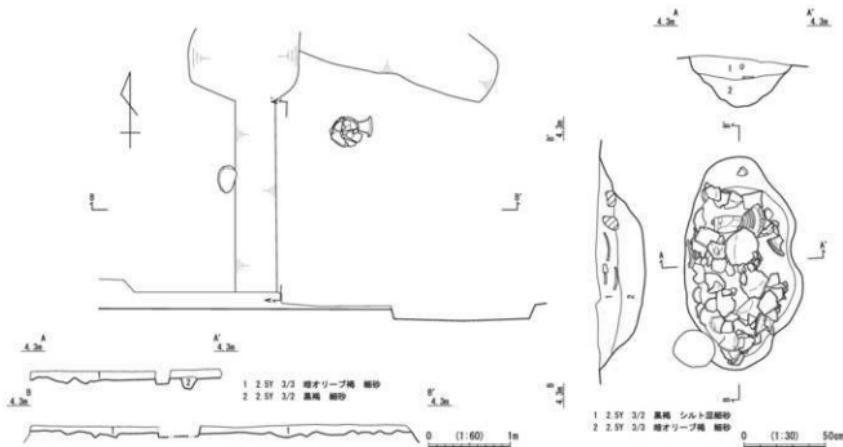


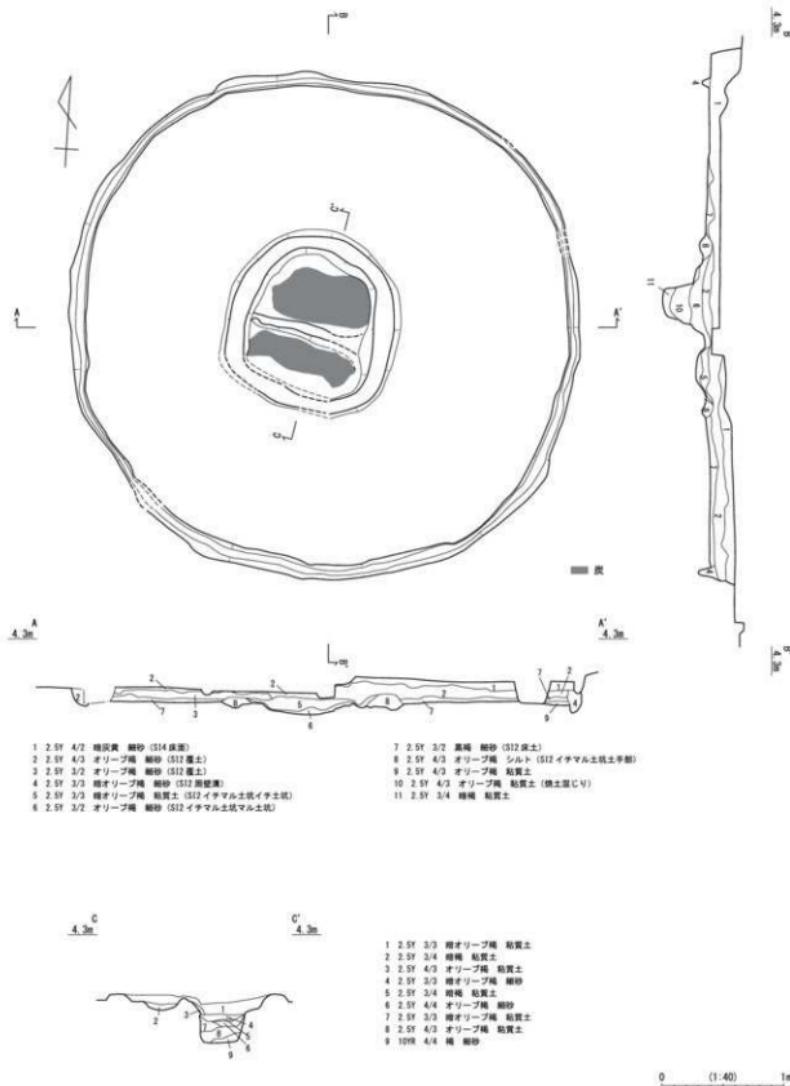
1次・9次・10次調査平面合図 (S=1:400)



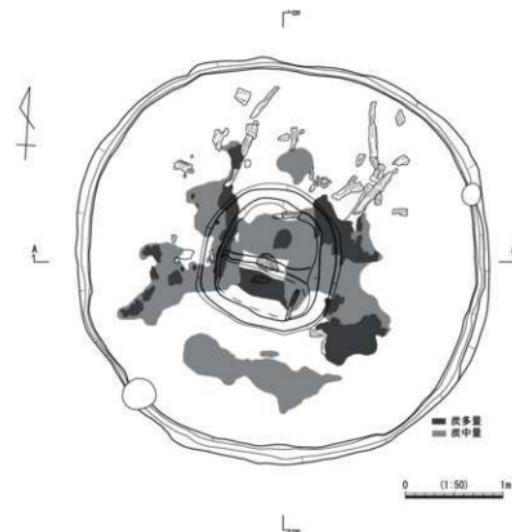
調査区西壁土層断面図 (S=1 : 40)

図版 7

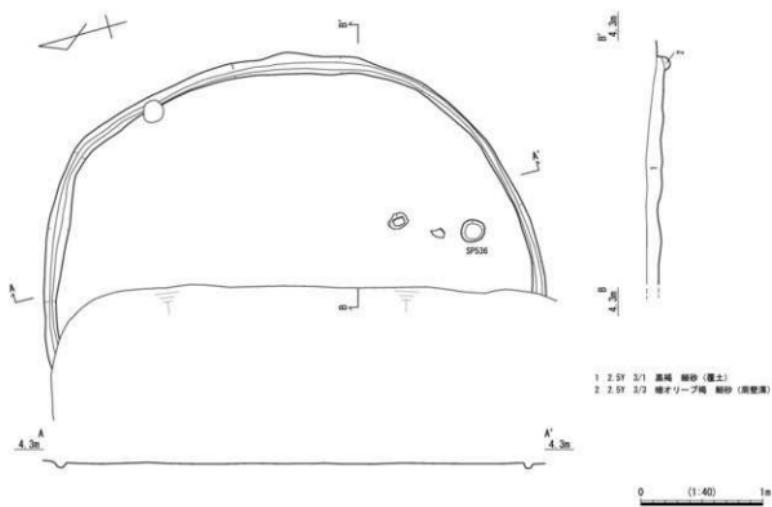




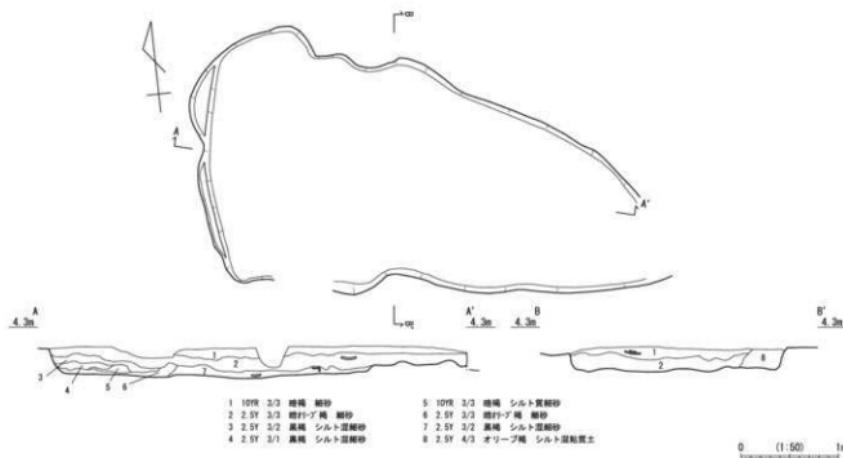
S12 平面図・断面図 (S=1:40)



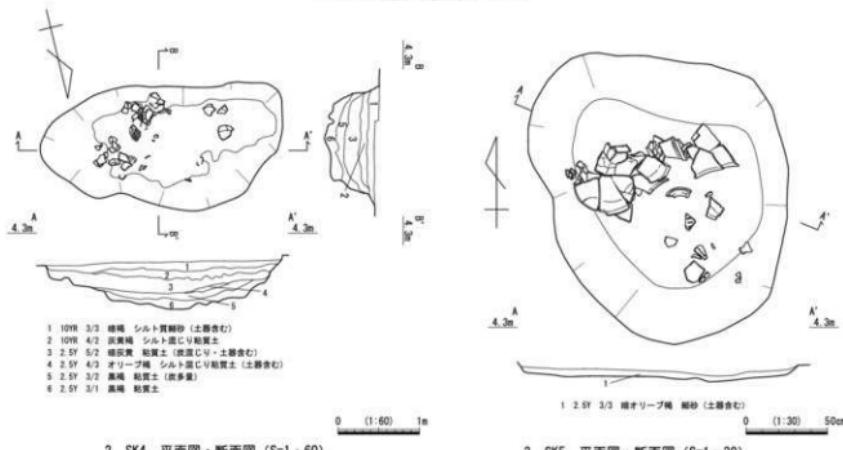
1 SI2炭化材検出状況 平面図 ($S=1:50$)



2 SI3 平面図・断面図 ($S=1:40$)

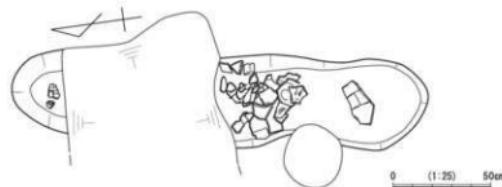


1 SK3 平面図・断面図 (S=1 : 50)



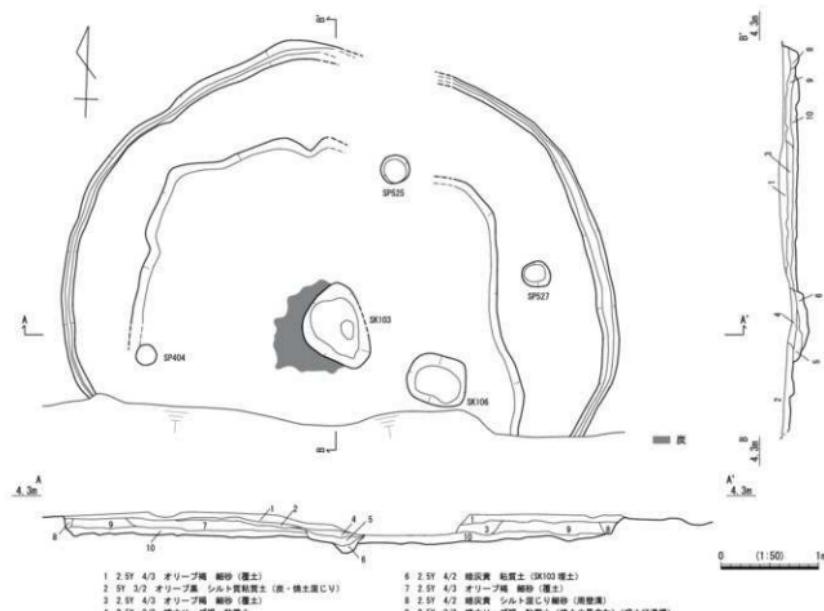
2 SK4 平面図・断面図 (S=1 : 60)

3 SK5 平面図・断面図 (S=1 : 30)

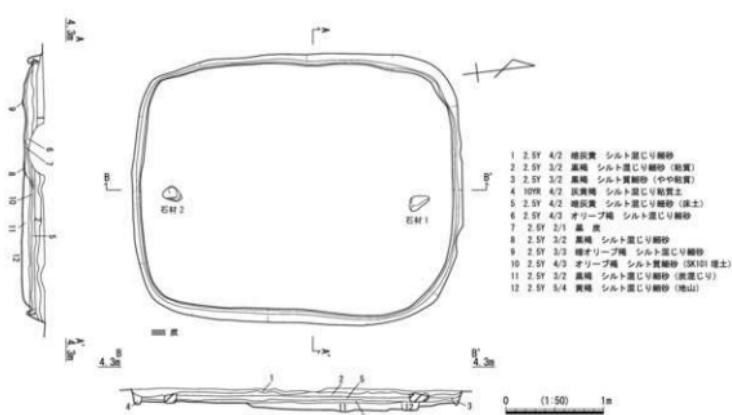


4 SK6 平面図・断面図 (S=1 : 25)

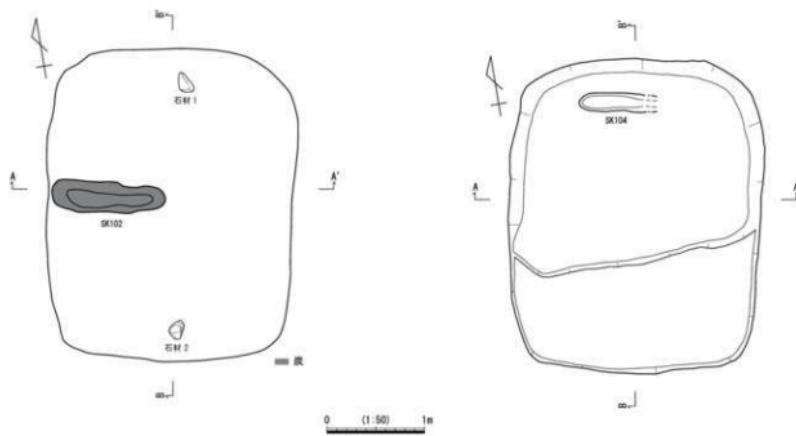
図版 11



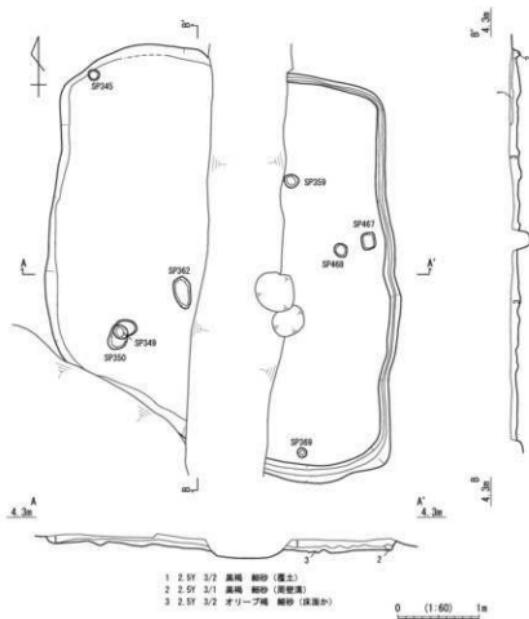
1 S14 平面図・断面図 (S=1 : 50)



2 S15 平面図・断面図 (S=1 : 50)

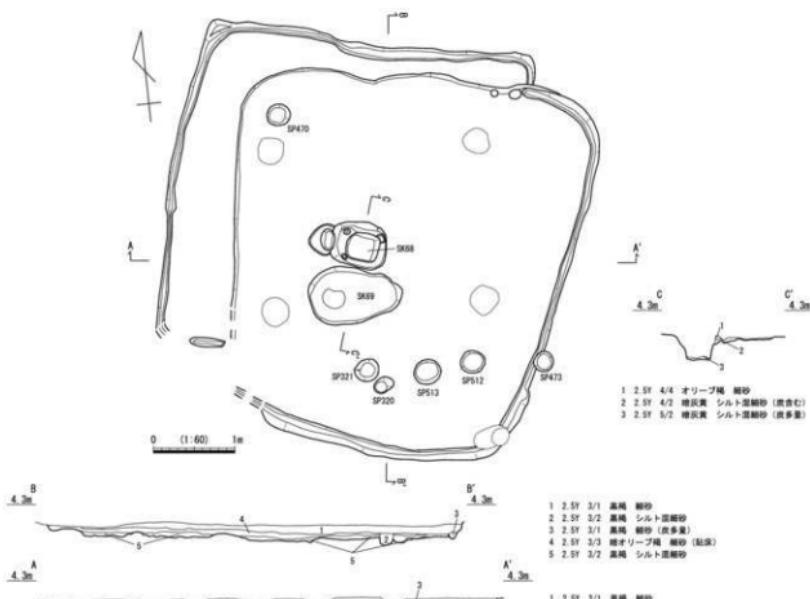


1 S15・S15下部構造 平面図・断面図 (S=1:50)

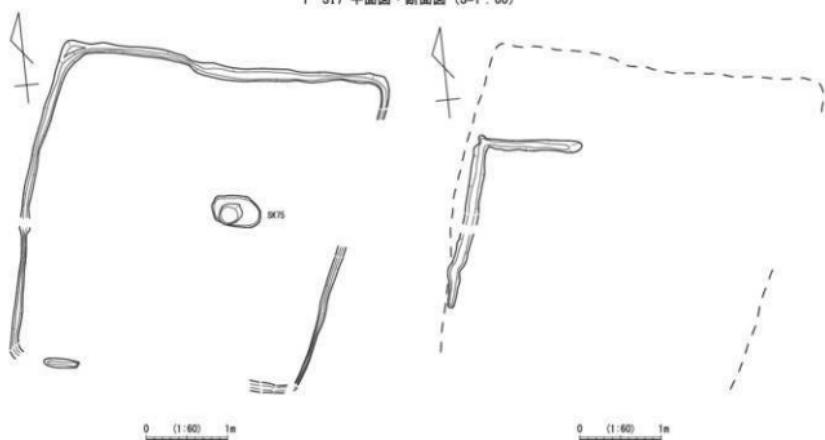


2 S16 平面図・断面図 (S=1:60)

図版 13

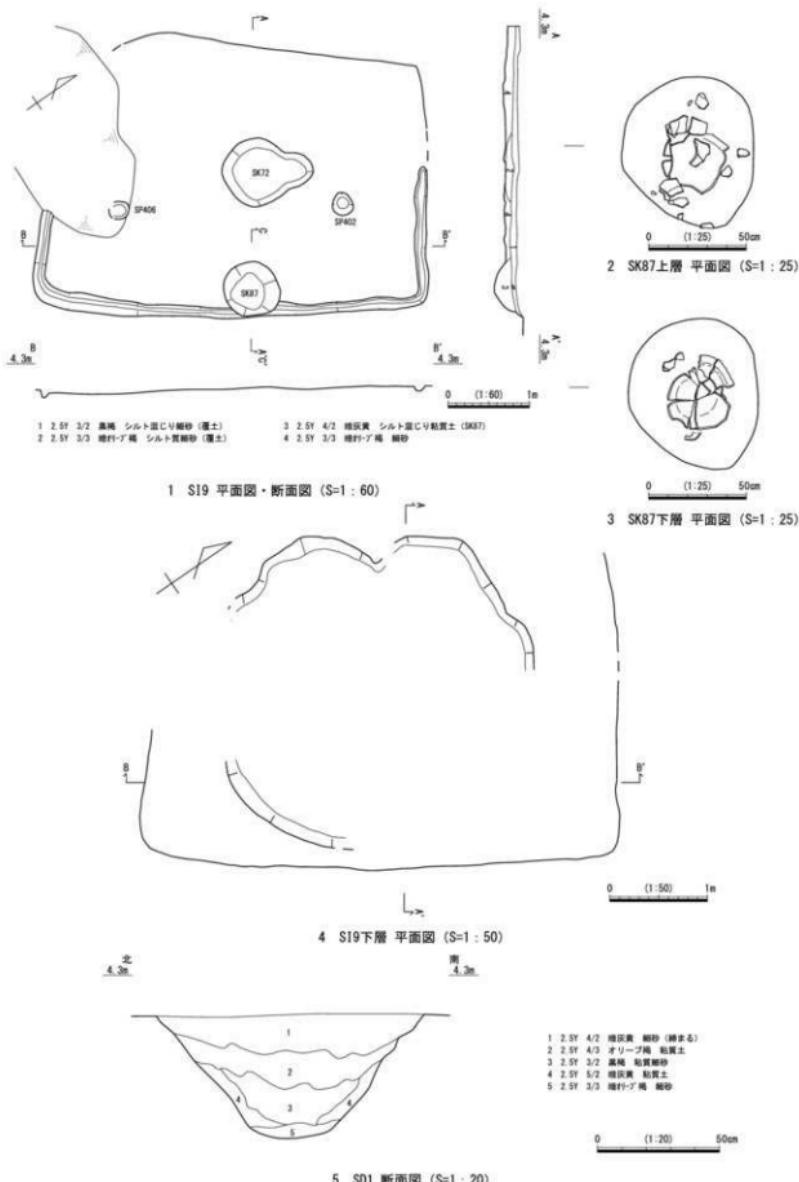


1 SI7 平面図・断面図 (S=1 : 60)

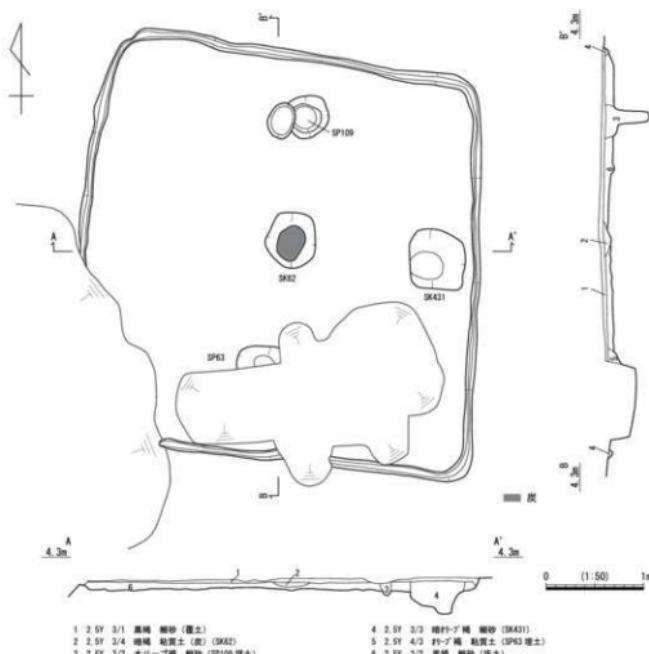


2 SI8 床面 平面図 (S=1 : 60)

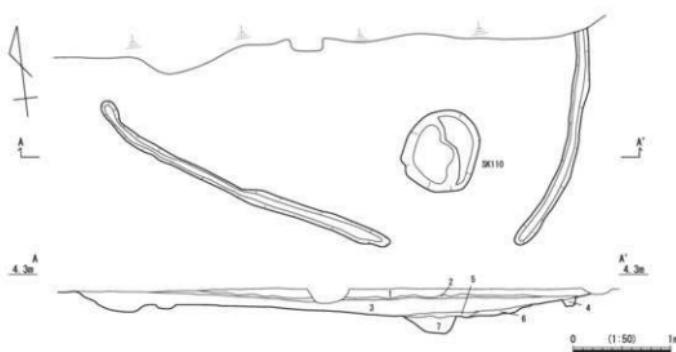
3 SI8 下層 平面図 (S=1 : 60)



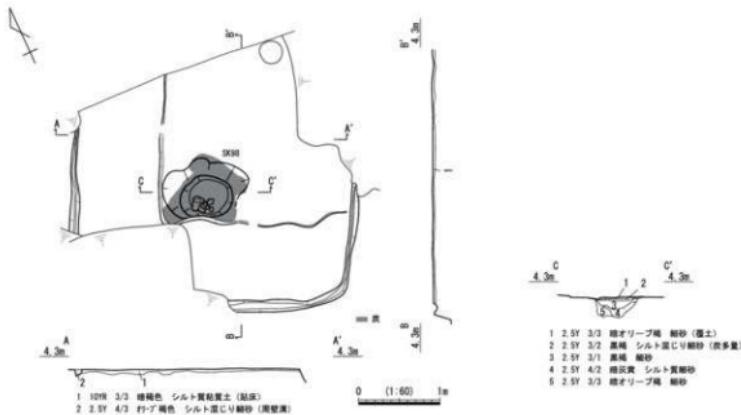
図版 15



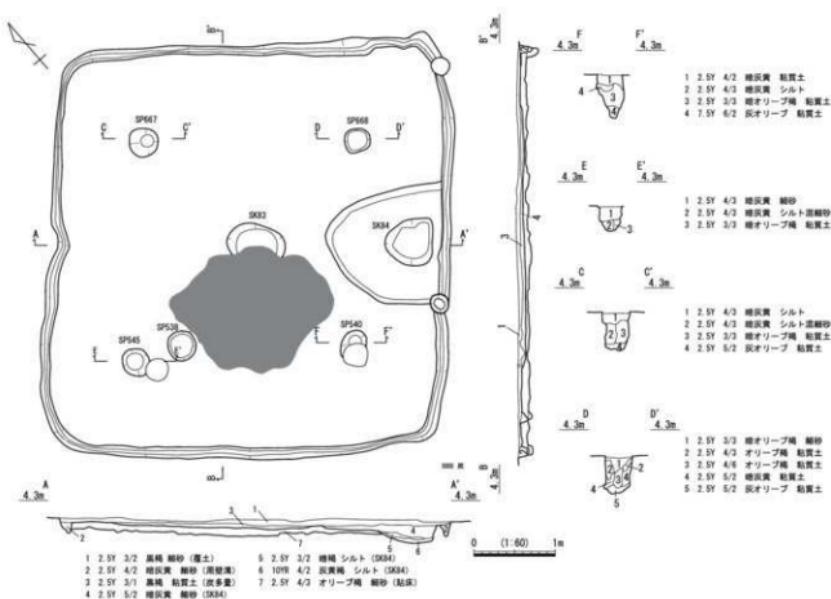
1 SI10 平面図・断面図 (S=1 : 50)



2 SI11 平面図・断面図 (S=1 : 50)



1. 2.5Y 3/2 墓オーリーブ場 細砂 (底土)
2. 2.5Y 3/2 墓場 シルト混じり細砂 (底多量)
3. 2.5Y 3/1 墓場 細砂
4. 2.5Y 4/2 沖灰質 シルト質細砂
5. 2.5Y 3/2 墓オーリーブ場 細砂

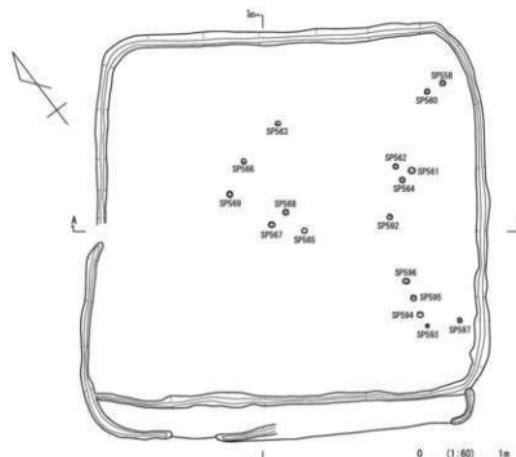


1. 2.5Y 4/2 沖灰質 黏質土
2. 2.5Y 4/3 沖灰質 シルト
3. 2.5Y 3/2 墓オーリーブ場 黏質土
4. 2.5Y 6/2 沖オーリーブ 黏質土

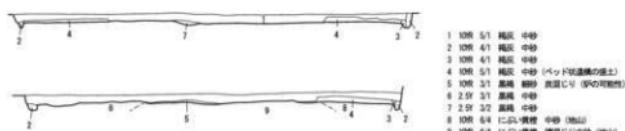
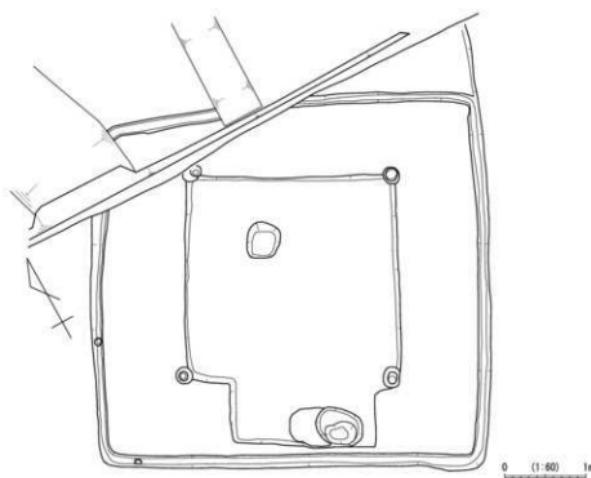
1. 2.5Y 4/2 沖灰質 細砂
2. 2.5Y 4/3 沖灰質 シルト混細砂
3. 2.5Y 3/2 墓オーリーブ場 黏質土

1. 2.5Y 3/2 墓オーリーブ場 細砂
2. 2.5Y 4/3 オーリーブ場 黏質土
3. 2.5Y 4/2 オーリーブ場 黏質土
4. 2.5Y 5/2 沖灰質 黏質土
5. 2.5Y 5/2 安オーリーブ 黏質土

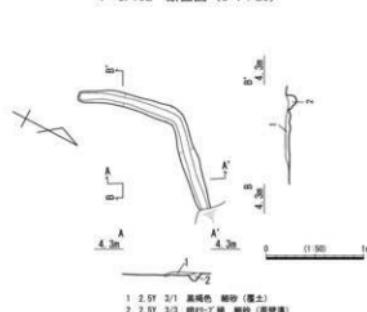
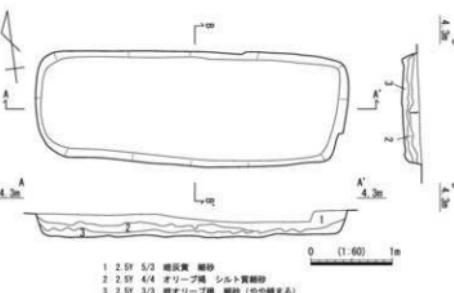
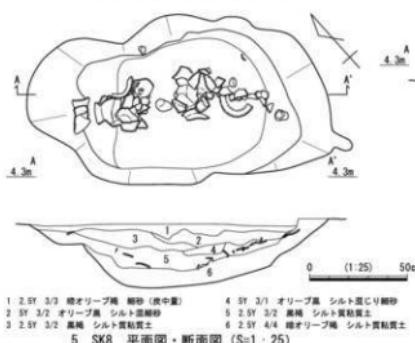
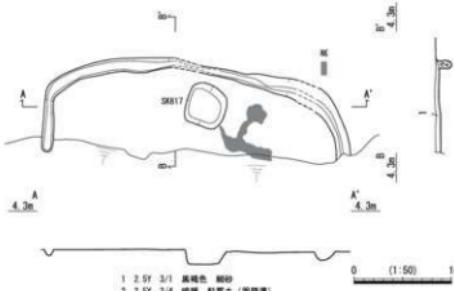
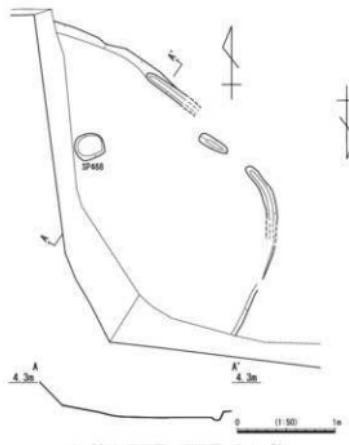
図版 17



1 SII14 平面図・断面図 (S=1 : 60)

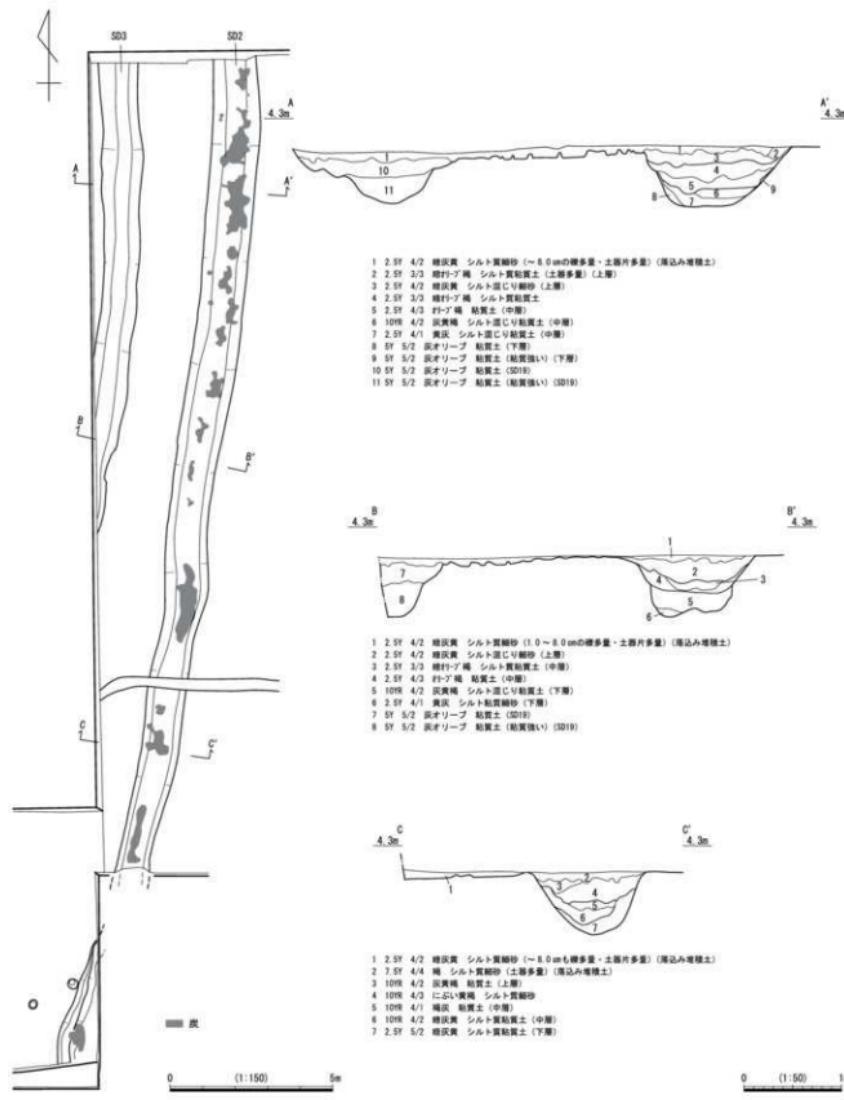


2 SII15 平面図・断面図 (第1次調査SH01の実測図を合成) (S=1 : 60)

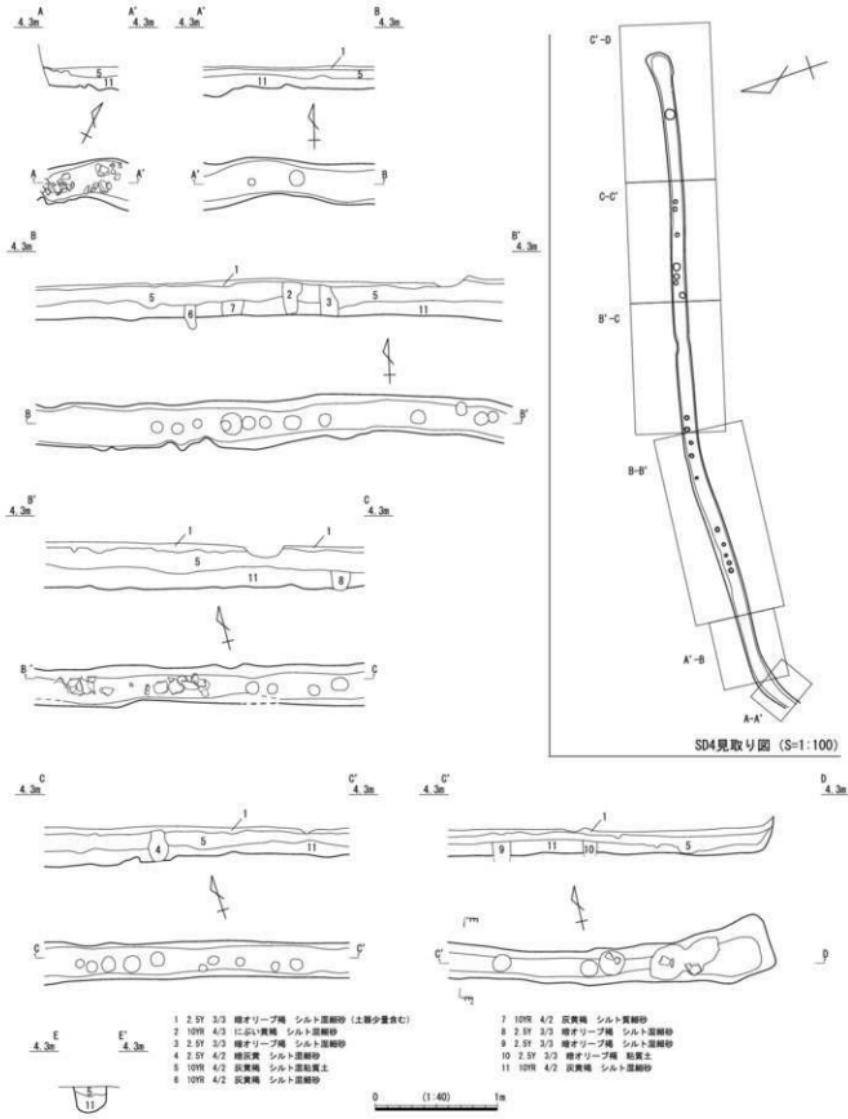


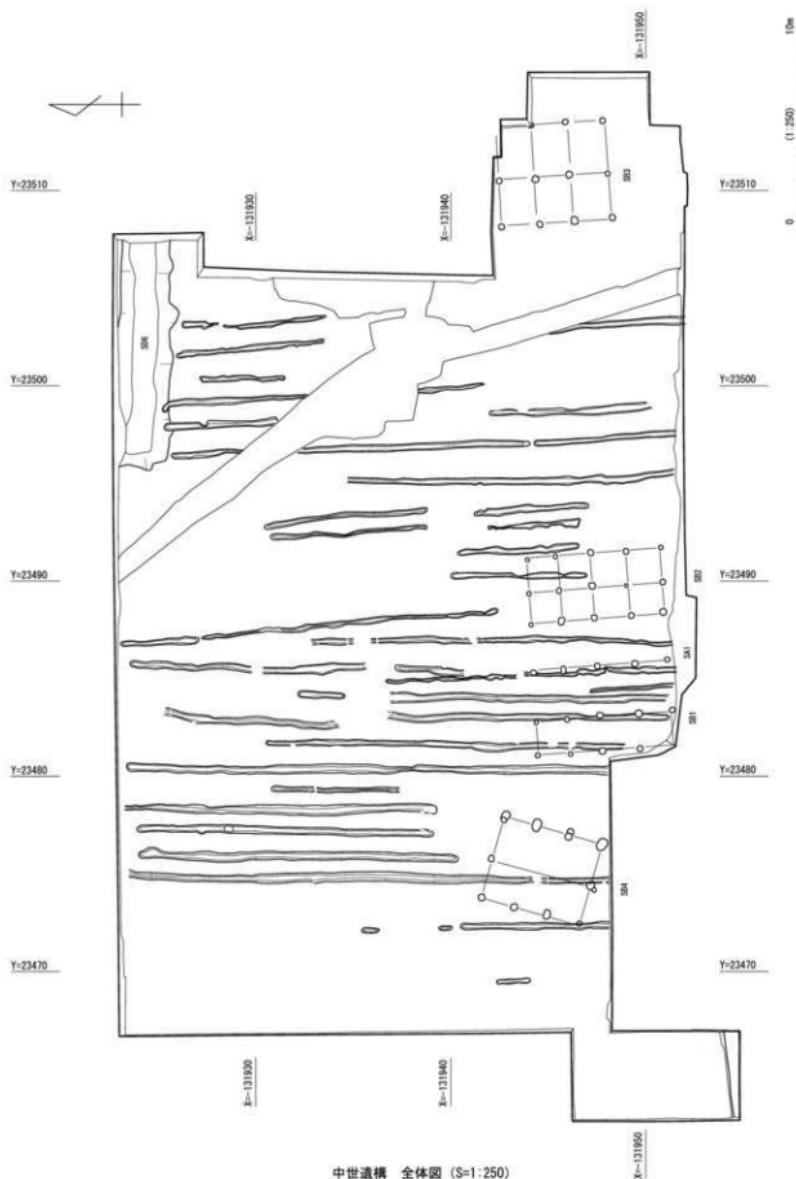
7 SI18 平面図・断面図 (S=1 : 50)

図版 19

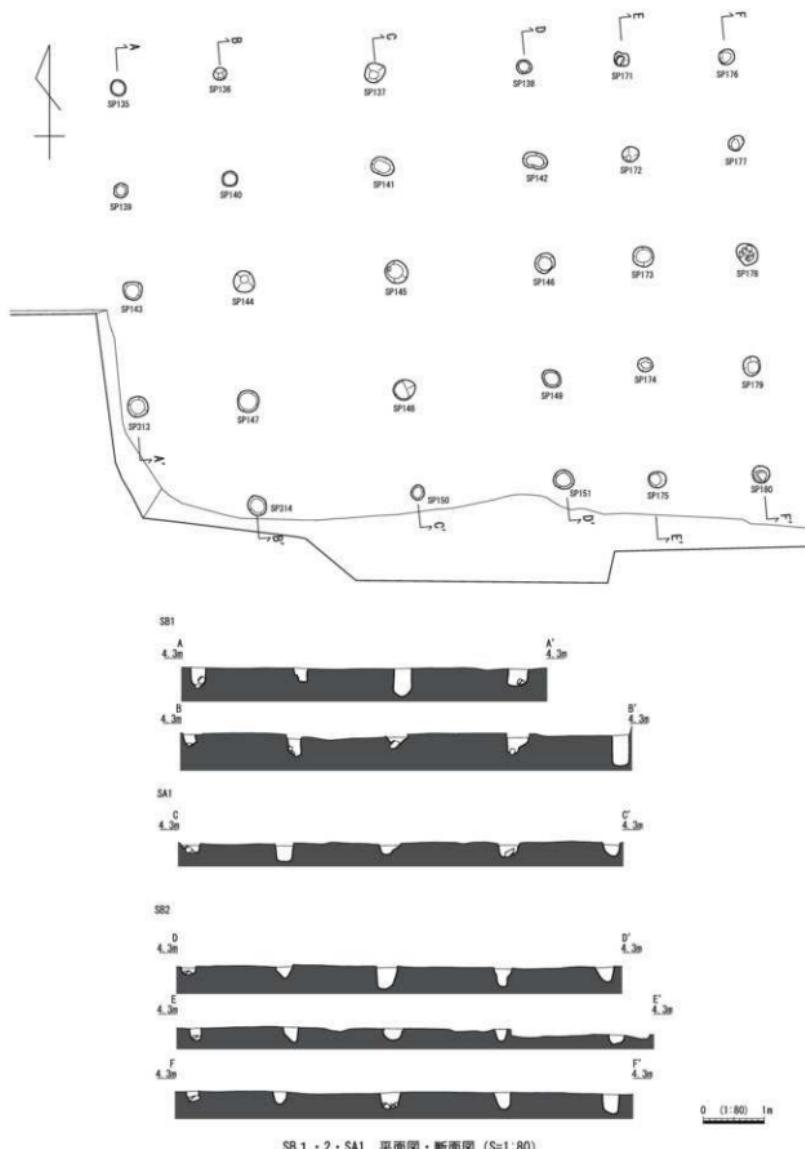


SD2・3平面図 (S=1:150)、断面図 (S=1:50)

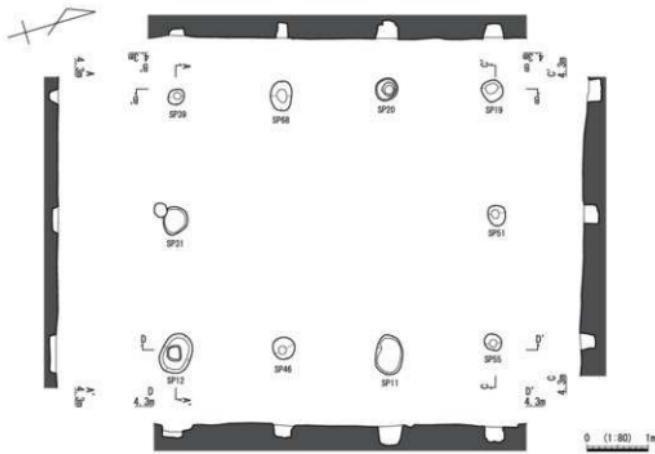
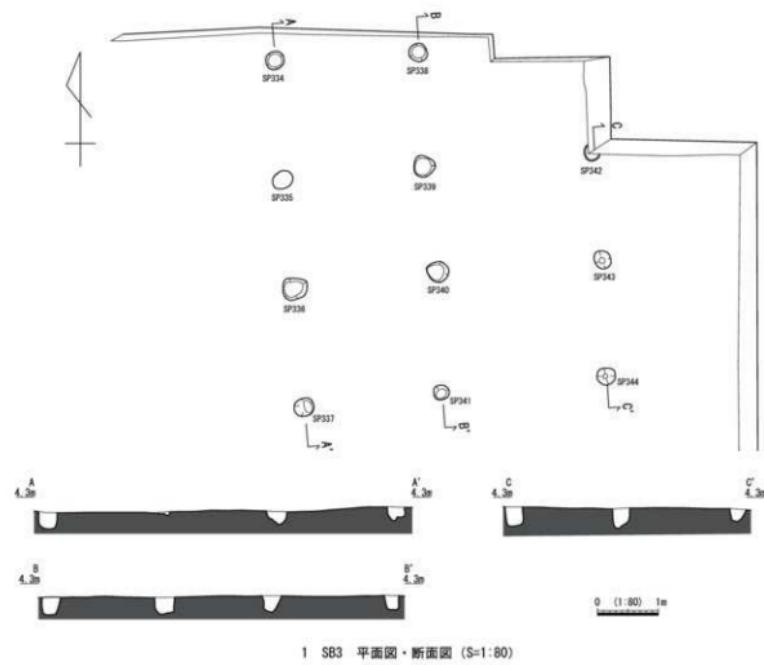


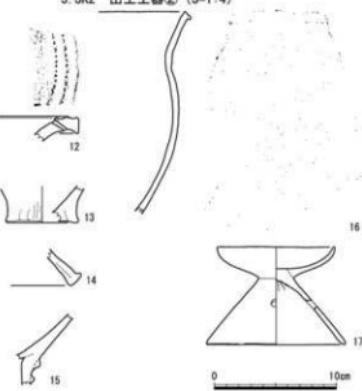
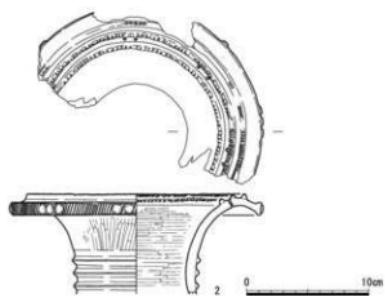
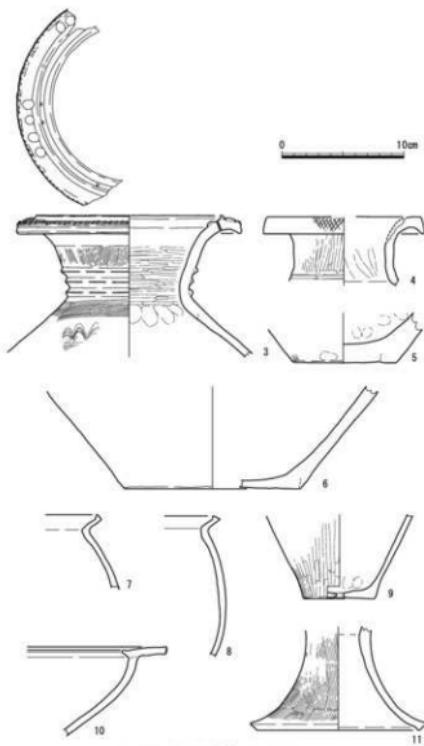
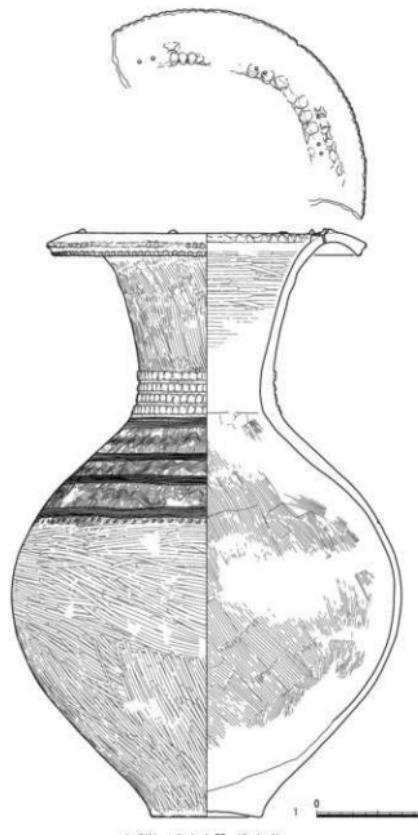


中世遺構 全体図 (S=1:250)

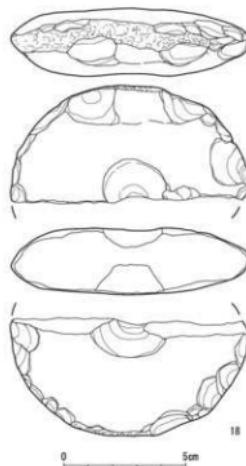


図版 23

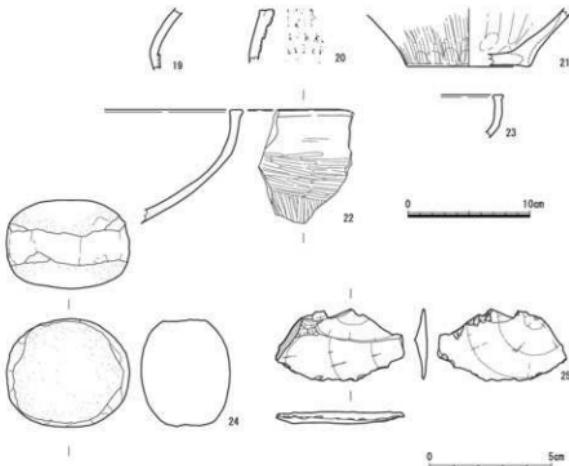




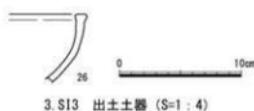
図版 25



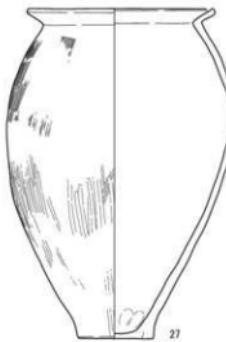
1. SI1 出土土器 (S=1:2)



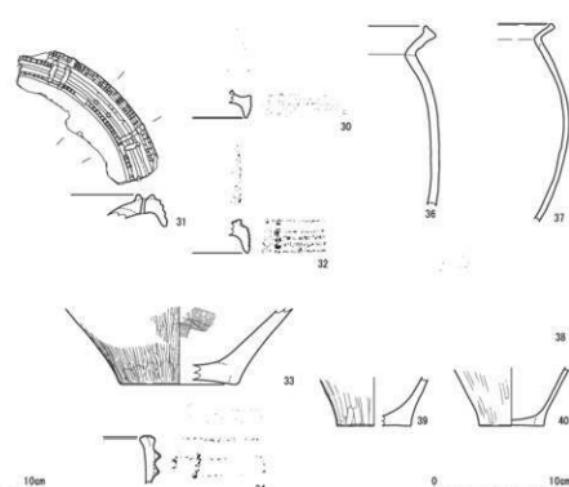
2. SI2 出土土器 (S=1:4)、石器 (S=1:2)



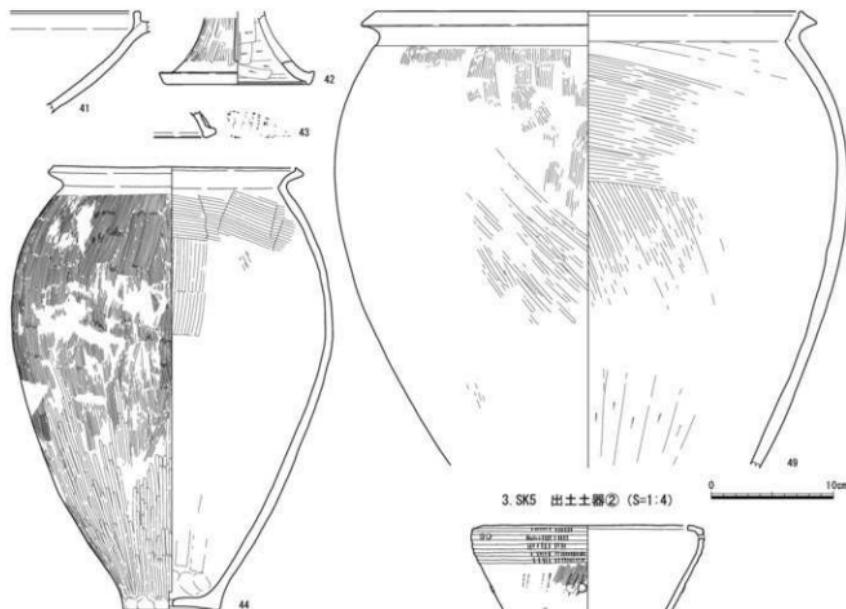
3. SI3 出土土器 (S=1:4)



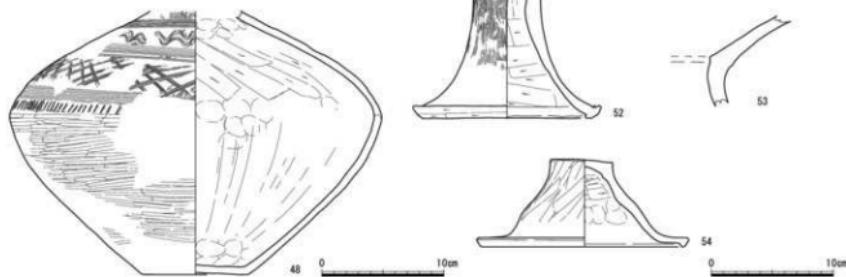
4. SK3 出土土器 (S=1:4)



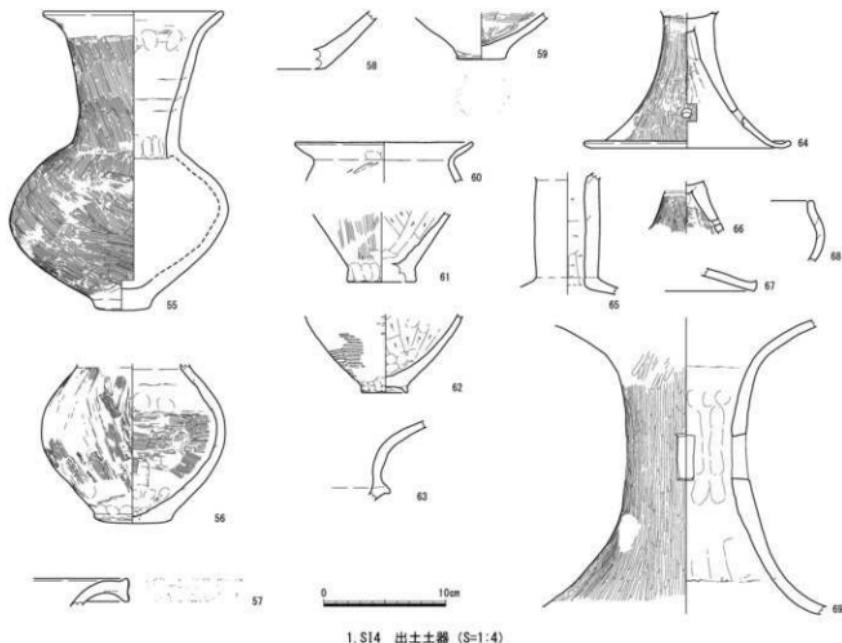
5. SK4 出土土器① (S=1:4)



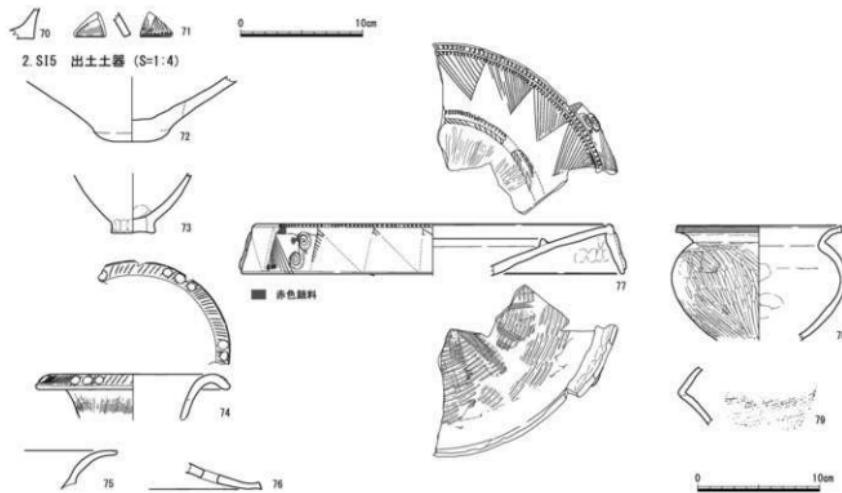
1. SK4 出土土器② (S=1:4)、石器 (S=1:2)



図版 27



1. S14 出土土器 (S=1:4)

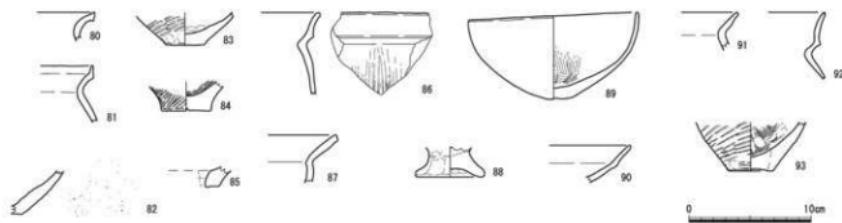
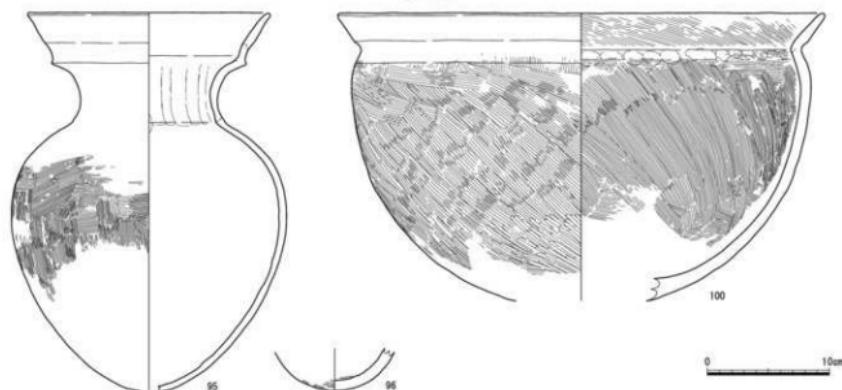
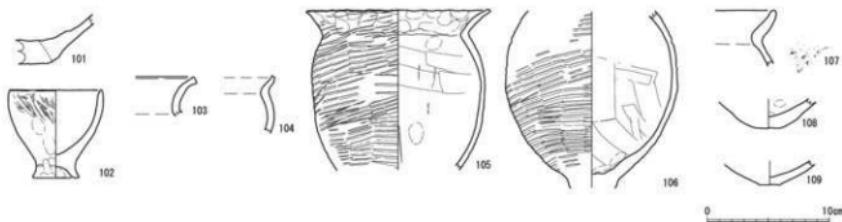


■ 色鉛筆

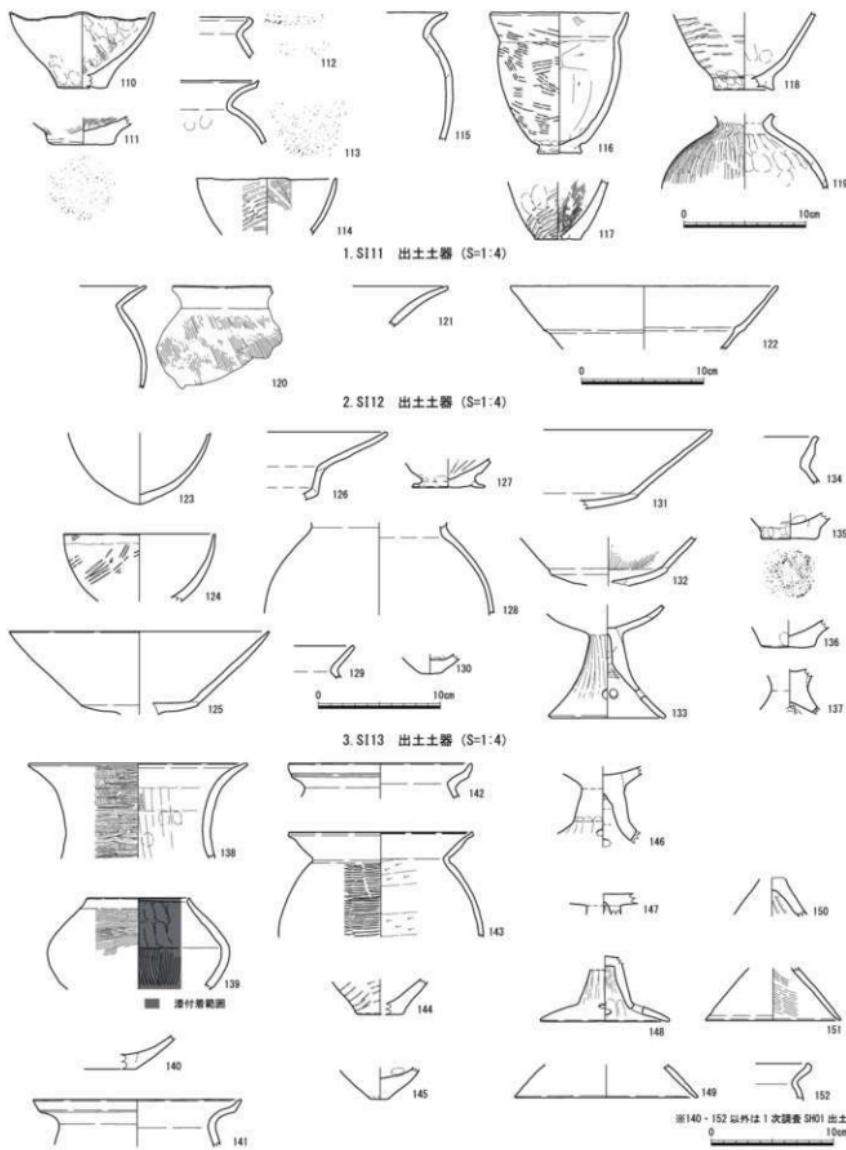
2. S15 出土土器 (S=1:4)



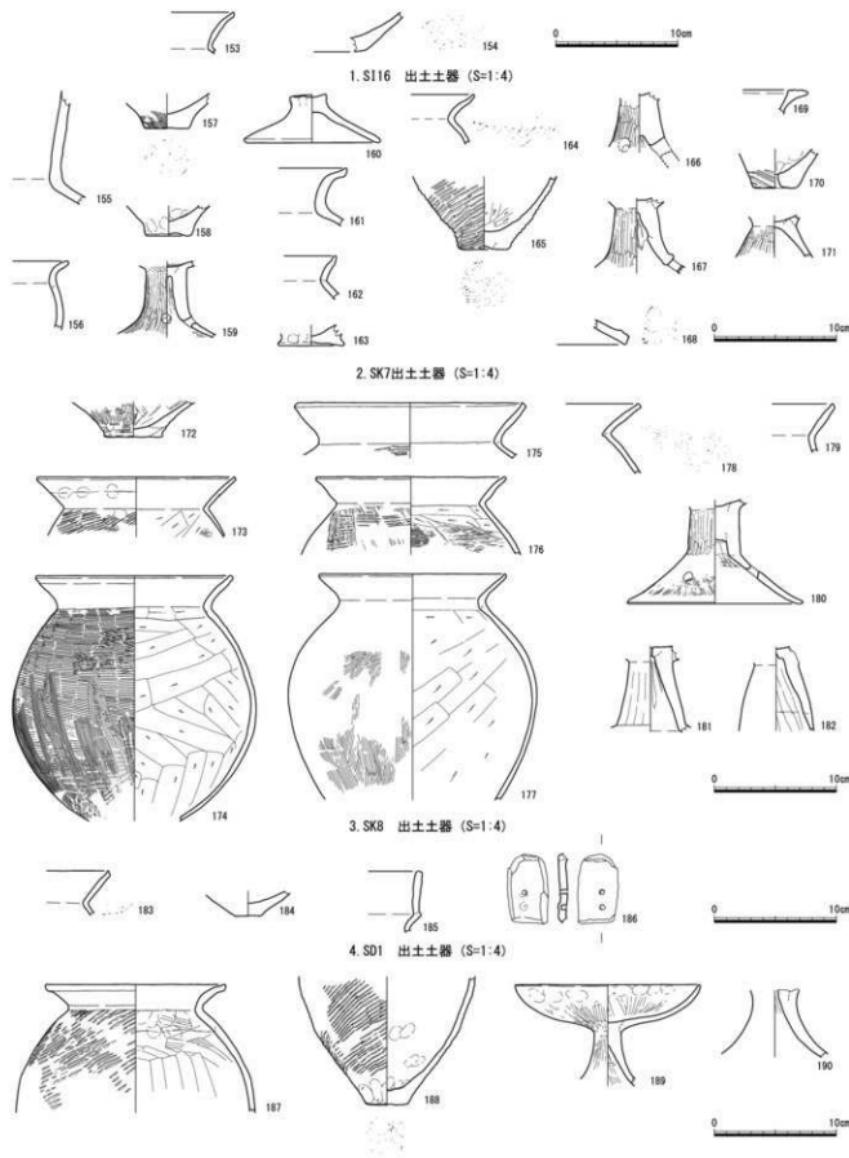
3. S16 出土土器 (S=1:4)

1. S17 出土土器 ($S=1:4$)2. S19 出土土器 ($S=1:4$)3. S110 出土土器 ($S=1:4$)

図版 29



4. S115 出土土器 (S=1:4)

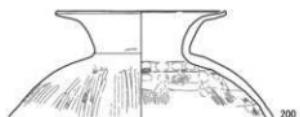
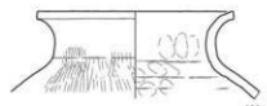
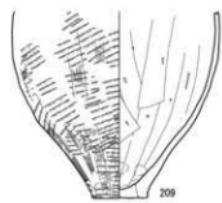
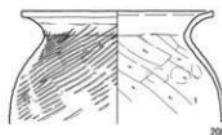
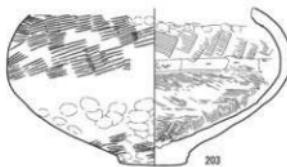
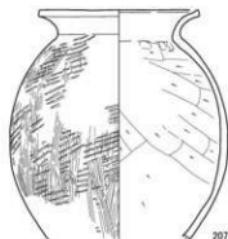
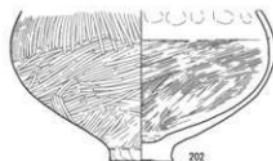
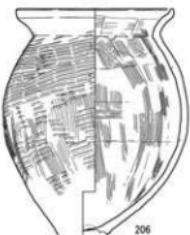
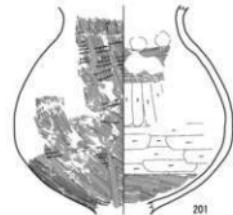
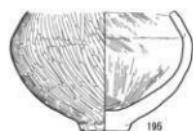


5. SD2 上層 出土土器① (S=1:4)

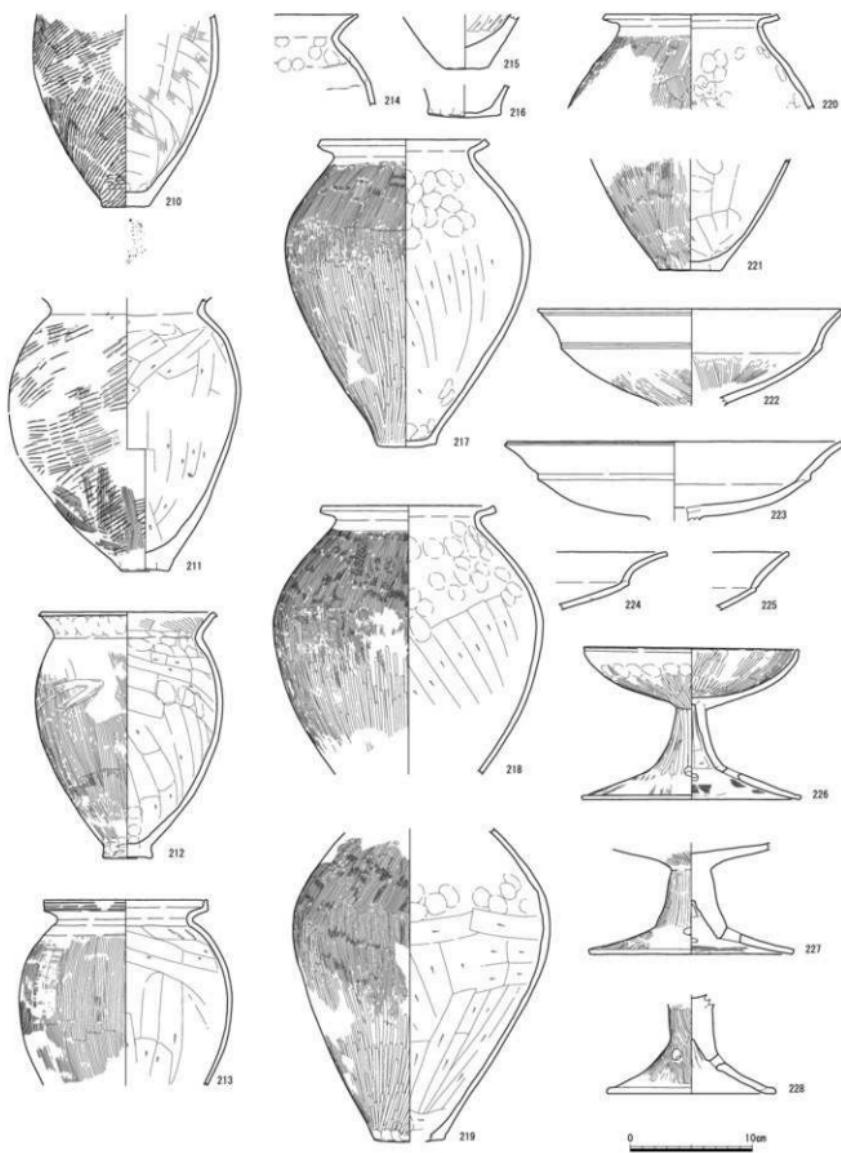
図版 31



1. SD2 上層 出土土器② (S=1:4)

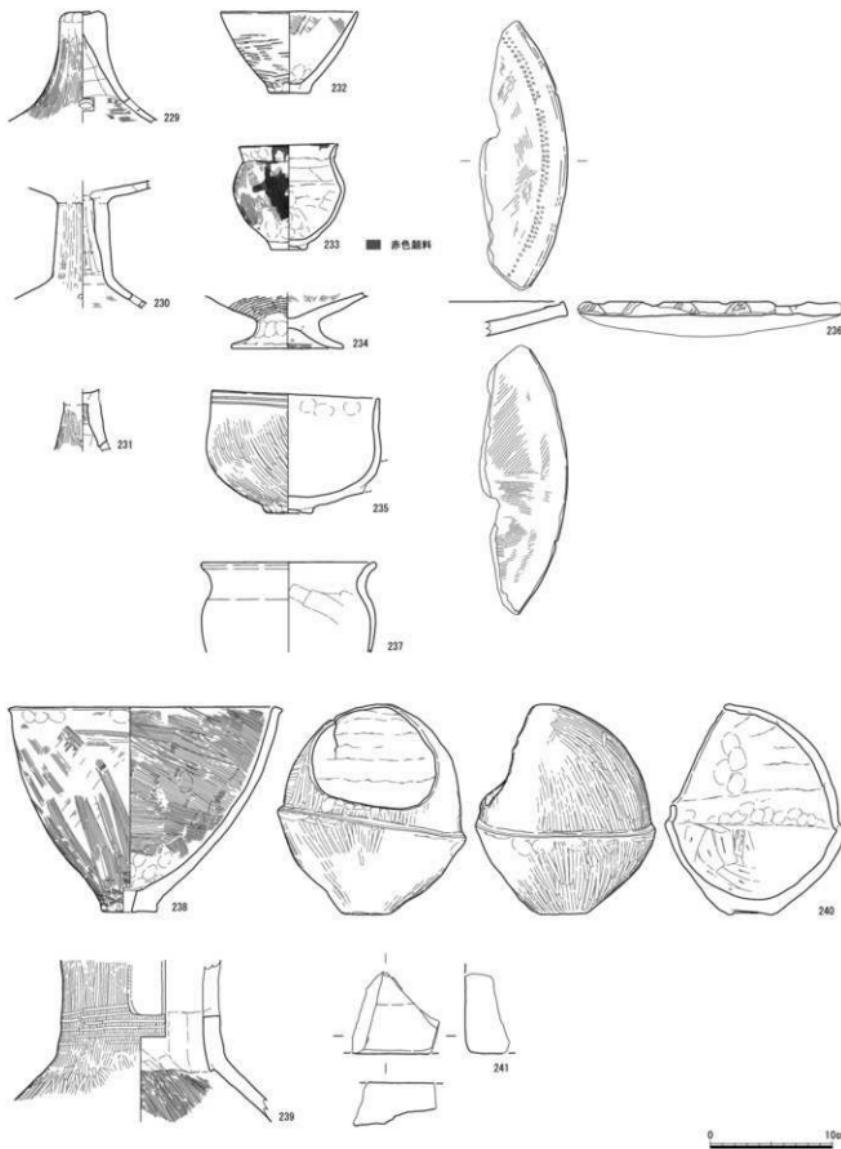


2. SD2 中層 出土土器① (S=1:4)

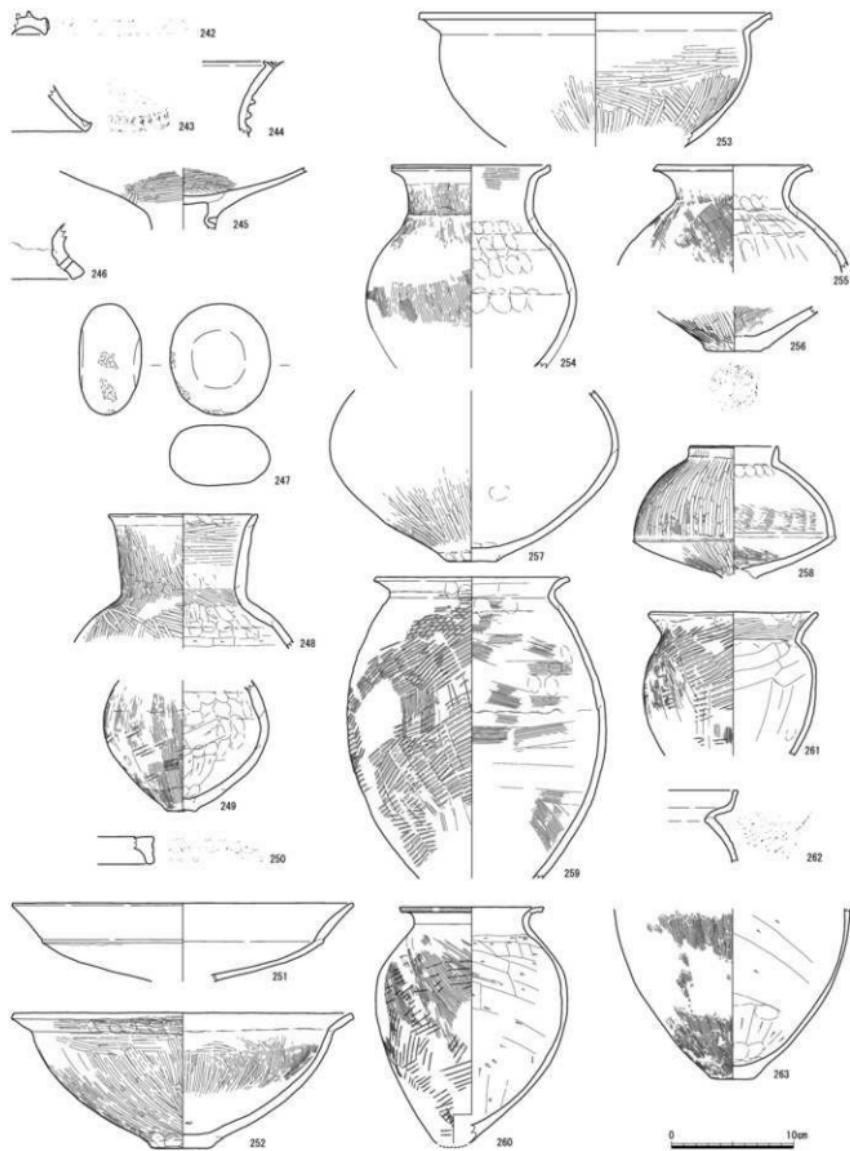


SD2 中層 出土土器② (S=1:4)

図版 33



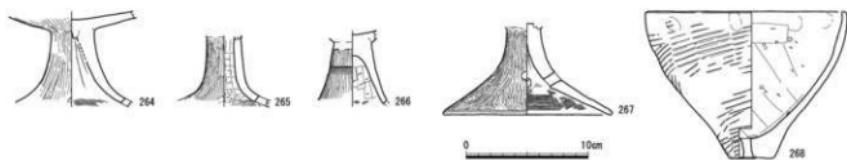
SD2 中層 出土土器③ ($S=1:4$)、石器 ($S=1:4$)



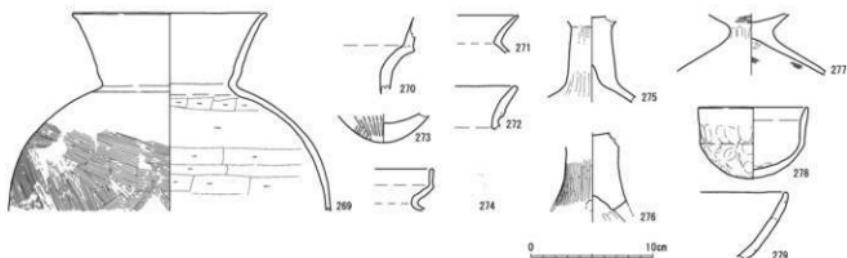
SD2 下層 出土土器① (S=1:4)、石器 (S=1:4)

0 10mm

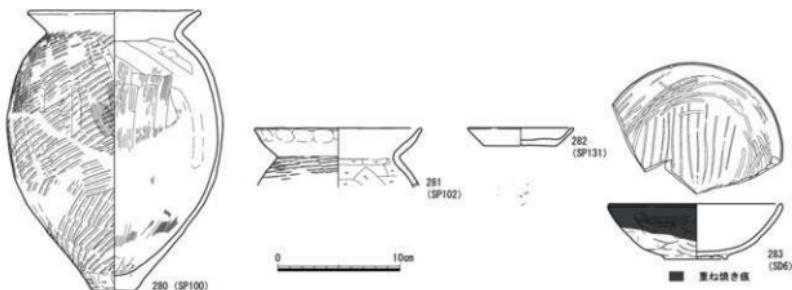
図版 35



1. SD2 下層 出土土器② (S=1:4)



2. SD4 出土土器 (S=1:4)



3. その他の造構 (S=1:4)

写 真 図 版



調査区南西部全景(北から)

写真図版 2



SD2土器検出状況(北から)



SD2土器検出状況詳細(北西から)



SD2手焙形土器検出状況(南から)



SD2断面状況(北から)



SD2土器検出状況(北西から)



調査区南西部東壁断面状況(北西から)



調査区全景(北東から)

写真図版 4



S11炭化材検出状況(南西から)



S11全景(北西から)



SI1完掘状況(南東から)



SI1イチマル土坑検出状況(南東から)



SI1炭化材断面状況(南から)



SI1炭化材断面状況(南から)



SK93検出状況(東から)

写真図版 6



Si2炭化材検出状況(北西から)



Si2全景(北西から)



S12イチマル土坑検出状況(北から)



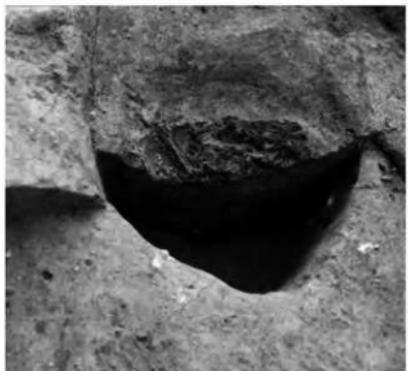
S12イチマル土坑検出状況(北東から)



S12イチマル土坑検出状況(北から)



S12イチマル土坑イチ土坑断面状況(西から)



S12イチマル土坑マル土坑断面状況(東から)

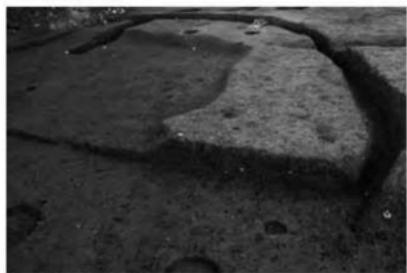


S13全景(北東から)

写真図版 8



SI4全景(北西から)



SI4ベッド状追模断面状況(東から)



SI4内SK103検出状況(南東から)



SI4土器検出状況(北東から)



SI4完掘状況(北から)



SI5全景(南から)



SI5下部構造全景(北から)

写真図版 10



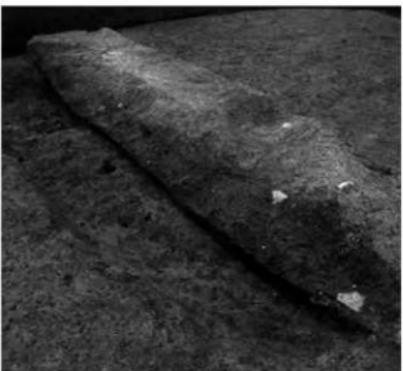
S15石材1検出状況(東から)



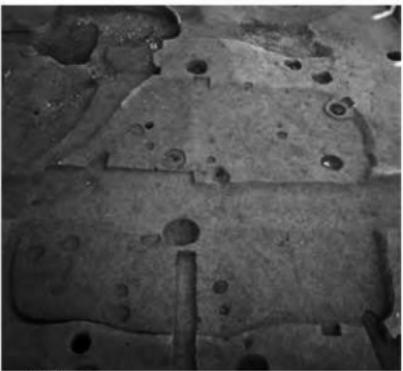
S15石材2検出状況(西から)



S15内SK98検出状況(東から)



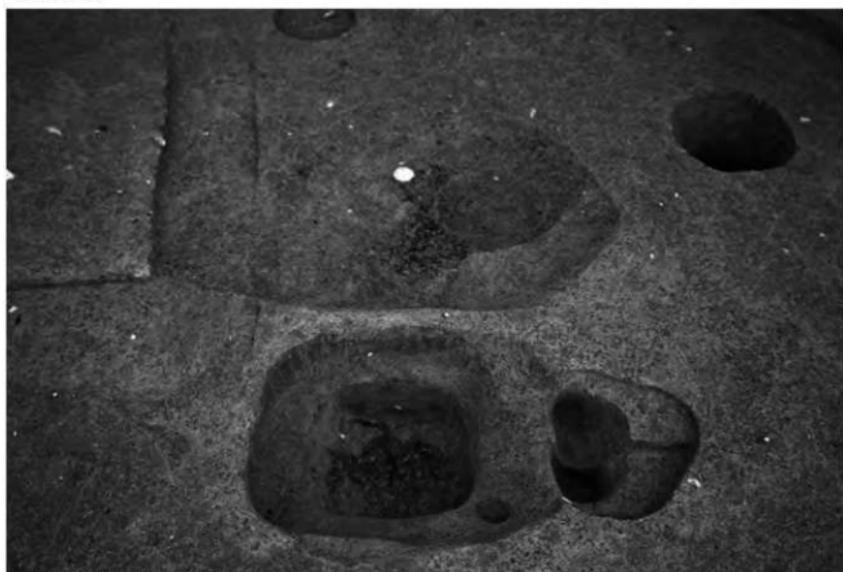
S15内SK98断面状況(南東から)



S16全景(東から)



SI7全景(北から)



SI7イチマル土坑検出状況(北から)

写真図版 12



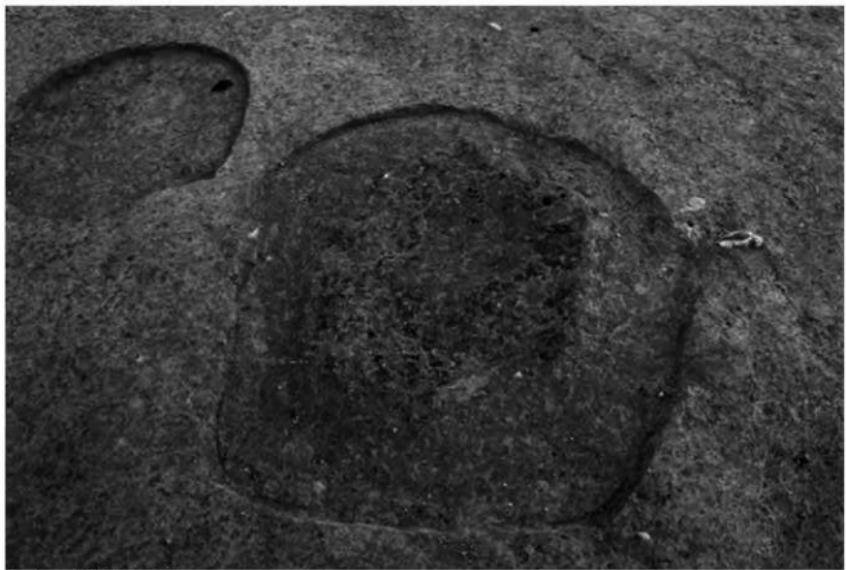
SI8全景(北から)



SI9全景(北から)



SI10全景(北から)



SI10内SK62検出状況(北から)

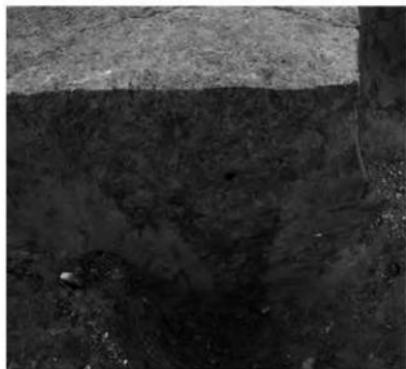
写真図版 14



SI10内SP109断面状況(北から)



SI10内SP109柱痕検出状況(北から)



SI10内SP63断面状況(南から)



SI10内SK431断面状況(北から)



SI10内SK431土器検出状況(北東から)



SI10内SK431完掘状況(北から)



SI11全景(北西から)



SI12全景(南東から)



SI12内中央燃焼土坑検出状況(西から)

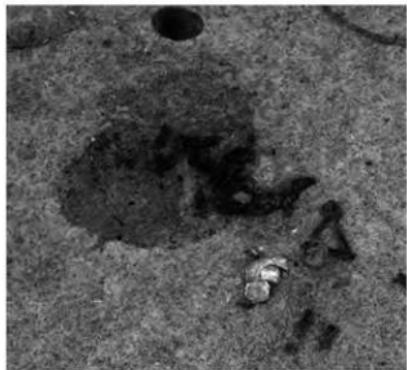
写真図版 16



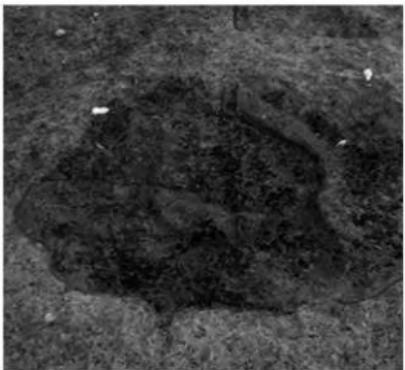
SI13全景(北東から)



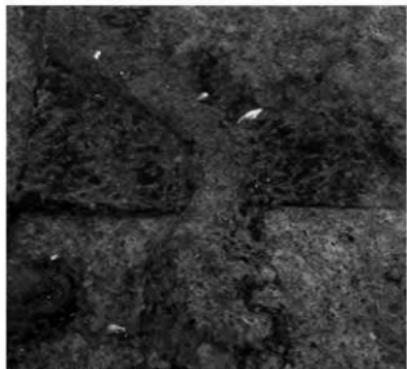
SI14全景(北東から)



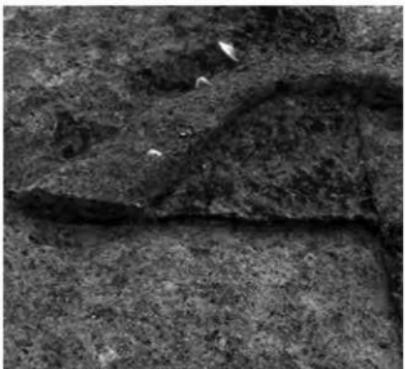
SI13内中央燃焼土坑検出状況(北から)



SI13内中央燃焼土坑検出状況(北から)



SI13内中央燃焼土坑土手検出状況(北から)



SI13内中央燃焼土坑土手部断面状況(東から)



SI15全景(北から)



SI16全景(北西から)

写真図版 18



S117全景(南東から)



S117完成状況(南東から)

写真図版 20



SD2検出状況(南から)



SD1・2の切り合い状況(南西から)



SD2土器検出状況(北西から)



SD2土器検出状況(西から)



SD2土器検出状況(北東から)



SD2粘土塊検出状況(北東から)



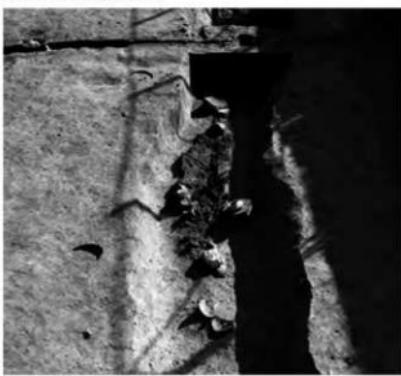
SD2土器検出状況(北から)



SD2土器検出状況(西から)



SD2土器検出状況(北西から)



SD2炭集積部検出状況(北から)



SD2炭集積部検出状況(北西から)



SD2断面状況(北から)



SD2完掘状況(南から)



SD1断面状況(西から)



SD1断面状況(西から)



SD4全景(東から)



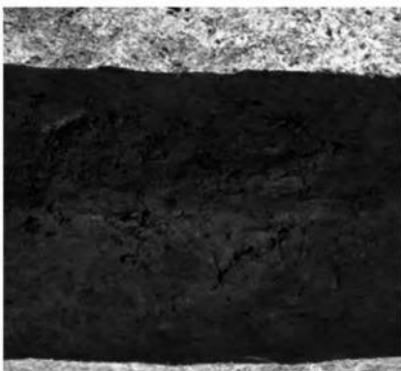
SD4断面状況(西から)



SD4断面状況(西から)



SD4断面状況(北東から)



SD4断面状況(北から)



SD4断面状況(北から)



SD4断面状況(北から)



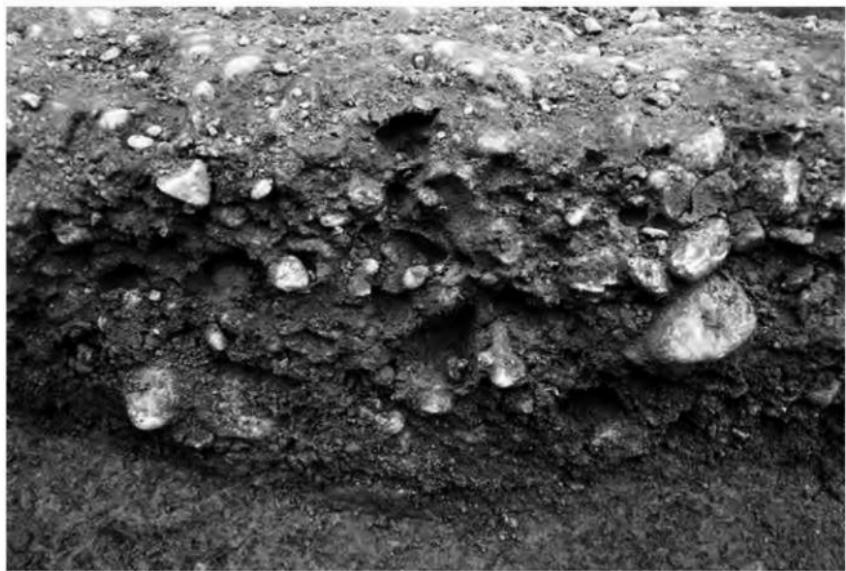
SD4土器検出状況(東から)



SD7検出状況(北から)



SD7断面状況(北西から)



SD7断面状況詳細(北から)



SK19検出状況(北から)



SK19焼土面検出状況(北から)



SK48土器検出状況(東から)



SK54土器検出状況(北西から)



SK54土器検出詳細状況(北西から)



SK2検出状況(南から)



SK2土器検出状況(南西から)



SK2土器検出状況(西から)



SK64検出状況(東から)



SK64土器検出状況(北東から)



SK64土器検出状況(南から)



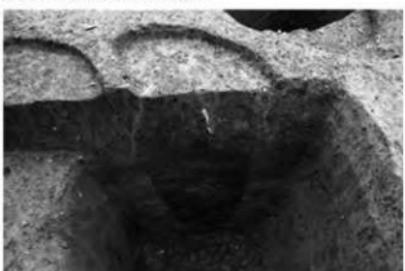
SP345上層土器検出状況(北西から)



SP345下層土器検出状況(南東から)



SP302断面状況(北から)



SP403断面状況(南西から)



SP455断面状況(南から)



SP462断面状況(南から)



SP463断面状況(南から)



SP463石群検出状況(南から)

写真図版 30



調査区南東部全景(西から)



SK1土器検出状況(南東から)



SK1土器検出状況(北西から)



SK1土器検出状況(西から)



SP480断面状況(北から)



SP624断面状況(西から)



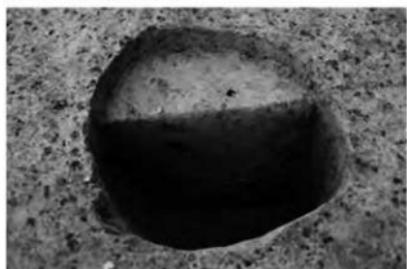
SP626断面状況(西から)



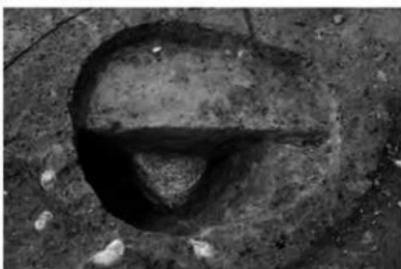
SB1・2・SA1検出状況(東から)



SP137断面状況(西から)



SP139断面状況(西から)



SP144断面状況(西から)



SP146断面状況(西から)



SP148断面状況(西から)



SP150断面状況(西から)



SP178根石検出状況(西から)

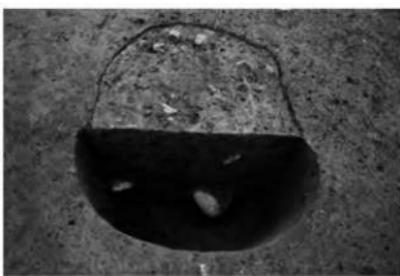
写真図版 32



SB3検出状況(南から)



SP355断面状況(西から)



SP336断面状況(西から)



SP337断面状況(西から)



SP342断面状況(西から)



SD6断面状況(西から)



SD6断面状況(西から)



調査区西壁断面(南東から)



調査区西壁断面詳細(東から)



調査区南壁断面(北西から)



調査区南壁断面詳細(北から)



現地指導状況(立命館大学 青木哲哉氏)



現地説明会状況



1



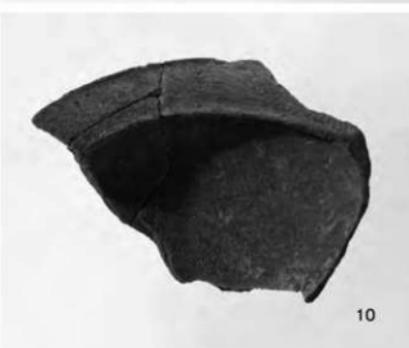
5



7



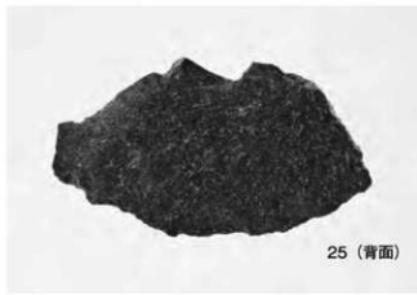
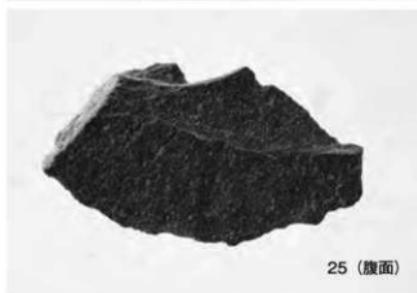
2

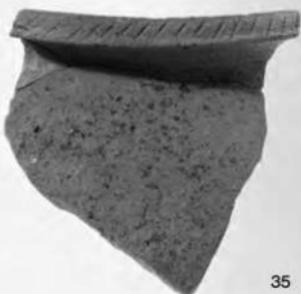


10



3







46



46



48



47



47



51



49



54





66



79



69



86



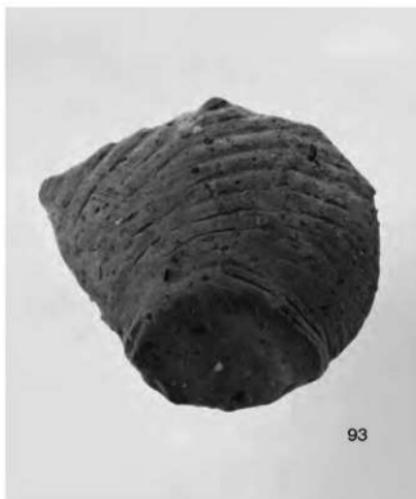
89



77



92



93



98



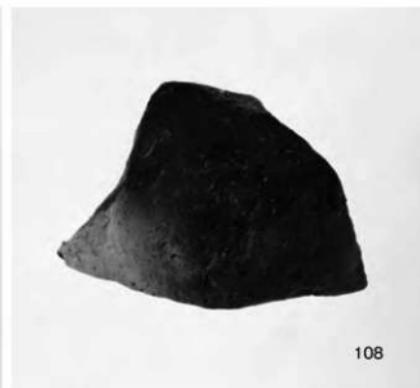
95



99



100





116



119



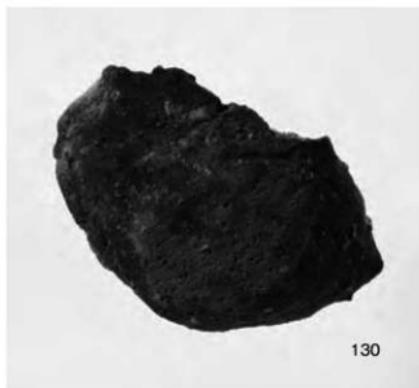
120



117



127



130



173



132



174



133



177





212



217



213



226



229



230



238



233



240



235



258



報告書抄録

ふりがな	わくいせき							
書名	和久遺跡							
副書名	第10次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第91集							
編著者名	山下大輝・福井優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和2年(2020)3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わくいせき 和久遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 あびしきわく 網干区和久	280201	202338	34° 50' 53"	134° 40' 16"	2017.9.20 ~ 2018.4.27	1,270m ²	病院新棟 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
和久遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴建物跡 溝・土坑・住穴	弥生土器 古式土器		20170250		
要約	弥生時代中期後半から古墳時代初頭までの竪穴建物跡を18棟検出し、これまでの第1次調査・第9次調査の成果を追認した。また調査区西側で確認した溝は、竪穴建物跡が展開する微高地と遺構が検出されなかった低地とを区画する性格を有することが明らかになった。 今回検出した溝により、和久遺跡における集落域西限を確認した可能性もあり、今後の調査成果が期待される。							

姫路市埋蔵文化センター調査報告第91集

和久遺跡

- 第10次発掘調査報告書 -

令和2年(2020年)3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本 小野高速印刷株式会社
〒670-0933 兵庫県姫路市平野町62番地

